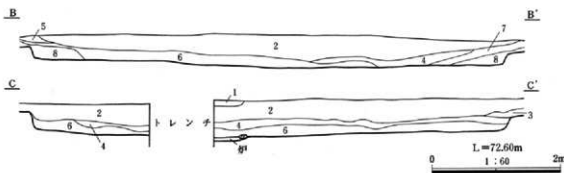
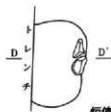


7号住居生活圏



7号住居

1. 灰黄褐色土。径1mm程のバミスを微量含む。
2. 黒褐色土。径1mm程のバミスを微量含む。
3. 暗褐色土。
4. 黒褐色土。炭粒を微量含む。
5. 褐色土。径1mm程のバミスを少量含む。
6. 暗褐色土。やや砂質。
7. 褐色土。径1mm程のバミスを微量含む。5層より暗い。
8. 褐色土。砂質。径5mm程のバミスを少量含む。

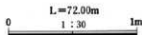


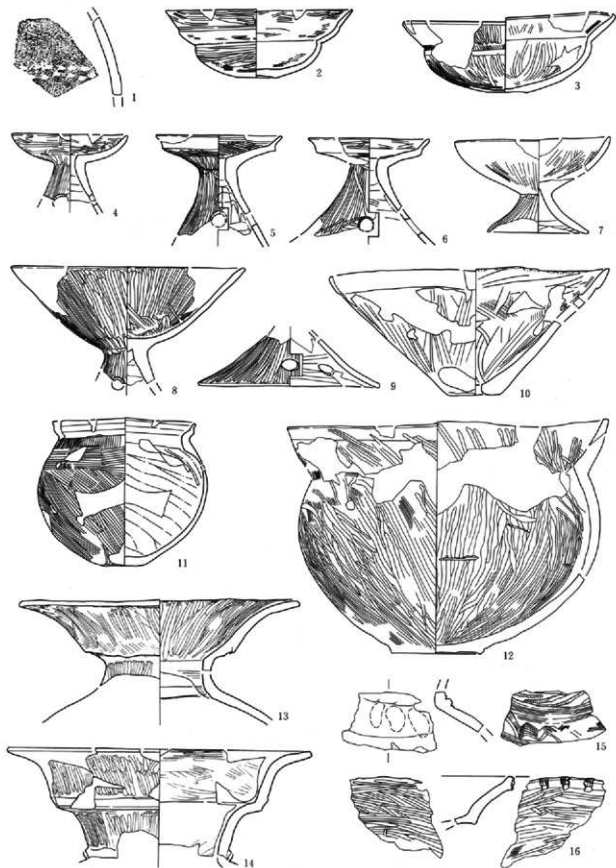
炉使用面



7号住居炉

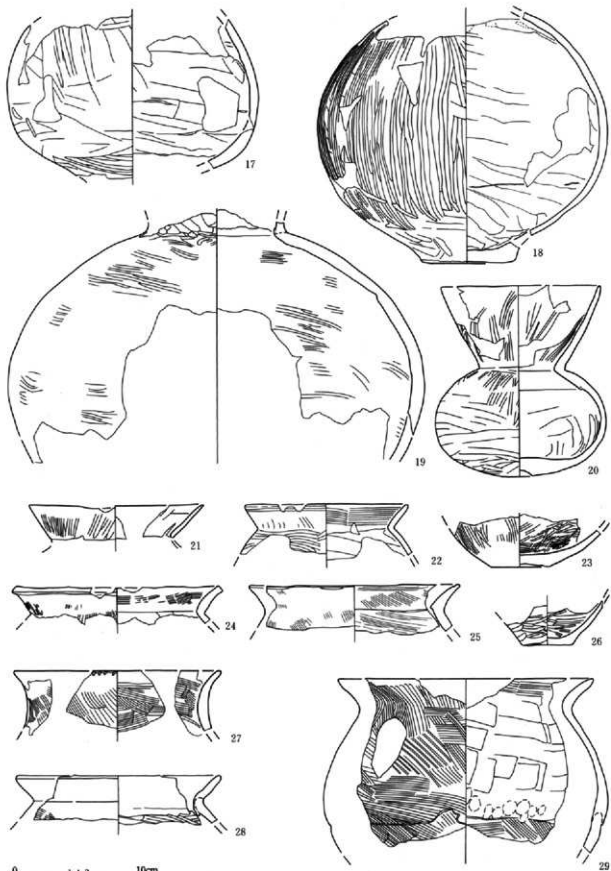
1. 黒褐色土。径1mm程のバミス・焼土粒を微量含む。
2. 黒色土。径1mm程のバミスを微量含む。





7号住居出土遺物

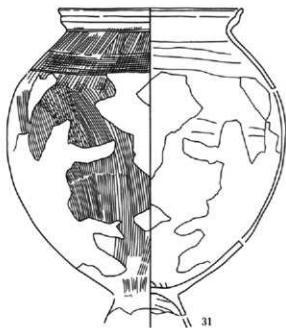
0 1:3 10cm



7号住居出土遺物



30



31



33



32

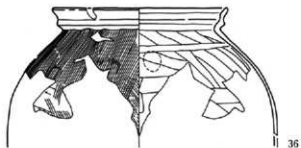


34

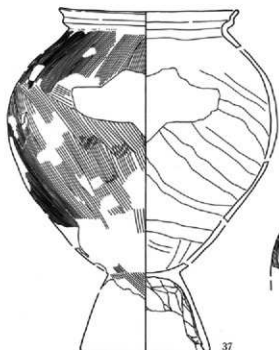
0 1:3 10cm



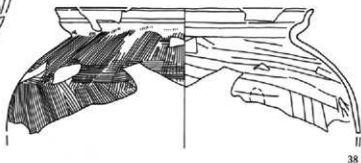
35



36



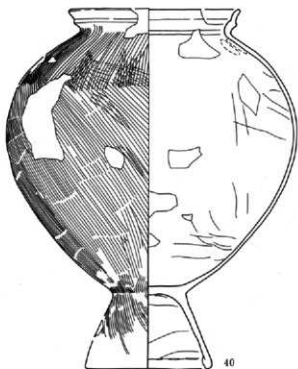
37



38



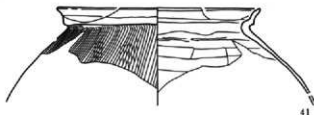
39



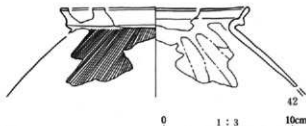
40

0 1:3 10cm

7号住居出土遺物



41



42

## 7号住居出土遺物

## 7号住居遺物観察表

番号	種類 器種	出土 位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	弥生土器 甕	埋没土	口径 - 底径 - 器高 6.1+	①粗砂、白色鉱物 ②普通 ③焼灰黄2.5Y5/2	外面 カナヅムラの施文に2条の竹管刺突文。 内面 横方向施文。	胴部破片。
2	土師器 鉢	+17~27、 825-400、 830-390	口径 (14.6) 底径 3.0 器高 5.4	①細砂、石英 ②良好 ③鈍い黄7.5YR7/4	大きく外反する有段口縁、口縁・胴部境の境は無い極めて甘い、底部内外浅く窪む、内外赤彩。外面 口縁部刷毛目後横溝で後横方向密な施磨き・最下位に刷毛目残す、胴部右方向刷毛目後密な施磨き・底部鋭削り後密な施磨き。内面 口縁部横溝で後横方向密な施磨き、胴部最上位横溝で後横方向密な施磨き。	口縁部3/4欠。 赤彩。
3	土師器 鉢	床面直上 ~+11、 埋没土	口径 16.7 底径 3.1 器高 6.4	①粗砂、石英、白色 鉱物 ②普通 ③鈍い黄緑10YR7/4	口縁端部に面。外面 口縁部縦溝で後横方向密な施磨き 以上に横溝で、肩部に刷毛目残す、胴部鋭削り後横方向 施磨き、底部円形に匙状工具で削り込む。内面 口縁部 横溝で後横方向施磨き、口縁部以下放射状鋭削り後横方 向施磨き。口縁部以下一体の施磨きの可能性。	口縁部1/4、胴 部一部欠。
4	土師器 器台	+10	口径 9.1 底径 - 器高 5.4+	①粗砂、石英、チャ ート ②良好 ③黄7.5YR7/6	円孔3ヶ所。外面 口縁部横溝で後器受部上半横方向・ 下半方向密な施磨き、胴部縦方向密な施磨き。内面 口 縁部横溝で後器受部密な施磨き、胴部左方向施磨き。	口縁部一部、 脚部下半欠。
5	土師器 器台	+21	口径 (9.6) 底径 - 器高 8.7+	①粗砂、軽石、石英 ②良好 ③鈍い黄緑10YR6/4	脚部円孔3ヶ所。外面 器受部口縁部下半・下半外縁横溝 で、脚部縦方向密な施磨き後器受部下半・中心縦方向密 な施磨き後斜斜方向施磨き。内面 口縁部横溝で後 器受部密な施磨き、脚部横溝で、中位に凹み。	口縁部 11/12、 脚部下半欠。
6	土師器 器台	+3、 埋没土	口径 (9.4) 底径 - 器高 7.8+	①粗砂、白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄緑10YR7/4	脚部円孔3ヶ所、器受部器表の摩滅が顕著。外面 口縁 部横溝で後横方向施磨き、器受部下半並列り後横方向密 な施磨き、脚部主に縦方向密な施磨き。内面 口縁部横溝で 後器受部密な施磨き、胴部鋭削り、脚部施磨きで横溝で、中位 に指頭圧痕。	器受部1/4、脚 部上半残。
7	土師器 高杯	床面直上	口径 12.2 底径 7.9 器高 7.7+	①粗砂、白色鉱物、 軽石、石英 ②普通 ③黄7.5YR5/6	器表の摩滅が顕著。外面 口縁部横溝で後杯部縦方向 施磨き、器部横溝で後脚部縦方向施磨き。内面 口縁部 横溝で後杯部縦方向施磨き、脚部施磨きで縦部横溝横溝。	杯部1/4、器部 1/2欠。
8	土師器 高杯	床面直上 ~+9、 埋没土	口径 (18.3) 底径 - 器高 9.4+	①粗砂、石英、黒色 鉱物 ②良好 ③黄7.5YR7/6	脚部円孔3ヶ所。外面 口縁部横溝で後杯~脚部縦方 向密な施磨き後器部施磨き。内面 口縁部横溝で後杯 部縦方向密な施磨き、脚部横溝で施磨き。	口縁部1/4、脚 部下半~胴部 上位残。
9	土師器 高杯?	床面直上 ~+14、 埋没土	口径 - 底径 14.3 器高 4.1+	①粗砂、軽石、石英、 白色鉱物 ②良好 ③鈍い黄緑10YR7/4	脚端部に面。円孔互目に上下各3ヶ所。外面 胴部横溝で後横方向密な施磨き。 内面 上下内面並列り後横方向無で、器部横溝で。	脚部上位・器 部1/4を欠いて 残。
10	土師器 有孔鉢	床面直上 ~+8、 埋没土	口径 21.8 底径 4.0 器高 10.1	①粗砂、石英、白色 鉱物 ②普通 ③黄7.5YR6/6	折り返し口縁。口縁部上外面指溝で内面指溝さえ。 外面 口縁部下半横溝で後胴部縦方向刷毛目後縦方向粗 い施磨き、底部無で。 内面 縦方向刷毛目後縦方向施磨きで一部筋状状。	口縁~胴部上 位1/4欠。
11	土師器 鉢	床面直上、 埋没土	口径 (11.2) 底径 3.4 器高 11.6	①粗砂、石英、白色 鉱物、軽石 ②普通 ③黄黄2.5Y8/4	外面 胴部左上方方向刷毛目・左下方刷毛目後左方向刷 毛目・口縁部横溝で、底部無で。 内面 斜方向内指溝で後口縁部横溝で。	口縁部1/4、胴 部1/2、底部 残。
12	土師器 鉢	床面直上 ~+19、 埋没土	口径 25.1 底径 7.1 器高 18.7	①濃、粗砂、石英、 白色鉱物 ②普通 ③黄緑7.5YR7/8	外面 口縁部横溝で、端部強い横溝で後斜方向施磨き、 胴~胴部斜方向刷毛目後胴部斜方向施磨き、底部鋭削り 後横で。内面 口縁部横溝で後斜方向施磨き、胴部以 下縦方向施磨き、胴部中・上位に輪痕み。	胴部3/4、胴部 上半1/2欠。
13	土師器 甕	832-383	口径 22.0 底径 - 器高 10.0+	①粗砂、細砂 ②良好 ③鈍い黄緑10YR7/4	下段短く屈曲し、上段大きく外反する二重口縁。上段最 下位に輪痕み、口縁部の一部に赤彩。外面 口縁部上 段斜方向刷毛目後胴部横溝で後横方向施磨き、下段斜 方向刷毛目後上段輪痕み後横方向密な施磨きで後横方向施磨き、 胴部斜方向刷毛目後縦方向密な施磨き。内面 口縁部 横溝で後横方向密な施磨きで後下段上半以上縦方向施磨 き、下段最下位に輪痕み、胴部横溝で後横で。	口縁部1/4を 欠いて口縁~ 胴部最上位 残。赤彩。

下増田常木遺跡

14	土師器 壺	埋没土・ 3E埋没土 820-825- 390-395、 遺跡外	口径 (23.7) 底径 - 器高 8.7+	①粗砂、石英 ②良好 ③明褐色5YR5/6	上下とも大きく外反する二重口縁、下段上端突帯状、頸部に突帯の淵痕。外面 口縁部・下段上縁縁部で後縦方向に走り、下段最上位横方向に走り、内面 上段横方向に走り、下段横方向に走り、下段最下位左下方向に走り。	口縁部1/9、 口縁部3/8残。
15	土師器 壺	埋没土	口径 - 底径 - 器高 3.3+	①粗砂、石英 ②普通 ③褐色10YR4/1	外面 頸部突帯部付後縦状工具で削製、胴部上段平縁状文後中段状文後下段平縁文。 内面 裏で、胴部最上位に指痕。	頸-胴部上位 破片。
16	土師器 壺?	埋没土	口径 (25.0) 底径 - 器高 3.8+	①粗砂、白色鉱物 ②良好 ③淡黄褐色2.5YR7/4	下位が大きく外反し、上位は屈曲したの外湾する。口縁部は直に立ち上がるが外面浅く窪む。外面 口唇部挿んで口縁部横縁部で後粘土粒付し上下縁部でつけ懸状工具で上下2段削製、上位横方向で後縦方向に走り、下位横方向に走り、下位横方向に走り、内面 口縁部横縁部で、以下縁で後縦方向に走り。	破片。高杯・器台の可能性。
17	土師器 壺	床面直上 ~+14、 埋没土	口径 - 底径 - 器高 12.8+	①粗砂、細砂 ②普通 ③褐色5YR7/6	器表の摩滅が顕著。 外面 刷毛目後縦・横方向に走り。 内面 横方向に走り、輪積み痕2段。	胴部中・下位 残。
18	土師器 壺	+6~19、 埋没土、 840-390	口径 - 底径 7.5 器高 19.1+	①粗砂、細砂 ②普通 ③褐色5YR6/5	外面 胴部斜方向に走り、後縦方向に走り、底部縁で一部削製。 内面 斜方向に走り、胴部最上位指痕。	胴部以下残。
19	土師器 壺	床面直上、 埋没土	口径 - 底径 - 器高 20.0+	①粗砂、白色鉱物、 石英 ②良好 ③淡黄褐色2.5YR8/3	器表の摩滅が顕著。外面 頸部部で、胴部横方向に走り、後縦方向に走り、内面 斜方向に走り、後縦方向に走り、底部縁で、内面 口縁部横縁部で後縦方向に走り、胴部最上位に輪積み痕。	頸部一部、胴部上・中位 1/2残。
20	土師器 壺	+6~19、 埋没土、 835-400	口径 12.6 底径 2.0 器高 15.0	①粗砂、細砂 ②良好 ③鈍い黄褐色10YR7/4	口縁部弱く内湾。外面 縦方向に走り、後縦方向に走り、胴部上半縁方向に走り、後縦方向に走り、下半縁方向に走り、底部縁で、内面 口縁部横縁部で後縦方向に走り、胴部最上位に輪積み痕。	口縁部1/4、胴部一部欠。
21	土師器 壺	床面直上 ~+11、 埋没土	口径 14.0 底径 - 器高 2.8+	①細砂、石英 ②普通 ③明赤褐色2.5YR5/6	器内が薄い。器表の摩滅が顕著。 外面 口縁部横縁部で後斜方向に走り。 内面 口縁部横縁部で後斜方向に走り。	口縁部3/4残。
22	土師器 壺	埋没土、 825-395	口径 (12.8) 底径 - 器高 4.2+	①粗砂、細砂 ②普通 ③褐色2.5YR6/6	外面 口縁-頸部縁方向に走り、口縁部横縁部で、頸部刷毛目状、胴部横方向に走り、内面 口縁部横方向に走り、後縦縁部で、胴部横方向に走り。	口縁部1/4、胴部1/2、底部残。
23	土師器 壺	埋没土	口径 - 底径 4.6 器高 4.1+	①礫、粗砂、軽石、チャート、石英 ②良好③鈍い黄褐色10YR7/4	外面 胴部縦方向に走り、一部器表が摩滅、底部外縁円形に削製り後中央部削製。 内面 縦・斜方向に走り。	胴部下位-底部 残。
24	土師器 壺	+16、 埋没土	口径 (16.4) 底径 - 器高 3.0+	①粗砂、軽石 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR6/4	口縁部に面。外面 口縁部下段以下下段方向に走り、口縁部横縁部で、内面 口縁部横方向に走り、後縦縁部で、胴部斜方向に走り、後縦縁部で。	口縁部最上位 3/8残。
25	土師器 壺	+30	口径 (16.4) 底径 - 器高 4.0+	①粗砂、石英、白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR7/3	口縁部に弱い面。 外面 斜方向に走り、口縁部横縁部で、内面 口縁部斜・横方向に走り、後縦縁部で、胴部横方向に走り、後縦縁部で、頸部横方向に走り。	口縁-胴部最 上位1/4残。
26	土師器 壺	+18	口径 - 底径 3.9 器高 3.5+	①粗砂、白色鉱物、 石英 ②良好 ③鈍い黄褐色10YR7/3	縦く内湾しながらシャープに立ち上がる。 外面 横方向に走り、底部縁部で後縦方向に走り、内面 胴部横方向に走り、底部縁部で後縦方向に走り。	胴部最下位- 底部残。
27	土師器 壺	床面直上、 埋没土	口径 (16.2) 底径 - 器高 5.1+	①粗砂、石英、軽石 ②普通 ③鈍い赤褐色2.5YR4/1	外面 左上方向に走り、後半横縁部で後口唇部状工具で削製。 内面 左方向に走り、後縦縁部で。	口縁部上半 1/4下半1/2残。
28	土師器 壺	+15	口径 (16.0) 底径 - 器高 3.9+	①粗砂、白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR7/4	口縁部に強い面。外面 口縁部横縁部で、胴部刷毛目後縦方向に走り。内面 口縁部横縁部で、頸部輪積み痕、胴部一部刷毛目状の発掘で。	口縁-胴部最 上位1/8残。
29	土師器 壺	+14	口径 (20.0) 底径 - 器高 13.6+	①細砂、軽石、石英 ②普通 ③褐色5YR6/5	胴部中位内外面に輪積み痕、口縁部部を横む。 外面 輪積み後口縁部以下縦・斜方向に走り。 内面 口縁部刷毛目後胴部上位横方向に走り、輪積み端部指痕、輪積み痕以下横方向に走り。	口縁部一部、 胴部上 半1/4 残。
30	土師器 台付壺	床面直上 ~+19、 埋没土、 830-850- 390-400	口径 (18.6) 底径 - 器高 28.3+	①粗砂、白色鉱物 ②良好 ③鈍い黄褐色10YR7/4	口縁下段から上段へシャープに立ち上がり外面上段下縁に輪積み痕、内面上段上半に面。外面 口縁部横縁部で、胴部上方向に走り、後縦方向に走り、内面 口縁部横縁部で、頸部横方向に走り、胴部上位縦方向に走り、中位以下横・斜方向に走り。	口縁部1/4、胴部3/4残。
31	土師器 台付壺	+10~15、 埋没土、 830-400	口径 14.5 底径 - 器高 24.1+	①粗砂、石英 ②良好 ③褐色5YR7/8	内面口縁部の一部に面、頸部の一部に沈積。外面 口縁部横縁部で、胴部左上方に走り、後縦方向に走り、左方向に走り、胴部の一部に沈積、台部斜方向に走り、器表の摩滅が顕著。内面 口縁部横縁部で、胴部横方向に走り、後縦縁部で、底部に懸状工具痕、台部痕。	胴部3/4、台部 下半欠。
32	土師器 台付壺	床面直上 ~+9、 埋没土	口径 16.4 底径 - 器高 27.9+	①粗砂、細砂 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR7/4	口縁部が直に立ち上がる。外面 口縁部横縁部で、胴部左上方に走り、後縦方向に走り、内面 口縁部横縁部で、頸部強い横縁部で、頸部横方向に走り、後縦縁部で、胴部上半縁方向に走り、下半縁で。	胴部1/2、台部 欠。

33	土師器 台付葉	+1~6、 埋没土	口径 — 底径 9.8 器高 29.9+	①粗砂、細砂 ②普通 ③黄褐色10YR7/6	外面 胴部左上方向刷毛目後左下方向刷毛目、胴部最下位~台部上半右方向刷毛目。内面 胴部側で、底部貼付粘土刺刺痕、台部斜方向側で後下半横方向側で、上面貼付粘土刺刺痕、裾部折り返し。	胴部上半1/4~下半3/4、台部残。
34	土師器 台付葉	+17	口径 — 底径 8.7 器高 5.9+	①粗砂、白色鉱物 ②良好 ③黄褐色10YR8/3	裾部部に面。外面 上位側で後胴部と接合、縦方向刷毛目後裾部横溝で。内面 上面側で、以下横方向刷毛目後裾部横溝で。	台部残、 臍口跡。
35	土師器 台付葉	床面直上、 埋没土	口径 (16.2) 底径 — 器高 3.0+	①粗砂、石英 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR5/3	口径が下段から上段にシャープに立ち上がり、口径内面に僅かに窪む面をもつ。外面 口径部横溝で、胴部以下後下方向刷毛目。内面 口径部横溝で、胴部以下側で。	口径~胴部最 上位1/4残。
36	土師器 台付葉	床面直上 ~+27、 埋没土、 830-390	口径 13.8 底径 — 器高 10.2+	①礫、粗砂、細砂、 白色鉱物 ②普通 ③黄褐色10YR4/2	外面 匏形り後左上方向刷毛目後左下方向刷毛目後口径部横溝で。内面 胴部指頭圧痕・斜方向指撫で後横方向指撫で、胴部指撫で後口径部横溝で・端部強い指撫でで中央が窪む面をもつ。	口径~胴部上 位残。
37	土師器 台付葉	+14~18、 埋没土、 830-405、 830-445	口径 14.3 底径 (10.3) 器高 27.2	①粗砂、細砂、石英 ②良好 ③橙7.5YR6/6	外面 口径部横溝で、胴部左上方向刷毛目後左下方向刷毛目、胴部最下位~台部右下方向刷毛目。内面 口径部横溝で、胴部横溝方向側で、台部側で・裾部折り返し・上面に粘土貼付痕。	胴部1/4、台部 3/4欠。
38	土師器 台付葉	床面直上 ~+3、 埋没土	口径 (20.2) 底径 — 器高 10.0+	①粗砂、軽石 ②普通 ③橙2.5YR6/6	外面 口径部横溝で、胴部左上方向刷毛目後左下方向刷毛目後左下方向刷毛目。内面 口径部横溝で、胴部縦方向指撫で・唇部指頭圧痕後横方向指撫で後胴部側で。	口径~胴部上 位残。
39	土師器 台付葉	+11~19、 埋没土、 825-390、 15土埋没 土	口径 (15.1) 底径 — 器高 29.8+	①粗砂、石英 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR7/4	外面 口径部横溝で、胴部左上方向刷毛目後左下方向刷毛目、胴部最下位~台部右下方向刷毛目。内面 口径部横溝で、胴部上半縦方向指撫で後横溝で、胴部下位縦・横方向指撫で、胴部下位に輪積み痕、台部縦方向指撫で、底部~台部上面に粘土貼付痕。	口径部1/2、台 部下半欠。焼 きはね。
40	土師器 台付葉	+3~11、 埋没土	口径 (13.5) 底径 10.1 器高 28.3	①細砂 ②良好 ③淡黄2.5Y8/3	外面 口径部横溝で、胴部匏形り後左上方向刷毛目後左下方向刷毛目、台部側で後右下方向刷毛目・端部折り返し。内面 口径部横溝で、胴部側で。	口径部3/6、胴 部1/8、台部 1/2欠。
41	土師器 台付葉	+15~22、 埋没土、 830-386	口径 16.0 底径 — 器高 6.8+	①細砂、粗砂 ②普通 ③淡黄褐色10YR8/4	外面 胴部以下方向刷毛目後口径部横溝で。内面 胴部側で後口径~胴部側横溝で。	口径~胴部上 位残。
42	土師器 台付葉	+5~14、 埋没土、 825-400	口径 14.8 底径 — 器高 5.2+	①細砂、粗砂 ②普通 ③黄褐色10YR5/23	外面 口径部横溝で・端部を強く横溝で僅かに面をもつ、胴部下方向刷毛目。内面 口径部横溝で、胴部縦方向指撫で後側で。	口径部3/4、胴 部上位残。

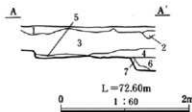
## 8号住居(PL. 86・87・102~104)

**位置** 820・825~390・395 **重複** 8号住居→9号住居、プラン確認により8号住居→4号溝 **形状** 隅丸方形、南壁は9号住居に切られる。 **規模** 5.54×5.1+m **面積** 22.0+m<sup>2</sup> **方位** 22° **埋没土** Aラインでは9号住居埋没土(6・7層)が8号住居床面レベルで大きく攪乱(3・4層)を受けて削られる。 **床面** 確認面から18cm下で床面となる。掘り方はなく、全体を平坦に掘り下げてそのまま床面とする。北壁から南壁に向かって10cmほど低くなり、南西隅に炭と焼土が分布する。 **壁溝** 確認できなかった。 **竈** 東壁南寄りに設置する。壁付近が深い不整形で西へ浅く楕円状にのびる掘り方を設け、黒褐色土で埋め戻して形状を整える。袖は粘質土を芯に用いて構築し、上端の長さが南北とも60cm残存する。燃

焼部は長さ75cm、幅46cmで壁内に位置し、焚き口部に向かって幅が広がる。中央には河床礫を掘り方へ縦に据えて支脚とする。煙道は約60°で立ち上がる。袖構築に用いた土が壁外でも検出され、高さが確認面より12cm、幅が壁より24cm残存する。検出状況から、煙道出口はBライン10層内壁側立ち上りの延長上で、壁付近に位置したと推定する。燃焼部内から裏、北袖脇から灰が出土した。また、南袖脇の床面直上には灰が堆積していた。焼土はなく、竈内の灰を掻き出してこの場に置いたと思われる。 **貯蔵穴** 確認できなかった。 **柱穴** 確認できなかった。 **遺物** 南東隅で土師器杯に鉢が重なった状態で出土したほか、2号住居と接合する土師器甕、砥石、30個以上の河床礫などが出土した。 **所見** 出土遺物から5世紀後半と考えられる。



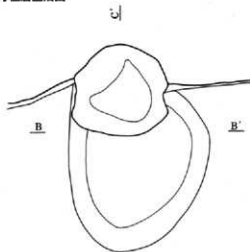
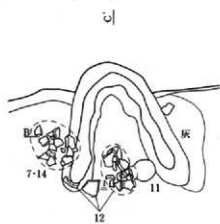
下増田常木遺跡



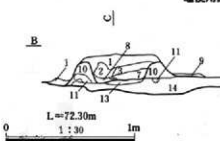
8号住居

1. 鈍い黄褐色土。砂質。径5mm以下のパミスを均一に微量含む。9号住居1層に相当。
2. 暗褐色土。砂質。径5mm以下のパミスを均一に微量含む。9号住居2層に相当。
3. 黒褐色土。しまりがやや強い。径5mm以下のパミスを均一に微量含む。9号住居3層に相当。
4. 黒褐色土。しまりがやや強い。径5mm以下のパミスを均一に微量含むが3層より少ない。9号住居5層に相当。
5. 黒褐色土。しまりが弱い。
6. 黒褐色土。しまりが強い。径1mm程のパミスを微量含む。9号住居6層に相当。
7. 鈍い黄褐色土。砂質。9号住居7層に相当。

8号住居生活面



竈使用面



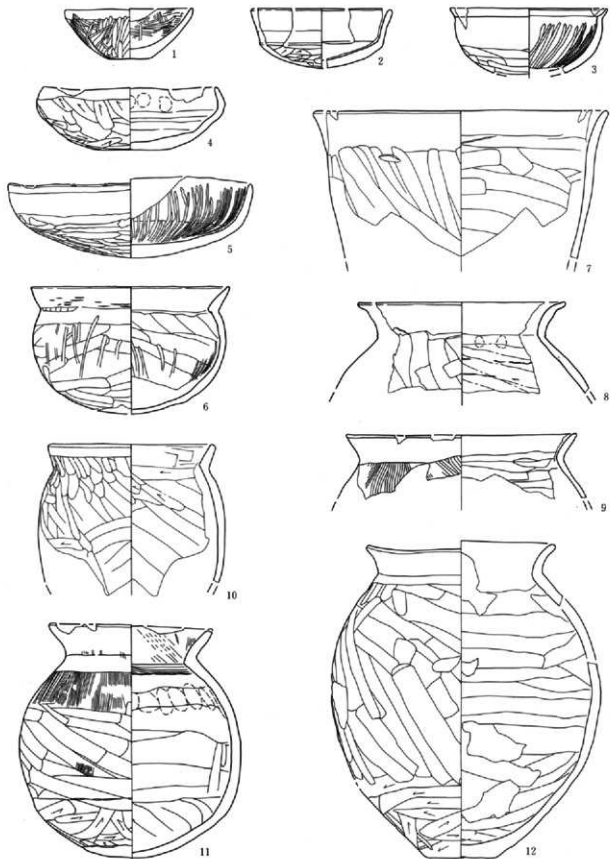
竈掘り方

4. 褐色土。やや粘質。径1mm程のパミスを微量。焼土粒を均一に少量含む。天井の崩落。
5. 褐色土。やや粘質。しまりが強い。
6. 黒褐色土。焼土粒を少量含む。
7. 赤褐色土。粘質。しまりが強い。天井の崩落。
8. 黒褐色土。しまりが強い。明黄褐色土粒を均一に少量含む。
9. 黒色土。しまりが強い。灰を多量含む。
10. 鈍い黄褐色土。袖部。
11. 明黄褐色土。粘質。
12. 黒褐色土。焼土粒をやや多量含む。
13. 黒褐色土。焼土ブロックを少量含む。
14. 黒褐色土。

8号住居竈

1. 黒褐色土。しまりが強い。径1mm程のパミスを微量含む。
2. 黒褐色土。径1mm程のパミスを微量。焼土粒を均一に少量含む。
3. 明黄褐色土。やや粘質。天井の崩落。

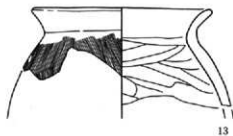
1. 住居



8号住居出土遺物

0 1:3 10cm

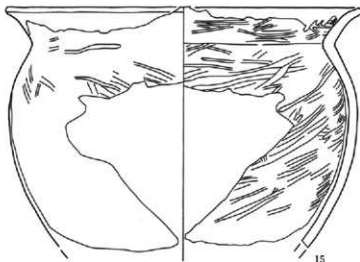
下増田常木遺跡



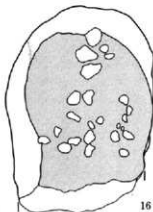
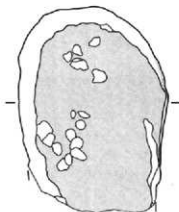
13



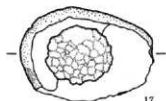
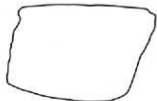
14



15



16



17



8号住居出土遺物

8号住居遺物観察表

番号	機器	出土位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 杯	床面直上、 遺構外	口径 10.1 底径 3.2 器高 4.1	①粗砂、粗砂、石英、 白色灰物 ②良好 ③橙7.5YR7/6	内外面黒色処理。 外面 口径部横撫で後体～底部磨き。 内面 口径部横撫で後体～底部磨き。	口径部3/8欠。 黒色処理。
2	土師器 杯	床面直上、 埋没土	口径 (11.1) 底径 — 器高 4.7	①礫、粗砂 ②普通 ③明赤褐2.5YR5/8	外面 口径部横撫で、底部磨削り。 内面 口径部横撫で、底部推で。	1/8残。
3	土師器 杯	+11、 825-400	口径 (12.3) 底径 — 器高 3.1+	①礫、粗砂、軽石 ②普通 ④明赤褐2.5YR5/6	外面 口径部横撫で、体部右方向磨削り後上半横方向撫で。 内面 口径部横撫で、体部横方向撫で後放射状磨き。	口径～体部中位1/4残。

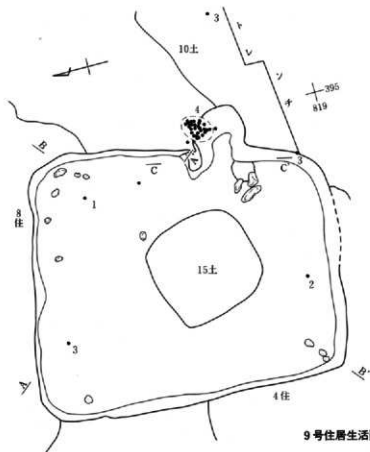
## 1. 住居

4	土師器 杯	+8、 埋没土 820-400	口径 (13.6) 底径 (5.0) 器高 4.9+	①細砂、黒色鉱物、 軽石 ②普通 ③鈍 い赤褐色25YR4/4	体部中位で外周、口縁部内側。 外面 口縁部横溝で、体～底部彫削り後撫で。 内面 口縁部指頭圧痕後横撫で、体～底部撫で。	口縁部3/8、体 ～底部1/2残。
5	土師器 杯	+4	口径 18.9 底径 - 器高 4.9+	①粗砂、石英、白、黒色 鉱物、軽石 ②普通 ③明赤褐色5YR5/6	外面 口縁部横溝で、上縁強く横撫で、体～底部彫削り 後撫で。 内面 口縁部横撫で後放射状の磨き。	口縁部1/4欠。
6	土師器 鉢	+5	口径 15.4 底径 - 器高 10.1	①礫、粗砂、石英、 軽石 ②普通 ③普通	外面 口縁部横撫で、頸部下方彫削り後横撫で、胴部 左方向彫削り後胴部上半に粗い磨き。 内面 口縁部横撫で、胴部左上方彫削り後左方向磨撫 で後左上方磨き。	底部一部欠。
7	土師器 瓶	床面直上、 層+14、重 埋没土	口径 (23.1) 底径 - 器高 11.7+	①粗砂、白色鉱物、 石英、軽石 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 口縁部横撫で後胴部下方彫削り。 内面 口縁部横撫で、胴部左方向磨撫で。	口縁～胴部上 半1/4残。
8	土師器 甕	埋没土	口径 (16.2) 底径 - 器高 7.2+	①粗砂、軽石、石英 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR5/4	口縁端部強く外反。外面 腹～胴部上方方向彫削り後口 縁部横撫で。内面 口縁部横撫で、胴部最上位指頭圧痕 後胴部磨撫で、輪郭直視。	口縁～胴部上 位1/4。
9	土師器 甕	+6、 2住+4	口径 (18.1) 底径 - 器高 6.1+	①粗砂、白色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR7/6	外面 口縁部斜方向刷毛目後横撫で、胴部縦方向刷毛目。 内面 口縁部横撫で、胴部横方向磨撫で。	口縁～胴部最 上位1/4残。
10	土師器 甕	+9	口径 (13.2) 底径 - 器高 10.9+	①粗砂、石英 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 磨撫で一部彫削り後口縁部横撫で。 内面 口縁部磨撫で後横撫で、胴部磨撫で一部彫削り。	口縁～胴部上 半1/4残。
11	土師器 甕	層+3	口径 12.9 底径 - 器高 13.1	①粗砂、石英、白色 鉱物 ②良好 ③鈍い黄褐色10YR7/4	外面 口縁～胴部上位縦方向刷毛目後横撫で、胴部中位以下 左上方彫削り、底部彫削り。 内面 口縁部左上方刷毛目後横撫で、胴部最上位横方向 刷毛目、胴部上位指頭圧痕後胴部磨撫で。	口縁部一部 欠。
12	土師器 甕	層+1～ 7、埋没 土	口径 14.8 底径 5.2 器高 25.0	①粗砂、石英、白色 鉱物 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR7/4	外面 胴部最上位下方向彫削り後口縁～胴部横撫で、胴 部上～中位左上方向彫削り、胴部下位～底部彫削り。 内面 口縁部横撫で、胴～底部磨撫で。	口縁部1/8、胴 部一部欠。
13	土師器 甕	+5	口径 14.1 底径 - 器高 7.8+	①粗砂、軽石、黒色 鉱物 ②良好 ③明褐色7.5YR5/6	外面 胴部上位縦方向・中位横方向刷毛目後口縁部横撫 で。 内面 胴部横方向磨撫で後口縁部横撫で。	口縁～胴部上 半残。
14	土師器 甕	層+14	口径 - 底径 (6.6) 器高 4.0+	①粗砂、白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR4/3	外面 胴部斜方向彫削り後横撫で、底部彫削り後横撫で。 内面 磨撫で。	胴部下位～底 部1/2残。
15	土師器 甕	+15	口径 (27.9) 底径 - 器高 18.9+	①礫、粗砂、石英、 チャート ②普通 ③橙7.5YR6/6	器表の摩滅が顕著。外面 口縁部横撫で後磨き、胴部 左上方向彫削り後磨き。内面 口縁部横撫で後磨き 、胴部磨撫で後磨き。	口縁部～胴部 上半3/8残。
16	石製品 砥石	+11	長さ 16.1+ 重量 1383.5	幅 11.6 厚さ 9.9 粗粒輝石安山岩	自然礫を使用。3面に磨面、粗砥。	一部欠。
17	石製品	埋没土	長さ 10.5 重量 259.5	幅 7.5+ 厚さ 4.7 粗粒輝石安山岩	凹石状の加工痕の周辺に平磨面をもつ。中近寄部器材の 未製品の可能性。	一部欠。

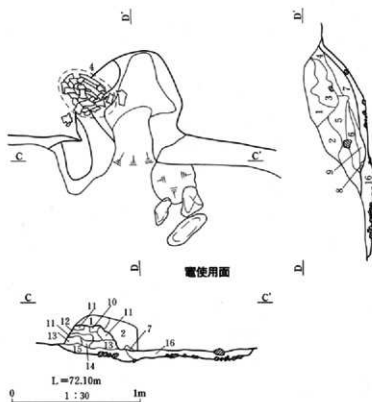
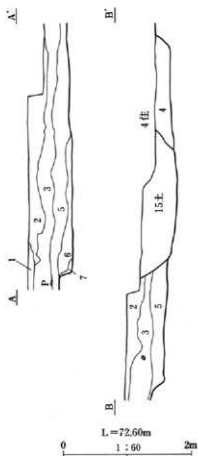
## 9号住居(PL.87-88-104)

位置 815・820-390・395 重複 8号住居→9号  
住居→4号住居→10号土坑、9号住居→15号土坑  
形状 南壁が北壁より短い隅丸台形 規模 4.93×  
4.27m 面積 16.6m<sup>2</sup> 方位 13° 埋没土 9号  
住居の埋没土(4・6・7層)を8号住居側から流入し  
てきた攪乱(3・5層)が削り込む。Aラインに8号  
住居の立ち上がりは確認できない。床面 確認面  
より27cm下で床面となる。掘り方はなく、全体を平  
坦に掘り下げてそのまま床面とする。中央付近を15  
号土坑で切られる。砂質で、床下は程なく礫層に達  
する。壁溝 確認できなかった。電 東壁南寄  
りに設置する。壁付近に位置し、壁外よりも壁内に

大きく広がる浅い掘り方を黒褐色土で埋め戻して形  
状を整える。袖は粘質土で構築する。北は上端で長  
さ32cm残存するが、南は破壊されていた。南袖付近  
から出土した河床礫は扁平で一部に被熱による赤化  
が認められ、天井の構築材であったと考えられる。  
燃焼部は長さ46cm、幅30cmで壁外に位置し、部分的  
に灰層を検出した。煙道は35°でなだらかに立ち上  
がる。北袖付け根付近の窺内外から土師器甕がまと  
まって出土した。窺破壊後の廃棄であろう。貯蔵  
穴 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。  
遺物 土師器甕、須恵器杯・盤が出土した。  
所見 出土遺物より8世紀後半と考えられる。



9号住居生活面



電使用面

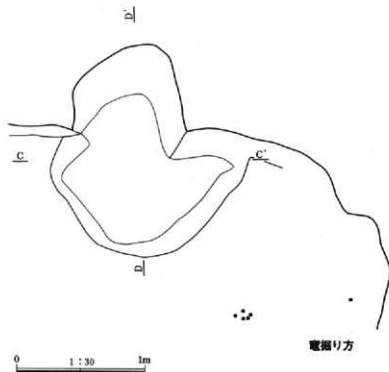
9号住居

1. 鈍い黄褐色土。砂質。径5mm以下のパミスを均一に微量含む。8号住居1層に相当。
2. 暗褐色土。砂質。径5mm以下のパミスを均一に微量含む。8号住居2層に相当。
3. 黒褐色土。しまりがやや強い。径5mm以下のパミスを均一に微量含む。8号住居3層に相当。
4. 黒褐色土。しまりがやや弱い。褐色・橙色粘土ブロックを少量含む。
5. 黒褐色土。しまりがやや強い。径5mm以下のパミスを均一に微量含むが3層より少ない。8号住居4層に相当。
6. 黒褐色土。しまりが強い。径1mm程のパミスを微量含む。8号住居6層に相当。
7. 鈍い黄褐色土。砂質。8号住居7層に相当。

9号住居窟

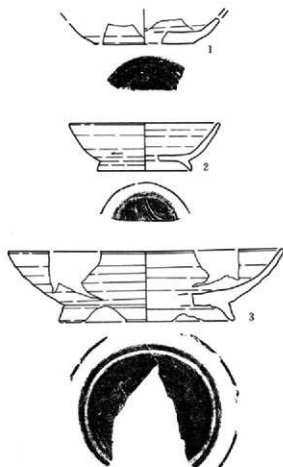
1. 暗褐色土。径1mm程のパミス・焼土粒を少量含む。
2. 黒褐色土。径1mm程のパミスを少量含む。
3. 鈍い黄褐色土。粘質。径4cm程の焼土ブロックをやや多量。径3mm程のパミスを微量含む。天井の崩落。
4. 黒褐色土。径1mm程のパミス・焼土粒を少量含む。
5. 暗褐色土。焼土粒を少量。径1mm程のパミスを微量含む。

1. 住居

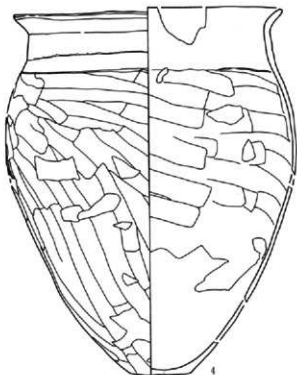


電掘り方

6. 鈍い黄褐色土。粘質。しまりがやや強い。径4cm程の焼土ブロックを多量、径3mm程のバミスを少量含む。天井の崩落。
7. 灰黄褐色土。粘質。しまりが弱い。焼土粒を多量含む。
8. 黒色土。しまりが強い。灰層。
9. 黒色土。しまりが弱い。灰をやや多量、焼土粒を少量含む。
10. 鈍い黄色土。粘質。しまりが強い。焼土ブロックをやや多量含む。
11. 鈍い黄色土。粘質。しまりが強い。
12. 黒褐色土。径3cm程の焼土ブロックをやや多量含む。
13. 暗褐色土。やや粘質。焼土粒をやや多量、径1mm程のバミスを微量含む。
14. 暗褐色土。やや粘質。粘質の鈍い黄色土を均一に微量含む。10-14層まで袖部。
15. 黒褐色土。黄褐色砂質土をやや多量含む。
16. 黒褐色土。しまりが強い。焼土粒・炭粒を少量含む。



9号住居出土遺物

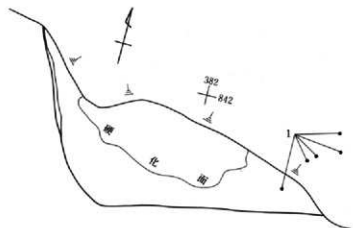


## 9号住居遺物観察表

番号	種類	出土位置	計測値	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、或・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 杯	+8	口径 - 底径 (7.6) 器高 1.9+	①粗砂、白色灰物 ②還元層 ③暗オリーブ灰2.5GY4/1	外面 体部輪縁整形、底部右回転削り。 内面 輪縁整形。	体部下半1/8、 底部1/4残。
2	須恵器 杯	+6	口径 (11.6) 底径 (7.2) 器高 3.7	①粗砂 ②還元層、堅微 ③灰 NS/	外面 輪縁成形後体部下左方向回転削り後口縁横撫で、底部右回転削り、高台周縁貼付時の回転削り。 内面 輪縁成形後口縁・底部外縁回転削り。	3/8残。
3	須恵器 盤	+2、 遺構外	口径 (21.4) 底径 (13.6) 器高 5.6+	①粗、白色灰物 ②還元層 ③灰白 N7/	外面 体部輪縁整形、底部横撫で、高台周縁貼付時の回転削り、底部外縁に沈線状の窪み。 内面 底部中央撫で後体部～底部外縁輪縁整形。	体部下半3/8、 底部3/4残。
4	土師器 甕	電+14	口径 21.0 底径 (4.7) 器高 28.7	①粗砂、白色灰物、 石灰 ②普通 ③暗赤褐色5YR3/3	口縁面「V」の字状、口縁端部に面をもつ。外面 口縁部横撫で、胴部上位左上方、中位以下上方削削り、底部削削り。内面 口縁部横撫で、胴部以下横撫で。	口縁部1/8、胴 部下半1/4、底 部外縁1/2残。

## 10号住居(PL. 88-104)

位置 835・840-375・380 重複 10号住居→1号  
土器集積、1号土器集積は10号住居確認面より上位  
で検出。形状 後世の削平を受けて地山が北側へ  
落ち込むため、南西隅部を検出したのみである。  
規模 4.43×2.88m 面積 5.0m<sup>2</sup> 方位 西壁で  
-22° 床面 確認面が低く壁高を確認できたのは



10号住居生活面

西壁の一部のみで、6 cmである。掘り方はなく、全  
体を平坦に掘り下げてそのまま床面とする。壁際を  
除いて硬化面が広がる。壁溝 確認できなかった。  
炉 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。  
柱穴 確認できなかった。遺物 土師器器台  
が出土した。所見 出土遺物より古墳時代前期と  
考えられる。



10号住居出土遺物

## 10号住居遺物観察表

番号	種類	出土位置	計測値	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、或・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 器台	床面直上、 840-385	口径 (19.5) 底径 (14.6) 器高 12.3	①粗砂、細礫 ②普通 ③鈍い褐7.5YR5/4	結合器台。杯部が大きく外湾する。杯部下手に円孔3ヶ 所残存。胸部円孔3ヶ所。外面 各口縁・裾端部横撫 で、他刷毛目後縦方向磨き。内面 各口縁・裾端部 横撫で、杯部縦方向・器受部放射状磨き、脚部上位削 削り、脚部中位以下縦・斜方向磨き。	杯部1/8、器台 部1/2残。

## 11号住居(PL. 88-104)

位置 835・840-370-375 重複 なし。形状 後

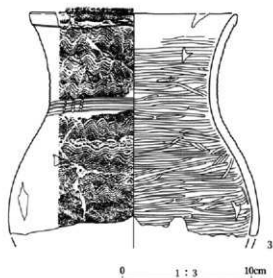
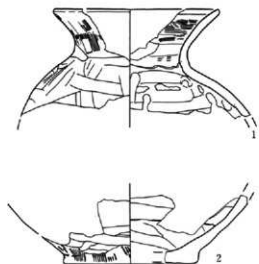
世の削平を受けて地山が北側へ落ち込むため、南西  
隅部中心に検出したのみである。A区調査時には確

認できなかった。規模 2.96×3.12m 面積 4.8㎡ 方位 西壁で-12° 床面 確認面より9cm下で床面となる。掘り方はなく、全体を平坦に掘り下げてそのまま床面とする。炭の分布が広く認められる。壁溝 確認できなかった。炉 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。遺物 南西隅に分布が集中し、住居内外から土師器壺が出土した。住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。No2は6号住居の、No3は7号住居の出土遺物と接合する。そのほか、土師器壺、弥生土器壺が出土した。所見 出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



11号住居

1. 黒褐色土。やや粘質。砂質土をやや多量含む。
2. 黒褐色土。やや粘質。砂質土をやや多量、炭粒を微量含む。



11号住居出土遺物

11号住居遺物観察表

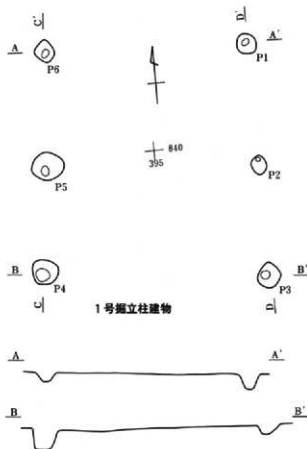
番号	種類	出土位置	計測値	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器壺	床面直上 ~+3	口径 (13.4) 底径 - 器高 8.6+	①礫、粗砂、白色灰物、雲母 ②普通 ③黄緑7.5YR8/6	外面 口縁~頸部縦方向刷毛目後横撫で、胴部刷毛目後撫で。内面 口縁~胴部横方向刷毛目後横撫で、胴部撫撫で、胴部・胴部に輪積み痕。	口縁14、胴~胴部上位34残。
2	土師器壺	床面直上 ~+10.6 住居+1	口径 - 底径 (10.5) 器高 5.3+	①粗砂、白色灰物、 ②普通 ③橙7.5YR6/6	外面 胴部縦方向刷毛目後横撫で、底部撫で。内面 撫撫で、輪積み痕。	胴部下位~底部1/2残。
3	弥生土器壺	床面直上~ +4.重砂土、 1枚+3	口径 (16.4) 底径 - 器高 17.5+	①粗砂、白色灰物、 軽石 ②普通 ③明黄緑10YR7/6	器表の滑度が顕著。1段の複合口縁。外面 頸部3通止め縷状文、口縁~胴部上半波状文、胴部下半波状文。内面 横方向波状文。	口縁~胴部上位1/2残。



## 2. 掘立柱建物

### 1号掘立柱建物(PL. 79・88)

位置 835・840-390・395 重複 なし。形状  
柱間は2間×1間で、北辺が南辺より短いものの正  
方形に近い。規模 3.70×3.54m P1 33×32×  
24cm P2 32×26×27cm P3 41×40×27cm P4



1号掘立柱建物

42×41×34cm P5 55×44×39cm P6 36×32×17  
cm 方位 7° 埋没土 As-Bを含まない。遺物  
出土しなかった。 所見 基本土層Ⅲ層下面相当の  
確認面より、As-B降下以前のもと思われる。5号  
住居 P1が本遺構に伴う可能性も考えられる。

### 1号掘立柱建物

1. 黒褐色土。しまりが弱い。灰オリブ土ブロックを少量、パミス・黄褐色シルトブロックを微量含む。
2. 黒褐色土。しまりがやや強い。パミスを少量含む。
3. 黒褐色土。しまりが強い。パミスを微量含む。
4. 暗褐色土。しまりが弱い。灰黄褐色粗砂を少量含む。
5. 黒褐色土。灰オリブ土ブロックを少量、パミスを微量含む。
6. 黒褐色土。粒子が細かい。

## 3. 水田

### C区1面水田

805~845-435~445において、基本土層Ⅱ層下面より畦畔を部分的に3ヶ所検出した。等高線に沿ってほぼ南北にのびる。いずれも確認面との土色の違い若しくは僅かな高まりを基に判断しており、明確な上端は認められない。規模は①長さ3.80m、幅42~59cm ②長さ6.00m、幅58~65cm ③長さ3.36m、幅51~57cmである。①は北の7号溝に近接し、7号溝及び南の8・9号溝と直交する位置にある。②・③

は走向から同一の畦畔と予想する。3号溝に隣接するが、やや東に振れる。周辺より江戸期の瀬戸・美濃産陶器片が出土した。確認面及び出土遺物から近世以降の水田の痕跡であろう。

### B区水田(PL. 89)

800~810-365~405において、畦畔を部分的に4ヶ所検出した。住居の分布する微高地が1号溝付近で終わり、南側は低地となる。この低地に水田が広が

### 3. 水田

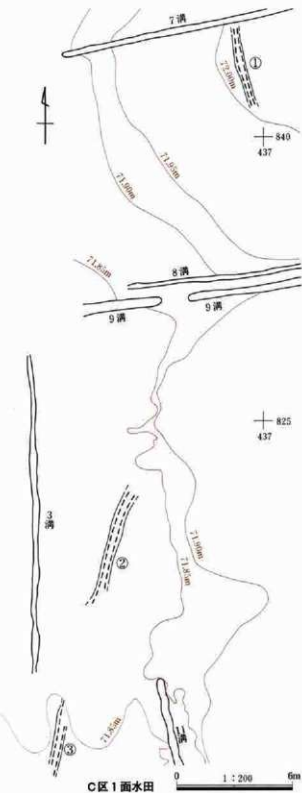
っており、南側側道部分(下増田常木Ⅱ遺跡)の調査でも確認されている。細砂層(9及び8層)に覆われており、これは弘仁九年(818年)の地震に伴う洪水層に比定される。水田土壌(11層)はやや砂質である。

①は長さ3.4m、幅57~71cm、高さ11cmでほぼ南北にのびる。②は長さ約3.5m、幅42~60cm、高さ14cmでやや蛇行して南へのび、途中南東方向へ分岐する。③は北西及び北東方向から伸びて調査区界付近で接続する。西側の畦畔は長さ4.4m、幅52~60cm、高さ12cmである。東側は長さ3.4m、高さ6cmだが、特に東側の上端・下端が不明瞭である。①~③の断面は台形状を呈し、遺存状態は比較的良好である。④は確認面との土色の違い及び僅かな高まりを基に判断しており、明確な上端は認められない。3条が幅1~2mの間隔を以て蛇行しながら南へのびた後、北西・南東方向に接続・分岐する。②の西側・③の東側・④の北側と②の東側・③の西側・④の南側の一部の走向がほぼ一致し、①~③は側道部分検出の畦畔へと続く。遺物は出土していないが、埋没土より818年以前のものである。

#### C区2面水田(PL. 90)

795~840-450~475において基本土層Ⅱ層(As-B層)下面より畦畔を検出した。470ラインを中心として南北に細長くのびる谷状の部分に遺存する。確認面の水田土壌である黒色粘質土に対して褐色味の強い土壌、若しくは僅かな高まりを基に判断しており、明確な上端が認められない箇所が多い。全部で17区画確認でき、820ラインを境に大きく2分できる。北半では畦畔がほぼ東西南北に直線的に配置されるが、南半では蛇行が目立ち、区画当たりの面積も小さい。南半では等高線が混んでおり、方向を意識した規則的な畦畔の配置を指向しつつも、地形による制約を受けた結果と推測する。①・③~⑤区画で水口が認められる。幅は下端でおおよそ40~50cmあり、地形に沿って北から南への掛け流しである。各区画の規模は次の通りである。①約5×約6m ②5.6×3.2m ③7.1×1.5m ④1.6×1.7m ⑤4.2

×3.4m ⑥2.6×1.0m ⑦0.4×0.9m ⑧0.6×2.4m ⑨4.2×3.7m ⑩0.5×1.6m ⑪4.6×1.5m ⑫4.1×3.3m ⑬5.3×2.2m ⑭3.7×2.7m ⑮3.7×2.7m ⑯1.0×2.8m ⑰1.3×2.7m

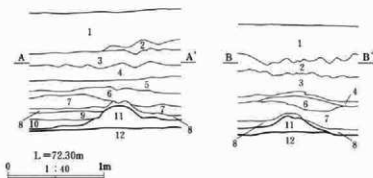


D区水田(PL. 90-91)

795~840-510~525において基本土層Ⅳ層(A5-B層)下面より畦畔を検出した。516ラインを中心として、南北方向にのびる尾根状の高まりの縁辺に細長く依存する。確認面の水田土壌である黒色粘質土に対して褐色味の強い土壌、若しくは僅かな高まりを基に判断しており、明瞭な上端が認められない。Aラインでは僅かな盛り上がりを観察できるが、畦畔とその周囲の土壌には差が認められない。全部で5区画確認でき、畦畔はいずれも東西南北に直線的に配置される。各区画の規模は次の通りである。

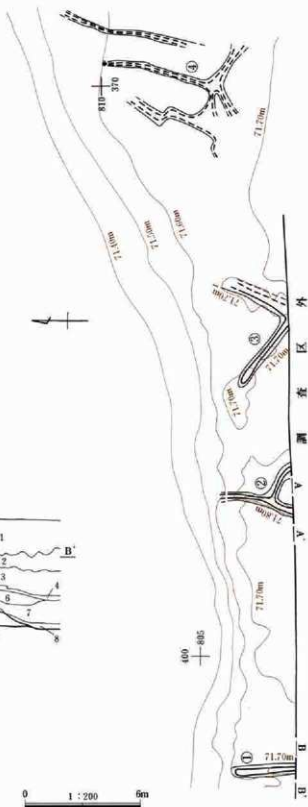
- ①19.5×6.0・m ②8.6×5.8・m ③27.9×6.6・m  
④6.1×6.7・m ⑤4.3×2.8・m

②・④の区画で南北の長さが判明しているが、これに従えば①・③の区画も東西方向にのびる数本の畦畔に区切られるものと思われる。⑥は516ラインの畦畔の西に位置し、間に畦畔がなければこの周辺では南北1:東西2の比率からなる区画が復元できる。⑦は516ラインの西2mに位置する。蛇行して接続するの、別の畦畔か不明である。



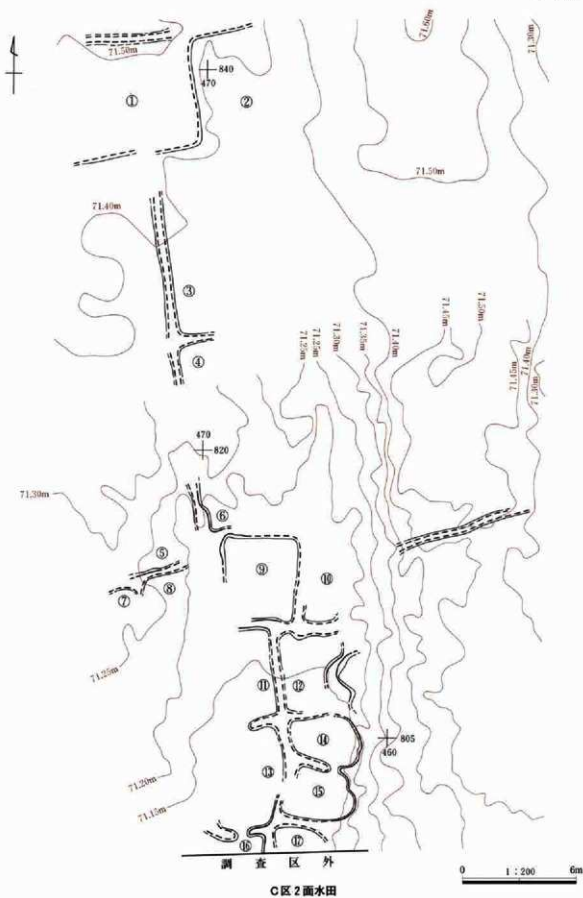
B区水田

1. 表土。
2. 明黄褐色土。砂質。黄色土と灰色砂の混土。
3. 暗灰黄色土。砂質。2層の灰色砂・シルト・細砂が互層に堆積。
4. 暗灰色細砂。しまりが強い。
5. 鈍い褐色粗砂。やや粘質。
6. 灰褐色粗砂。4層粒を微量含む。
7. 青灰色砂。炭素粒を微量。上面付近に棒山起源と思われるパミスを微量含む。
8. 鈍い黄色細砂。やや粘質。11層上面付近に炭粒を微量含む。
9. 灰オリブ細砂。
10. 9層と11層の混土。
11. 暗灰黄色土。やや砂質。粒子が細かい。水田土壌。



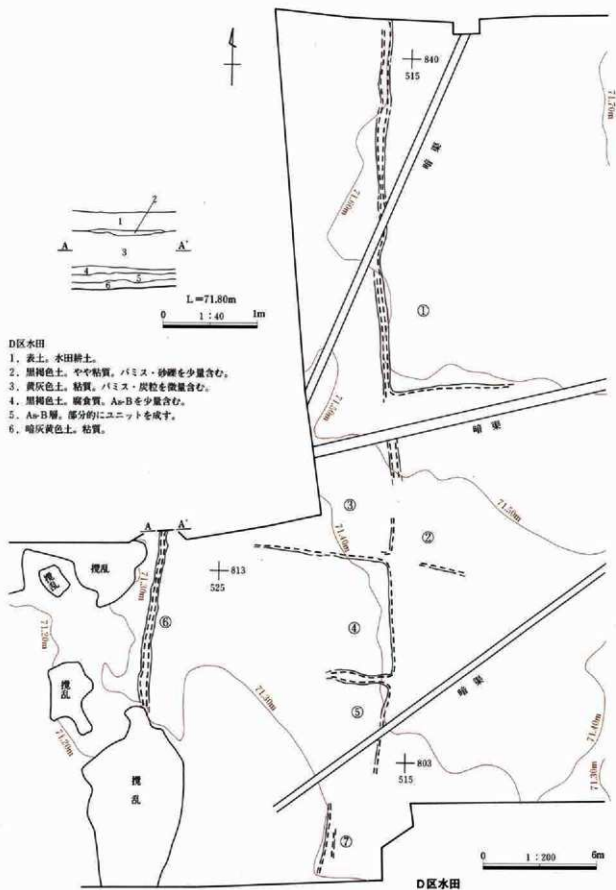
B区水田

12. 鈍い黄褐色土。やや砂質で粒子が細かい。やや粘質。鉄分凝集はほとんどない。



C区2面水田

下増田常水遺跡



D区水田

1. 表土。水田耕土。
2. 黒褐色土。やや粘質。パミス・砂礫を少量含む。
3. 黄灰色土。粘質。パミス・炭粒を微量含む。
4. 黒褐色土。腐食質。As-Bを少量含む。
5. As-B層。部分的にユニットを成す。
6. 暗灰黄色土。粘質。

## 4. 畠

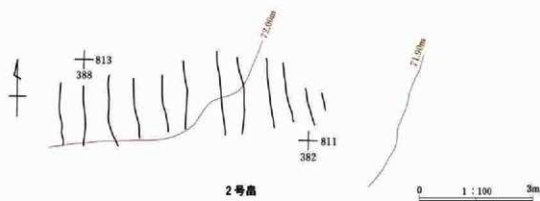
## 1号畠(PL. 91)

825-370-380に位置し、重複はない。As-B層より下層またはAs-B混層下面より検出した。黄色味の強い確認面に対して、若干黒色味を帯びる粘質土が、等高線に直交して南北方向に帯状に検出された。帯の両端において確認面との境は不明瞭である。遺物は出土しなかった。As-B降下以前の畠の痕跡と思われるが、詳細な時期は不明である。



## 2号畠(PL. 91)

810-380・385に位置し、重複はない。As-B混層下面相当より検出した。黄色味の強いシルト質の確認面に対して、黒色味を帯びて若干粒径の粗くなる土が南北方向に帯状に検出された。帯の両端において確認面との境は不明瞭である。遺物は出土しなかった。As-B降下以前の畠の痕跡と思われるが、詳細な時期は不明である。



## 5. 道、溝

## B区1面1号道(PL. 91)

位置 800-810-355-370 重複 なし。形状・規模 北東から南西にのびる。長さ 約22m 幅 129-167cmを確認した。ほぼ平坦な硬化面として検出。遺物 出土しなかった。所見 確認面から近世以降と思われる。北側に併行する1号溝は、その位置及び走向から1号道に伴うものであろう。基本土層

Ⅲ層下面より検出されたA・B溝と位置及び走向が一致しており、溝であった地割りを生かして道とした事が推測される。備考 南側側道部分(下増田常木Ⅱ遺跡)の道路状遺構へと続くと思われる。ただし道路状遺構と、本遺構下層より検出の常木遺跡2面A号溝・B区2面B号溝に相当する2・3号溝の位置は重複しない。

**B区1面1号溝**

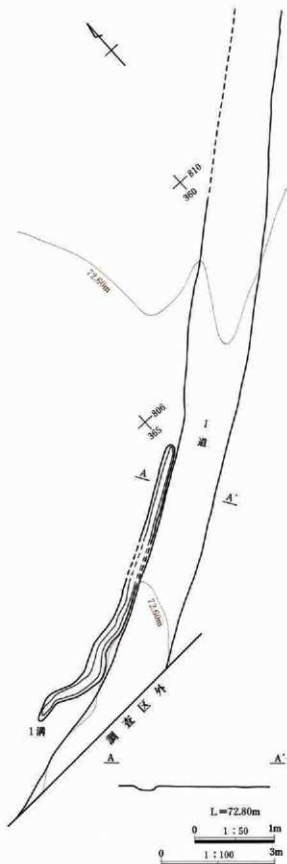
**位置** 800・805-360-370 **重複** なし。**形状・規模** 北東から南西にのびる。南端付近が蛇行する。長さ約8m 幅16~51cm 深さ約5cmを確認した。**遺物** 出土しなかった。**所見** 南側に併行する1号道は、その位置及び走向から1号溝に伴うものであろう。

**A区1号溝(PL. 91)**

**位置** 800~835-340・345 **重複** 3号溝→1号溝  
**形状・規模** ほぼ南北にのびる。長さ約33m 幅64~90cm 深さ50cmを確認した。南端に幅140cm長さ67cm 深さ20~30cm程の枡状施設を設ける。807-341付近で底面が段を以て北側に落ち込むが、深さは不明である。3号溝との重複部分の内、中段面は1号溝の底面となる。この中段面は830-346付近で途切れるが、確認面が部分的に低いために検出できなかったものである。**埋没土** Aラインでは表土と埋没土が同一である。Bライン上層にAs-Bが2次堆積する。**遺物** 出土しなかった。**所見** AラインでAs-B層及びその上層を掘り込んでおり、近世以降の用水路の可能性が高い。枡状遺構に湧水は認められず、北側からの流水をここで溜めて利用する施設、または溝が一部検出できずに南側の調査区外へ続く事を想定した濾過施設が考えられる。

**A区2号溝(PL. 91)**

**位置** 810~835-345・350 **重複** 3号溝 **形状・規模** ほぼ南北にのび、818-346付近で南西に走向を変える。長さ約26m 幅71~100cm 深さ28cmを確認した。823-347付近で底面が段を以て北側に落ち込むが、深さは不明である。部分的に確認面が低く、826以北が途切れる。**埋没土** Aラインでは表土と埋没土が同一である。**遺物** 出土しなかった。**所見** AラインでAs-B層及びその上層を掘り込んでおり、近世以降の用水路の可能性が高い。南東への延長方向にB溝が位置し、同一の溝と思われる。



B区1面1号道・1号溝





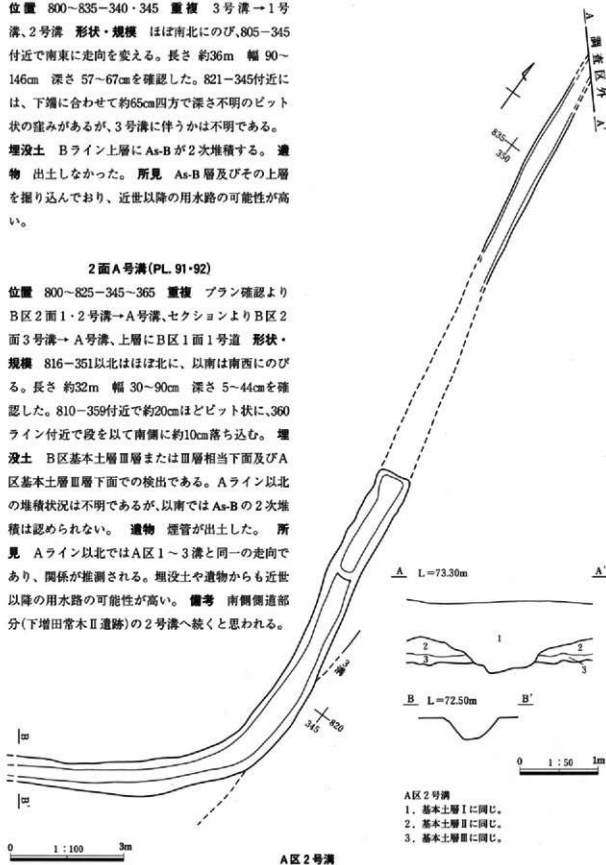
下増田常木遺跡

A区3号溝(PL. 91)

位置 800~835-340・345 重複 3号溝→1号溝、2号溝 形状・規模 ほぼ南北にのび、805-345付近で南東に走向を変える。長さ 約36m 幅 90~146cm 深さ 57~67cmを確認した。821-345付近には、下端に合わせて約65cm四方で深さ不明のビット状の窪みがあるが、3号溝に伴うかは不明である。埋没土 Bライン上層にAs-Bが2次堆積する。遺物 出土しなかった。所見 As-B層及びその上層を掘り込んでおり、近世以降の用水路の可能性が高い。

2面A号溝(PL. 91・92)

位置 800~825-345~365 重複 プラン確認よりB区2面1・2号溝→A号溝、セクションよりB区2面3号溝→A号溝、上層にB区1面1号溝 形状・規模 816-351以北はほぼ北に、以南は南西にのびる。長さ 約32m 幅 30~90cm 深さ 5~44cmを確認した。810-359付近で約20cmほどビット状に、360ライン付近で段を以て南側に約10cm落ち込む。埋没土 B区基本土層Ⅲ層またはⅢ層相当下面及びA区基本土層Ⅲ層下面での検出である。Aライン以北の堆積状況は不明であるが、以南ではAs-Bの2次堆積は認められない。遺物 煙管が出土した。所見 Aライン以北ではA区1~3溝と同一の走向であり、関係が推測される。埋没土や遺物からも近世以降の用水路の可能性が高い。備考 南側側道部分(下増田常木Ⅱ遺跡)の2号溝へ続くと思われる。

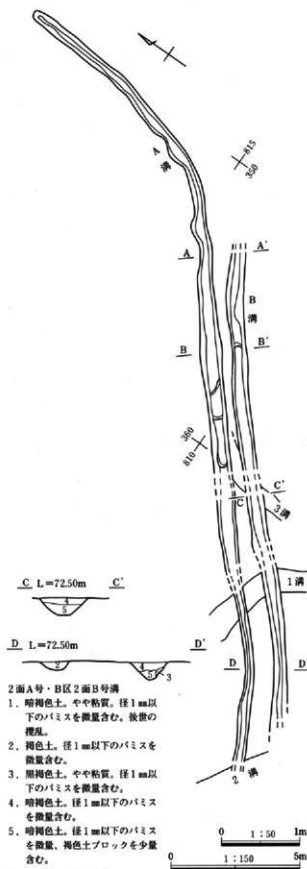
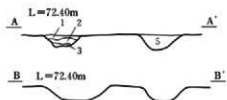


## B区2面B号溝(PL. 92)

位置 800~810-350-365 重複 プラン確認より1号溝・2号溝→B号溝、セクションより3号溝→B号溝、上層にB区1面1号道 形状・規模 A溝に併行して北東から南西にのびる。長さ 約19m 幅 45~68cm 深さ 16~29cmを確認した。Bライン付近で段を以て北側に約10cm落ち込む。埋没土 B区基本土層Ⅲ層及びⅣ層相当下面での検出である。As-Bの2次堆積は認められない。遺物 出土しなかった。所見 北東への延長方向にA区2号溝が位置し、同一の溝であろう。埋没土からも近世以降の用水路の可能性が高い。備考 南側側道部分(下増田常木Ⅱ遺跡)の3号溝へ続くと思われる。

## B区2面1号溝(PL. 92-93-104)

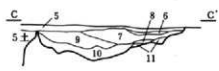
位置 800~810-360-405 重複 1号溝→2号溝、プラン確認より1号溝→A・B・3号溝、5号土坑→1号溝 形状・規模 ほほ東西にのび、805-363付近で南東に走向を変える。長さ 約48m 幅 0.8~2.15m 深さ 23~67cmを確認した。東側が浅く、西側が深い。断面は丸底状を呈する。埋没土 As-B混土層またはAs-B混土層相当下面より検出した。BラインのみAs-Bを確認できる。遺物 中世の中国製青磁碗、江戸期陶胎染付碗などが出土した。所見 2号溝と重複する位置にのみ中端が存在し、Cラインにおいて南寄りの上層(6~8層)と下層に分層できることから、1号溝→2号溝の可能性がある。住居の分布する微高地の縁を西から南へ回り込むように位置する。図示していないがAs-B混土層を掘り込んでおり、重複する近世以降のものより古い。遺物からも中世から近世のものである可能性が高い。備考 南側側道部分(下増田常木Ⅱ遺跡)の5号溝へ続くと思われる。



2面A号溝・B区2面B号溝

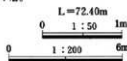
B区2面2号溝(PL. 92)

位置 800・805-365-395 重複 1号溝→2号溝、プラン確認より2号溝→A号溝 形状・規模 はほぼ東西にのびる。806-374付近で南東に走向を変える。長さ約28m 幅0.79-1.93m 深さ2-31cmを確認した。Dライン以西は次第に浅くなる。断面は丸底状を呈する。遺物 江戸期陶胎染付碗などが出土した。所見 1号溝と重複する位置にのみ中端が存在し、Cラインにおいて南寄りの上層(6-8層)と下層に分層できることから、1号溝→2号溝の可能性がある。図示していないがAs-B混土層を掘り込んでおり、重複する近世以降のA号溝より古い。1号溝の時期からも中世から近世のものである可能性が高い。備考 南側側道部分(下増田常木II遺跡)の4号溝へ続くと思われる。



B区2面1・2号溝

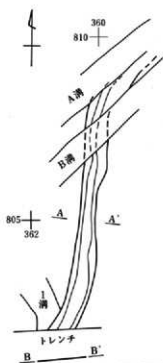
1. 黒褐色土。砂質。明褐色土粒を微量含む。
2. 橙色土。粘質。
3. 鈍い褐色土。やや粘質。1層のブロックを微量含む。
4. 黒褐色土。A=Bを多く含む。
5. 暗褐色土。やや粘質。鉄分が凝集し、パミスを少量含む。
6. 鈍い褐色土。シルト質。しまりが弱い。間層に黒色砂がラミナ状に堆積。
7. 暗褐色土。パミスと黒色砂を均一に微量含む。
8. 黒色砂層。鈍い橙色シルトを少量含む。6・7・8層は2号溝埋没土の可能性。
9. 暗褐色土。やや粘質。鈍い橙色シルト粒を少量含む。
10. 黒色砂層。
11. 鈍い橙色シルト層。



B区2面1・2号溝

## B区2面3号溝(PL. 92)

位置 800・805-355・360 重複 プラン確認とセクションより1号溝→3号溝→A・B号溝 形状・規模 ほぼ南北にのびる。808-360、803-361においてそれぞれ北東、南西方向に走向を変える。遺物 出土しなかった。所見 重複する遺構の時期から中世から近世のものである可能性が高い。備考 南側側道部分(下増田常木Ⅱ遺跡)の7号溝へ続くと思われる。

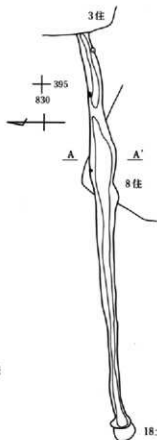


B区2面3号溝

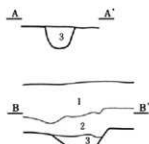
0 1:100 3m

## B区2面4号溝(PL. 93)

位置 825-390~400 重複 プラン確認より18号土坑・8号住居→4号溝→3号住居, 18号土坑は4号溝確認面を10cmほど下げた段階での検出。形状・規模 ほぼ東西にのびる。長さ 約10.5m 幅 11~69cm 深さ 5~23cmを確認した。遺物 土師器小片が出土した。所見 重複する遺構の時期から5世紀後半から8世紀後半のものである。

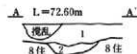


B区2面4号溝

L=72.40m  
0 1:50 1m

B区2面3号溝

1. 暗灰色土、表土。
2. 暗灰褐色土、砂質。
3. 黒褐色土、しまりが弱い。



B区2面4号溝

1. 黒褐色土、径1mm程のバミスを微量含む。
2. 暗褐色土、7号住居3層に相当。

0 1:2 5cm  
0 1:3 10cm

A・B区溝出土遺物

2面A号溝・B区2面1号溝遺物観察表

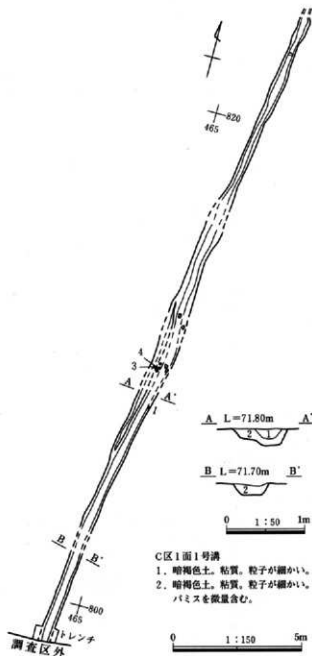
番号	種類	出土位置	計測値	器形、文様等の特徴	残存状態備考	
1	金属製品 埋管継ぎ	A号溝埋 没土	火皿径 1.75 高さ 0.9+	火皿口縁は平直に仕上げ、内面にかえり状の僅かな突起。 横方向の回転刮り痕を外側に残す。緩く屈曲する筋返し へ続くか。	火皿・首上部 残。	
番号	種類	出土位置	計測値	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、或・整形、文様等の特徴	残存状態備考
2	陶器 碗	1号溝+8	口径 — 底径 — 器高 4.2+	①緻密 ②普通 ③灰白7.5Y7/1	肥前。陶胎染付。	口縁部破片。
3	中国磁器 青磁碗	1号溝埋 没土	口径 — 底径 — 器高 3.1+	①緻密 ②不良 ③オリーブ黄7.5Y6/G	龍泉窯系。外面鉄蓮弁文。	口縁部破片。

## C区1面1号溝(PL. 104)

位置 795~820-460・465 重複 なし。形状・規模 ほぼ南北にのびるが、15°ほど東に振れる。長さ約26.6m 幅 30~79cm 深さ 14~63cmを確認した。823ラインで約30cmの段を以て南側に落ち込む。806~812ラインまで西側に中段をもつ。埋没土 洪水由来の砂層は確認できない。遺物 中段付近より陶器すり鉢、煙管、寛永通宝、蟹状鉄製品が出土した。所見 確認面及び遺物から近世以降のものである。C区内に畦畔が検出されており、水田に伴う用水路の可能性ある。10号溝が隣接して併行するが、関係は不明である。2号溝とは直交する位置にある。

## C区1面2号溝

位置 810-465-475 重複 なし。形状・規模 ほぼ東西に走向するが、15°ほど南に振れる。長さ約10.3m 幅 57~93cm 深さ 11~24cmを確認した。東端の深さは21cmを測る。埋没土 洪水由来の砂層は確認できない。遺物 近世以降の陶磁器片が出土した。所見 確認面及び遺物から近世以降のものである。C区内に畦畔が検出されており、水田に伴う用水路の可能性ある。1号溝とは直交する位置にある。D区1号溝とはほぼ併行するが、D区内では検出できなかった。



C区1面1号溝

## C区1面3号溝

位置 810~825-445 重複 なし。形状・規模 ほぼ南北にのびる。長さ約16.7m 幅 15~41cm 深さ 5cmを確認した。確認面が低く、下端は部分的な検出にとどまる。埋没土 C区2面3号溝3層との色調の違いにより検出したが、Aラインでは表土との区別が付かず、僅かな落ち込みとして確認された。Aラインで遺構付近から洪水由来と思われる砂層を検出。遺物 出土しなかった。所見 確認面より近世以降のものである。C区内に畦畔が検出されており、水田に伴う用水路の可能性ある。基本土層Ⅲ層下面で検出された2面3号溝とほぼ同位置・同走向であり、古代と共通の地割りにあった可能性がある。備考 セクション図はC区2面3号溝と共通。

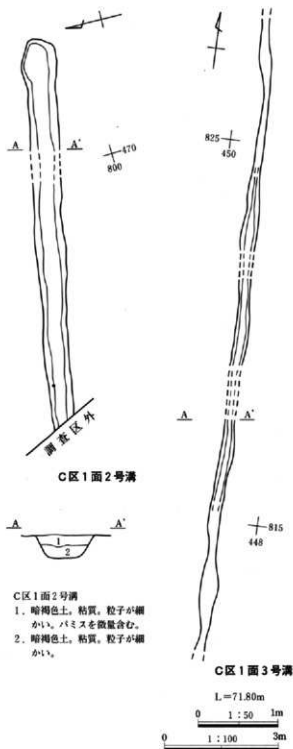
## C区2面5号溝

位置 825~845-460・465 重複 なし。形状・規模 ほぼ南北にのびるが、15°ほど西に振れる。長さ約20.2m 幅 15~38cm 深さ47cmを確認した。断面稜研状を呈する。一部途切れるが同一の溝であろう。確認面が低く明確な下端が認められない。埋没土 上層(3層)は周辺の堆積土と区別がつかない。遺物 江戸期陶胎染付碗などが出土した。所見 セクションより近世以降のものである。C区内に畦畔が検出されており、水田に伴う用水路の可能性ある。併行する6号溝及び直交する位置にある7~9号溝とは、同一の地割りに基づいて配置されたと思定する。

## C区2面6号溝

位置 825~845-450・455 重複 なし。形状・規模 ほぼ南北にのびるが、15°ほど西に振れる。長さ約18.3m 幅 19~36cm 深さ7cmを確認した。確認面が低く明確な下端が認められない。遺物 出土しなかった。所見 基本土層Ⅲ層下面からの検出であるが、5号溝と併行すること、深さがほとんど認められないことから、近世以降のものと思わ

れる。その場合、C区内に畦畔が検出されており、水田に伴う用水路の可能性ある。併行する5号溝及び直交する位置にある7~9号溝とは、同一の地割りに基づいて配置されたと思定する。



## C区1面2号溝

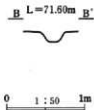
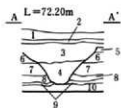
1. 暗褐色土。粘質。粒子が細かい。バミスを微量含む。
2. 暗褐色土。粘質。粒子が細かい。

C区1面7号溝

位置 840・845-430-445 重複 なし。形状・規模 ほぼ東西にのびるが、15°ほど北に振れる。長さ約14.3m 幅25~35cm 深さ12~18cmを確認した。遺物 周辺より江戸期後半の瀬戸・美濃陶器碗片が出土した。所見 確認面及び出土遺物から近世以降のものである。南に隣接して畦畔が直交する位置にあり、水田に伴う用水路の可能性ある。

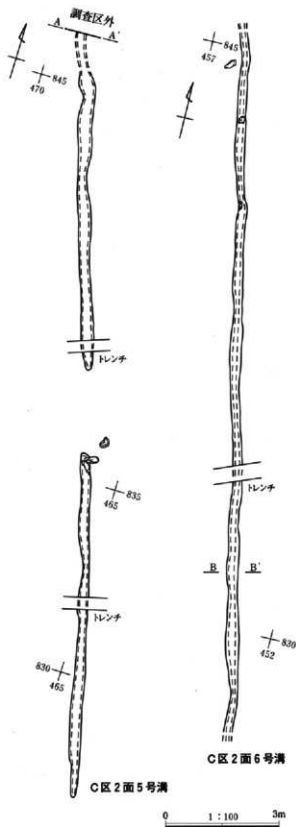
C区1面8号溝

位置 830・835-420-440 重複 なし。形状・規模 北へ約15°ほど振れて西からのび、431ライン付近で東北東へ走向を変える。長さ約20.2m 幅20~44cm 深さ5~15cmを確認した。遺物 江戸期の陶磁器片が出土した。所見 確認面及び遺物より近世以降のものである。C区内に畦畔が検出されており、水田に伴う用水路の可能性ある。併行する7・9号溝及び直交する位置にある5・6号溝とは、同一の地割りに基づいて配置されたと想定する。隣接する9号溝との関係は不明である。



C区2面5号溝

1. 表土。水田耕作土。
2. 鉄分凝集層。
3. 灰黄褐色土。しまりがやや弱い。粘質。
4. 灰黄褐色土。しまりがやや強い。粘質。粒子が細かい。鉄分凝集物を微量含む。3・4層は5溝の埋設土。
5. 灰色粘土。鉄分凝集物を少量。径0.5mm程度のパミスを微量含む。
6. 灰色粘土。径0.5mm程度のパミスを微量含む。
7. 灰黄色土。粘質。炭粒を微量含む。下層により多い。
8. A=B層。部分的にユニットが残り、1次堆積に近い。
9. 黒褐色土。粘質。泥炭を微量含む。
10. 灰オリブ粘土層。



## C区1面9号溝

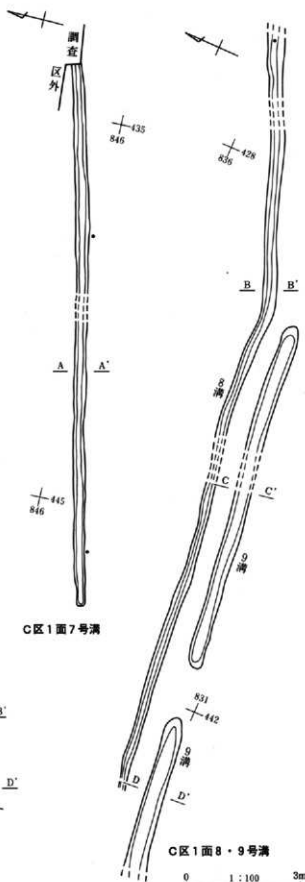
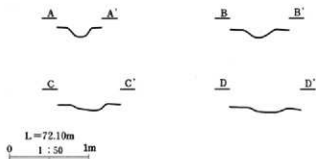
位置 830-430-445 重複 なし。形状・規模  
 はほぼ東西にのびるが、15°ほど北に振れる。長さ約  
 14.8m 幅 36~60cm 深さ 5cmを確認した。一部途  
 切れるが同一の溝であろう。遺物 出土しなかつ  
 た。所見 確認面より近世以降のものである。C区  
 内に畦畔が検出されており、水田に伴う水路の可  
 能性がある。併行する7・8号溝及び直交する位置に  
 ある5・6号溝とは、同一の地割りに基づいて配置さ  
 れたと想定する。隣接する8号溝との関係は不明で  
 ある。

## C区1面10号溝

位置 815・820-460 重複 なし。形状・規模  
 はほぼ南北にのびる。長さ約3.9m 幅 24~41cm 深  
 さ 18cmを確認した。遺物 出土しなかつた。所  
 見 確認面から近世以降のものである。C区内に畦  
 畔が検出されており、水田に伴う水路の可能性が  
 ある。1号溝が隣接して併行するが、関係は不明で  
 ある。

## C区1面11号溝

位置 805・810-440 重複 なし。形状・規模  
 はほぼ南北にのびる。長さ約6.3m 幅 30~38cmを確  
 認した。深さは不明である。遺物 出土しなかつ  
 た。所見 確認面から近世以降のものである。C  
 区内に畦畔が検出されており、水田に伴う水路の  
 可能性がある。



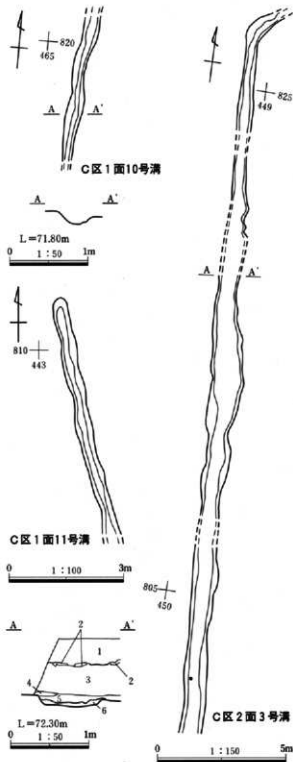


## C区2面3号溝

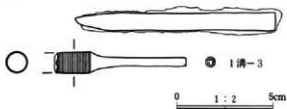
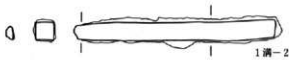
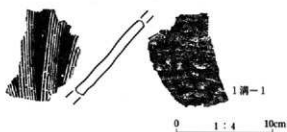
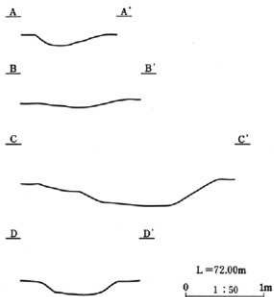
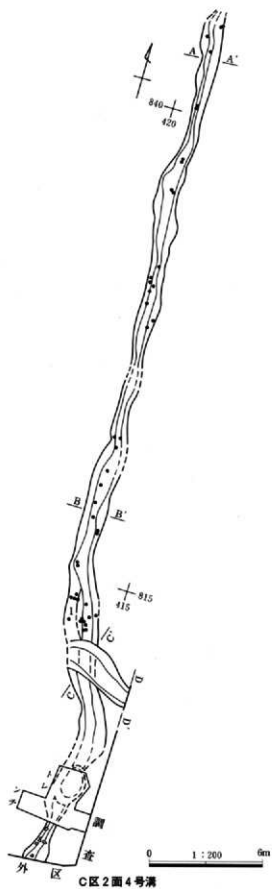
位置 795~825-445・450 重複 なし。形状・規模 長さ約30.0m 幅0.39~1.20m 深さ14cmを確認した。ほぼ南北にのび、827ライン付近で走向を北東に変える。底面は平坦である。埋没土 As-Bを多量に含む粘質土を主体とする。遺物 出土しなかった。所見 基本土層Ⅱ層下面での検出で、セクションより平安時代の溝である。周囲に同時期の水田が広がっていることから、用水路として用いられたものであろう。基本土層Ⅱ層下面で検出された1面3号溝とはほぼ同位置・同走向であり、古代以降共通の地割りが続いた可能性がある。

## C区2面4号溝(PL. 104)

位置 795~845-410・415 重複 包含層→4号溝4号溝確認面は71.60m付近であるのに対し、包含層は北側の集中部分で71.40~71.65m、南側の散在しているもので71.08~71.33mと、4号溝より下層での検出である。形状・規模 長さ約46.5m 幅0.76~1.84m 深さ15cmを確認した。底面は平坦で壁面はなだらかに立ち上がる。811ライン付近で東に分岐する溝は調査区界で幅約1.0m 深さ約10cm 合流部では深さ約35cmと4号溝本体より底面が低くなる。804ライン付近に位置する陥穴状の窪みは深さ80cmほどである。埋没土 下層は黒褐色粘質土、上層はAs-B混じりと考えられる砂質土。陥穴状の窪みより南には榛名山系軽石や河床礫を多く含む。遺物 中世常滑壺の他、図示していないが古墳時代前期土師器、灰軸陶器杯・壺小片が出土した。所見 地山のFP泥流を切っていることから古墳時代後期以降のものである。確認面はAs-B下面又はAs-B下面相当面であるが、調査区界のセクションによって遺構の立ち上がりを確認していないため、時期の下限については不明である。分岐する溝の延長方向にはB区2面1号溝があり、同一の溝と思われるものの、新旧関係はつかめていない。陥穴状の窪みの成因は不明である。



5. 道、溝



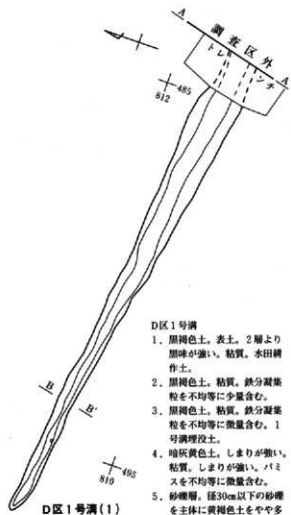
C区1・4号溝出土遺物

## C区1面1号溝・2面4号溝遺物観察表

番号	種類	出土位置	計測値	①粘土 ②色調	器形、或・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1溝-1	陶器 すり鉢	+6	口径 — 底径 — 器高 7.3+	①織帯 ②普通 ③紺赤褐色5YR3/2	丹波。	残存状態 備考 一部破片。
番号	種類	出土位置	計測値	器形、文様等の特徴		残存状態 備考
1溝-2	鉄製品 鋳?	埋没土	長さ 10.8 幅 0.7~0.9 厚さ 0.9以下 重量 49.4	方柱状の鋳鉄。端部が鋳状に突る。		上部端を欠くか。
1溝-3	金属製品 埋没管口	+5	長さ 6.9+ 破口径 0.45 接合部径 1.1 重量 4.6	接合部鋳形。接合部内に扉字の本木が残る。		接合部高・破口の一部欠。
1溝-4	陶器 裏水溝管	1号溝 底面直上	鉄径 2.39~2.40 孔径 0.51~0.52 厚さ 0.14~0.15 重量 3.6	背面無文。		完形。表面に 鉄跡付着。
4溝-1	陶器 壺	+6	口径 (16.0) 底径 — 器高 3.5+	①白色灰物 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR5/4	常滑。	口縁部1/8。 13世紀前半~ 中頃。

## D区1号溝(PL.93)

位置 805・810-480-520 重複なし。形状・規模は東西にのびる。長さ約30.5m 幅10~109cm 深さ33cmを確認した。中間が約8.5mほど途切れるが、走向から同一の溝であろう。底面は緩やかに湾曲する。暗渠以西は確認面が低く、明確な下端が認められない。また、底面に沿って列状に並ぶ径約10cm、深さ数cmの杭または杭の痕跡を検出した。溝に伴う何らかの施設と考えられる。溝が確認できなかった515ライン以西にも杭列が検出され、この並びに沿って1号溝も続くことが予想できる。溝の脇に2基のピットが位置する。規模はそれぞれP1 26×18×19cm P2 45×32×27cmである。埋没土ピット埋没土に認められるAs-Bは溝埋没土に認められない。基本土層層下面相当面からの検出で、1号溝周辺にはAs-Bが堆積していない。ピットの埋没土が近世以降の遺構には見られない土であることから、ピットはAs-B降下から近世以前のもので溝には伴わない可能性もある。遺物出土しなかった。所見 Aラインにおいて表土下層まで溝の立ち上がりが確認できることから近世以降のものである。併行するD区2号溝とは、同一の地割りに基づいて配置されたと想定する。



## D区1号溝

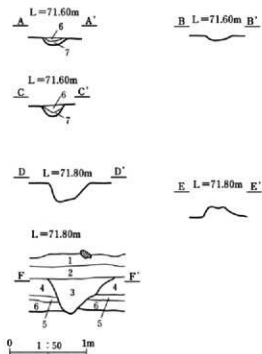
1. 黒褐色土。表土。2層より黒味が強い。粘質。水田耕作土。
2. 黒褐色土。粘質。鉄分凝集粒を不均等に少量含む。
3. 黒褐色土。粘質。鉄分凝集粒を不均等に微量含む。1号溝埋没土。
4. 暗灰黄色土。しまりが強い。粘質。しまりが強い。パミスを不均等に微量含む。
5. 砂礫層。径30cm以下の砂礫を主体に黄褐色土をやや多量含む。
6. 灰黄褐色土。As-Bをやや多量含む。
7. 灰黄褐色土。As-Bをやや多量含む。5層より多い。炭粒を少量含む。6層より黒味が強い。

### D区2号溝

位置 835・840-485-520 重複 なし。形状・規模 長さ約31.3m 幅28-53cm 深さ47cmを確認した。500ライン付近で底面が10cmほど高くなる。

遺物 陶器灯明皿、用途不明木製品が出土した。

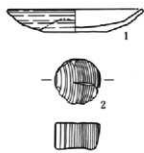
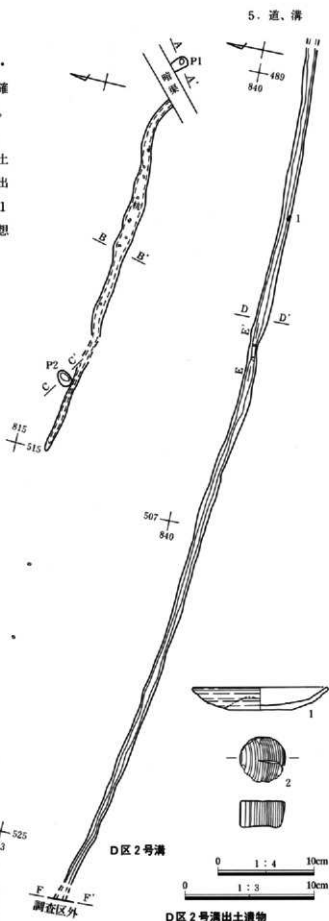
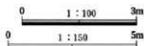
所見 FラインにおいてAs-B層を掘り込んで表土下層まで溝の立ち上がりが確認できること、及び出土遺物から近世以降のものである。併行するD区1号溝とは、同一の地割りに基づいて配置されたと想定する。



#### D区2号溝

1. 灰黄褐色土。表土。水田耕作土。バミスを不均等に微量含む。
2. 褐灰色土。しまりが強い。粘質。バミスを不均等に微量含む。
3. 灰黄色土。しまりが強い。粘質。バミスを不均等に微量含む。  
2号溝埋没土。
4. 灰色土。しまりが強い。粘質。下面付近にAs-Bを少量含む。
5. As-B層。ユニットがやや乱れるが1次埋積に近い。鉄分凝集ブロックをやや多量含む。
6. 灰オリーブ色粘土。上面付近は黒色味が強い。鉄分凝集ブロックをやや多量。As-Bブロックを微量含む。

#### D区1号溝(2)



D区2号溝出土遺物



D区2号溝遺物観察表

番号	種類	出土位置	計測値	①胎土 ③色調	②焼成	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	陶器 灯明皿	+21	口径 (10.6) 底径 (4.6) 器高 5.4	①粗砂、石英 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR5/4		瀬戸・美濃。錯輪輪軸後体部下位から底部外面の輪を状う。	1/4残。
2	木製品 栓?	埋没土	直径 (4.7) 厚さ 2.9 樹種 スギ			材を円盤状に割り抜く。両端はほぼ平坦に仕上げる。	ほぼ完形。

## 6. 土坑

## B区2面5号土坑(PL. 93-94)

位置 805・380・385 重複 5号土坑→B区2面1号溝 形状 南北にやや長い楕円状で底面は浅く窪む。規模 1.17×1.11×1.14m 埋没土 As-Bを含まない。遺物 出土しなかった。所見 セクションからは1号溝との新田が判然としませんが、1号溝埋没土に見られるAs-Bが5号土坑には見られないことから1号溝より古く、As-B降下以前のものである可能性がある。底面付近より湧水を見るため、井戸とも考えられるが、壁面にアグリはない。



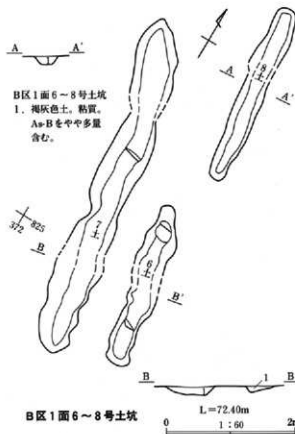
B区2面5号土坑

## B区2面5号土坑

1. 明褐色土。やや粘質。鉄分が凝集し、パミス少量含む。
2. 黒褐色土。やや粘質。径1mm以下のパミスを均一に微量含む。
3. 黒褐色土。やや砂質。径4cm程度の灰褐色シルトブロックを微量含む。パミスの含有は不明。
4. 黒褐色土。やや粘質。鉄分が凝集する。パミスの含有は不明。
5. 黒褐色土。粘質。湧水点に近く、水分を多く含みしまりが弱い。パミスの含有は不明。

## B区1面6号土坑(PL. 94)

位置 820・825・365・370 重複 なし。形状 南北に溝状にのびる。北端に中段を、南寄りに10cmほどの段をもつ。規模 長さ2.66m 幅35~52cm 深さ5~30cmを確認した。埋没土 As-Bが含まれる。遺物 出土しなかった。所見 確認面より近世以降と思われる。7・8号土坑は併行して近接した位置にあり、同一の用途を以て設けられたと推測する。



## B区1面6~8号土坑

1. 褐灰色土。粘質。As-Bをやや多量含む。

## B区1面7号土坑(PL. 94)

位置 820・825・370 重複 なし。形状 南北に溝状にのび、中央付近に5cmほどの段をもつ。規模 長さ5.64m 幅42~69cm 深さ14~21cmを確認した。埋没土 As-Bが含まれる。遺物 出土しなかった。所見 確認面より近世以降と思われる。6・8号土坑は併行して近接した位置にあり、同一の用途を以て設けられたと推測する。

## B区1面6~8号土坑

L=72.40m

1:60

0 2m

## B区1面8号土坑

位置 825-365・370 重複 なし。形状 南北に溝状にのびる。規模 長さ2.94m 幅28-44cm 深さ7-14cmを確認した。埋没土 As-Bが含まれる。遺物 出土しなかった。所見 確認面より近世以降と思われる。6・7号土坑は併行して近接した位置にあり、同一の用途を以て設けられたと推測する。

## B区2面10号土坑(PL. 94)

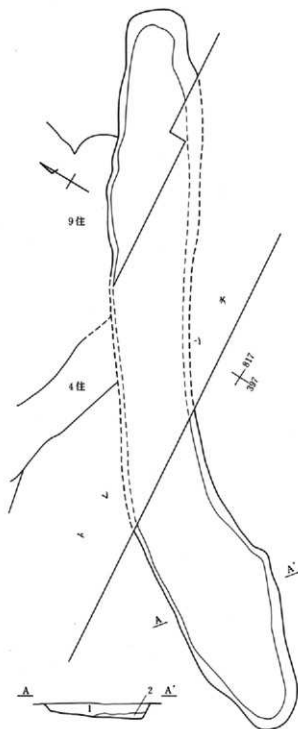
位置 810-820-390-400 重複 プラン確認より4・9号住居→10号土坑 形状 東北から南西へ溝状に延びる。底面は平坦である。規模 長さ約11.6m 幅93-173cm 深さ10-24cmを確認した。埋没土 As-Bを含んでいる可能性がある。遺物 古墳時代前期の土師器小片が出土した。所見 確認面及び遺物から古墳時代以降のものとされるが、詳細な時期は不明である。

## B区2面11号土坑(PL. 94)

位置 835・840-385・390 重複 5号住居→11号土坑 形状 南北に長い楕円状。断面は九底状で緩やかに立ち上がる。弱い中端をもつ。規模 4.23×3.69×0.89m 埋没土 3層より10cm 前後の河床礫が多く出土した。この層は5号住居貯蔵穴1層に相当する。遺物 古墳時代前期から後期の土師器壺小片が出土した。所見 セクションより5号住居廃絶後さほど時間をおかず埋没し始めた状況が窺え、古墳時代後期のものと思われる。

## B区2面13号土坑(PL. 94-95)

位置 820-385・390 重複 13号土坑→14号土坑 形状 北東から南西方向に主軸をとる楕円状。底面は平坦である。規模 181×89×26cm 埋没土 重複する14号土坑はAs-Bを含むが、13号土坑は含まない。遺物 古墳時代前期から後期の土師器壺小片が出土した。所見 埋没土及び遺物から古墳時代後期のものと思われる。



B区2面10号土坑

1. 黒褐色土。As-Bと思われる砂質土をやや多量、パミスを微量含む。
2. 黒褐色土。しまりがやや強い。As-Bと思われる砂質土をやや多量含む。

L=72.50m  
0 1:60 2m

B区2面10号土坑

**B区2面14号土坑(PL.94)**

**位置** 820・825-380-390 **重複** 13号土坑→14号土坑 **形状** 13号土坑と同一の主軸をとり、溝状にのびる。底面は平坦で、南側で一部中段をもつ。  
**規模** 長さ8.72m 幅1.26-2.48m 深さ11-33cm  
**埋没土** 重複する13号土坑はAs-Bを含まず、14号土坑は含む。  
**遺物** 古墳時代前期壺、平安時代土師器壺小片などが出土した。  
**所見** 埋没土及び遺物から平安時代以降のものである。

**B区2面15号土坑**

**位置** 820-395 **重複** セクションより9号住居→15号土坑→4号住居 **形状** 隅丸方形で底面はやや窪む。  
**規模** 上端は約2.5×2.2m、深さは54cmで9号住居床面に達する。  
**埋没土** As-Bを含まない。  
**遺物** 弥生土器小片、古墳時代前期の壺小片が出土した。  
**所見** 重複する遺構の時期から8世紀後半から9世紀のものである。

**B区2面16号土坑**

**位置** 840-395 **重複** なし。  
**形状** 不整形円で断面は丸底状を呈する。  
**規模** 39×31×13cm  
**埋没土** As-Bを含まない。  
**遺物** 出土しなかった。  
**所見** 埋没土から平安時代以前の可能性があるが、詳細な時期は不明である。

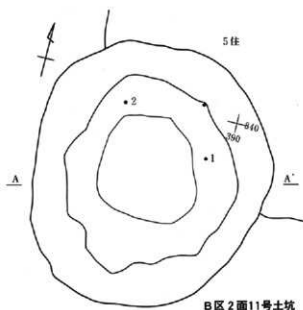
**B区2面18号土坑**

**位置** 825-404 **重複** 18号土坑→4号溝 **形状** 不整形円で底面は平坦である。  
**規模** 径53cm×深さ24cm  
**埋没土** As-Bを含まない。  
**遺物** 古墳時代前期の壺小片が出土した。  
**所見** 重複する遺構の時期から8世紀後半以前のものであると思われる。

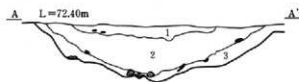
**B区2面19号土坑**

**位置** 830-380・385 **重複** なし。  
**形状** 不整形円で断面丸底状を呈する。  
**規模** 径43cm×深さ24cm  
**埋没土** As-Bを含まない。  
**遺物** 出土しなかった。  
**所見** 埋没土から平安時代以前の可能

性があるが、詳細な時期は不明である。

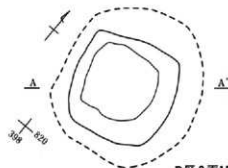


B区2面11号土坑

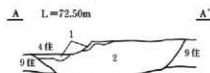


B区2面11号土坑

1. 黒褐色土。径1mm程度のバミスを含む。
2. 褐灰色土。砂質。鈍い黄褐色細砂を均一に少量含む。
3. 黒褐色土。やや粘質。5号住居貯蔵穴1層に相当。



B区2面15号土坑

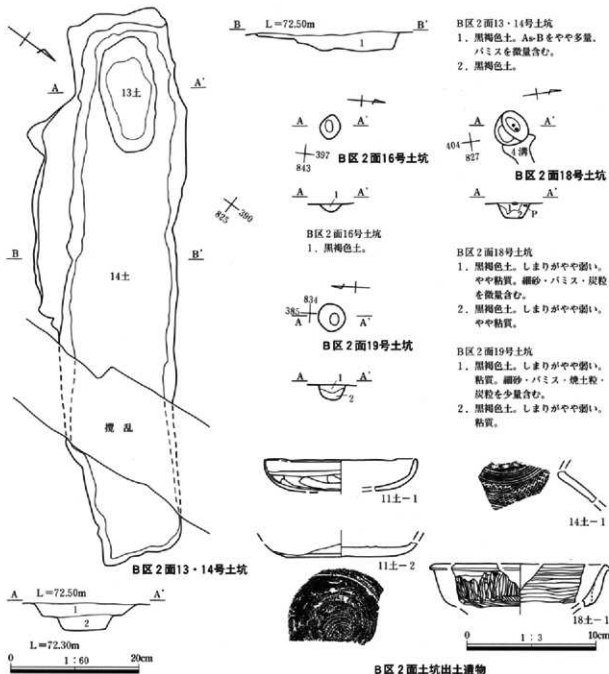


B区2面15号土坑

1. 黒褐色土。径1mm以下のバミスを微量含む。
2. 黄灰色土。砂質。褐色細砂・粗砂を均一に少量、径1mm以下のバミスを均一に微量含む。



## 6. 土坑



B区2面土坑遺物観察表

番号	種類 器種	出土 位置	計測値	①胎土	②焼成	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
				③色調			
11土-1	土師器 杯	+20	口径 (12.0) 底径 - 器高 2.5+	①細砂、軽石 ②良好 ③橙7.5YR6/8		外面 体部左方向削り後口縁部横撫で。 内面 横撫で。	口縁-体部 1/4残。
11土-2	須恵器 杯	+24	口径 - 底径 (8.4) 器高 1.1+	①白色底物、石英 ②還元焰 ③灰白7.5Y7/1		外面 体部輪軸整形後最下位右回転彫り、底部回転糸 切り後外縁右回転彫り。 内面 輪軸整形。	体部下位-底 部3/8残。
14土-1	土師器 壺	埋没土	口径 - 底径 - 器高 2.3+	①粗砂 ②良好 ③橙7.5YR7/6		外面 上段揚状工具による平行沈線後中段重筋面文・下 段平行沈線。 内面 指頭圧痕後横方向撫で。	頸-胴部最上 位破片。
18土-1	土師器 壺?	埋没土	口径 (13.5) 底径 - 器高 3.4+	①石英、軽石 ②普通 ③黄い黄橙10YR6/4		口縁を掴みだし、上面が傾かに窪む。外面 口縁端部横 撫で後腹方向単位を重ねる様な刷毛目。下位斜方向細な 刷毛目。内面 口縁端部横撫で、全体に横方向斜な刷毛 目。	口縁部1/8残。

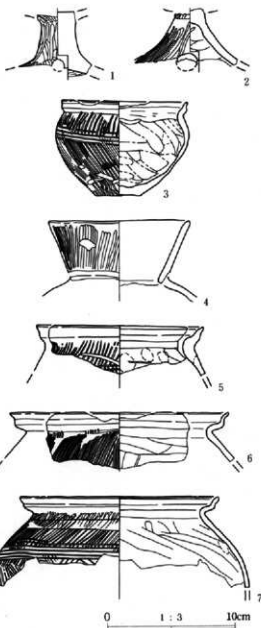
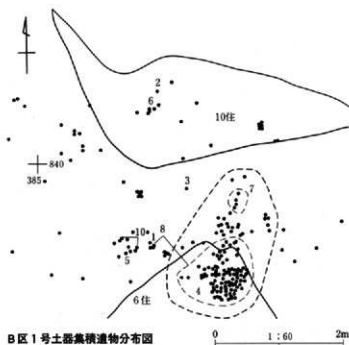


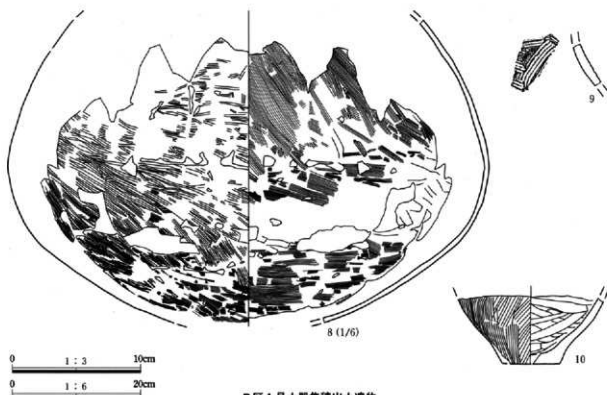
## 7. 包含層

### B区1号土器集積(PL. 95・105)

位置 835・840-380・385 重複 6号住居・10号住居→1号土器集積 土器集積の遺物出土レベルは72.06~72.31mで、6号住居・10号住居確認面より上位で検出。規模 東西5.75m 南北3.44mの範囲。埋没土 6号住居1層相当の堆積土中から主に出土。遺物 土師器甕・台付甕・鉢・高杯、弥生土器甕などが出土した。所見 遺物は古墳時代

前期が主体。各個体が比較的まとまって出土しているが、個体が重ねられたり、意図的に配置されたりといった様子は見られず、祭祀遺構とは考えにくい。また、硬化面や堅穴状の落ち込みも検出されず、住居等に伴うものではない。よってこの付近に廃棄等で置かれたか、6号住居の土層堆積から6号住居を削り込むような流れ込みによるものと推測する。





B区1号土器集積出土遺物

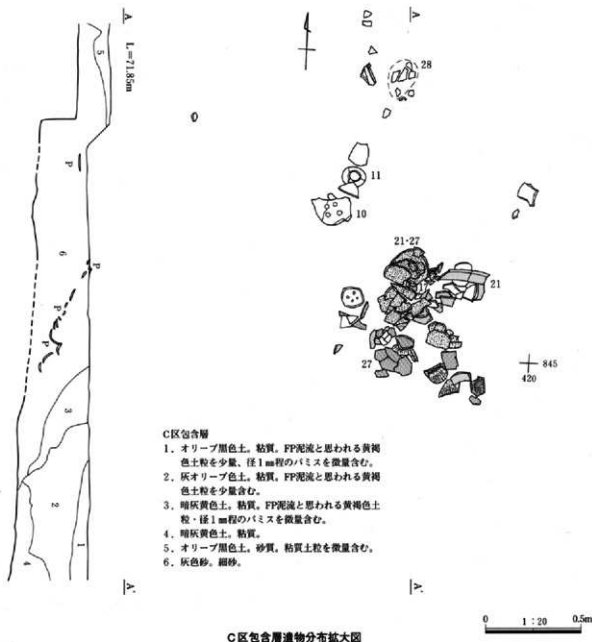
B区1号土器集積遺物観察表

番号	種類 器名	出土 位置	計測値	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 高杯	72.18m	口径 — 底径 — 器高 5.3+	①粗砂、白色泥物 ②普通 ③黄褐色10YR7/4	柱状の上半部から大きく外反する下半部、内孔3ヶ所。 外面 杯部縦方向磨き、胴部縦・斜方向磨き。 内面 撫で。	杯部最下位～ 胴部中位残。
2	土師器 高杯	72.24m	口径 — 底径 — 器高 4.2+	①粗砂、石英、軽石 ②普通 ③黄褐色10YR6/3	内孔3ヶ所。 外面 縦方向刷毛目後横方向撫で後縦方向磨き。 内面 横方向撫で。	胴部上半残。
3	土師器 鉢	72.06m	口径 10.0 底径 3.8 器高 7.5	①礫、粗砂、石英、 白色泥物 ②普通 ③黄褐色10YR5/4	外面 口縁～胴部最上位右方向横撫で、胴部左上方刷毛目後左下方刷毛目後横方向刷毛目、底部撫で。 内面 胴部以下斜方向横撫で後口縁～胴部左方向横撫で。	ほぼ完成形。
4	土師器 壺	72.13m、 830-840- 380-385	口径 (11.1) 底径 — 器高 6.4+	①粗砂、石英 ②普通 ③外赤10R4/6 内黄褐色10YR5/4	外面 赤彩。 外面 口縁部横撫で後縦方向磨き、胴部横方向撫で。 内面 胴部縦方向撫で後口縁部横撫で。	口縁部1/4、胴 部最上位一部 残。赤彩。
5	土師器 台付甕	72.31m	口径 (13.2) 底径 — 器高 3.8+	①粗砂、白色泥物 ②普通 ③黄褐色10YR5/2	外面 胴部以下左下方刷毛目後横方向刷毛目後口縁部横撫で。 内面 胴部指頸圧痕後撫で後口縁～胴部横撫で。	口縁～胴部最 上位1/8残。
6	土師器 台付甕	72.23m	口径 (17.1) 底径 — 器高 4.5+	①粗砂、白色泥物 ②普通 ③暗灰黄2.5Y5/2	外面 口縁部左方向横撫で、胴部最上位に口縁部横撫で。 内面 口縁部横撫で、胴部左方向磨き、胴部横方向撫で。	口縁～胴部最 上位1/8残。
7	土師器 台付甕	72.18 ~ 72.27m	口径 (15.6) 底径 — 器高 7.1+	①粗砂、石英、白色 泥物 ②普通 ③明黄7.5YR5/8	外面 口縁部左方向横撫で、胴部左上方刷毛目後左下 方向刷毛目後左方向刷毛目、胴部最上位に口縁部横撫で 時に付いたと思われる浅い横撫で。 内面 胴部指頸圧痕後撫で後口縁部横撫で、口縁部強 い横撫でによる筋状の沈着2条。	口縁～胴部最 上位1/2残。
8	土師器? 壺	72.13 ~ 72.25m	口径 — 底径 — 器高 47.1+	①礫、石英、白色泥 物 ②普通 ③黄7.5YR7/6	大型で壺形の可能性。外面 横・斜方向刷毛目後縦・斜 方向磨き、下位に多く刷毛目を残す。内面 下半 部縦・斜方向刷毛目または刷毛目状の磨き。 外面 簾状文後羽状文、左方向編文。 内面 斜方向撫で。	上・下踵を欠 いて胴部1/2 残。
9	弥生土器 甕	—	口径 — 底径 — 器高 3.0+	①粗砂、粗砂、石英 ②普通 ③黄褐色10YR4/3	外面 簾状文後羽状文、左方向編文。 内面 斜方向撫で。	破片。果林II 式期。
10	土師器 甕	72.17m	口径 — 底径 (4.6) 器高 5.4+	①粗砂、石英 ②普通 ③黄褐色10YR5/4	外面 斜方向刷毛目、底部磨削り後撫で。 内面 斜・横方向撫で。	胴部最下位～底 部1/2残。

C区包含層(PL. 95-96-105~107)

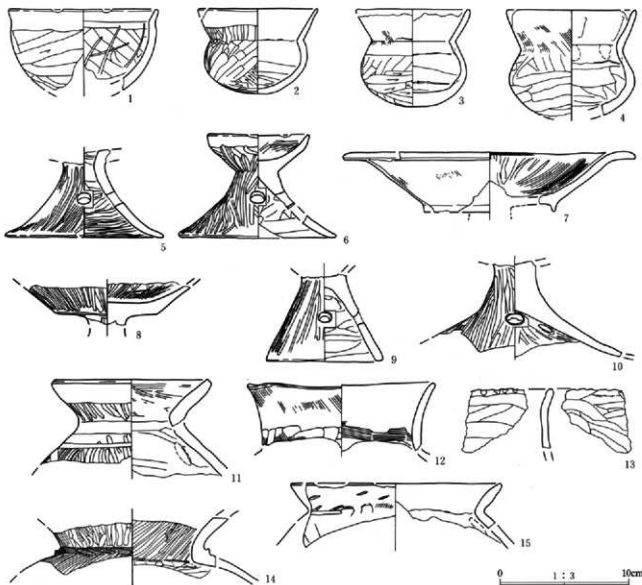
位置 830~845-415・420 重複 包含層→4号溝  
 包含層の遺物出土レベルは71.40~71.77mで、4号溝確認面より下層で検出。規模 東西6.88m 南北15.25mの範囲。埋没土 FP泥流層より下層に堆積する砂層(6層)内より出土。この層は、C区東端を南北にのびる微高地の際に堆積し、一部は径10cm大の砂礫層となる。微高地際の当該層全体から古

墳時代前期を中心とする土器が出土したが、図示した範囲に特に集中する。遺物 土師器甕・台付甕・壺・小型丸底鉢・器台・杯・高杯、弥生土器壺などが出土した。所見 遺物は古墳時代前期が主体。包含層の東の微高地には同時期の住居が分布しており、微高地から包含層の西に広がる低地への流れ込みと思われる。セクションより北方向からの流れが推測できる。

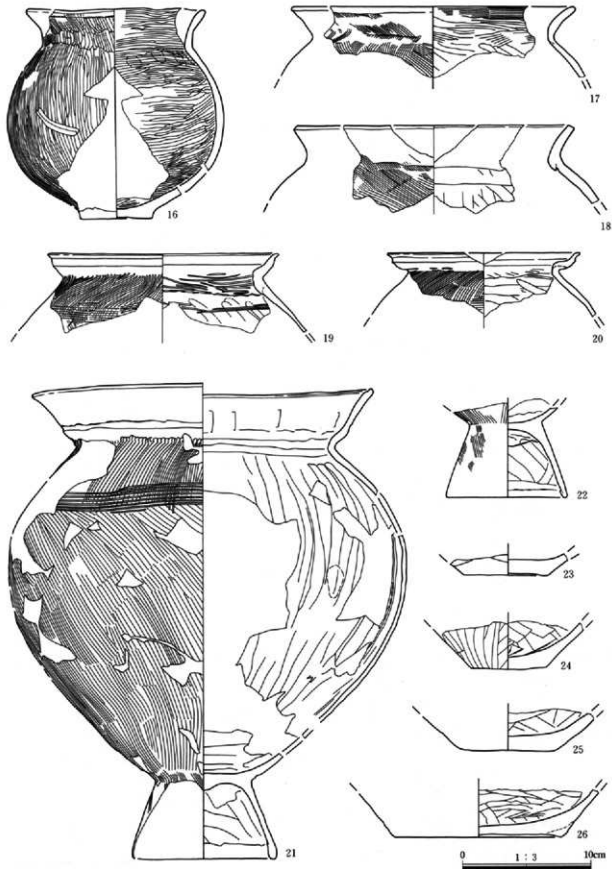




C区包含层遗物分布图

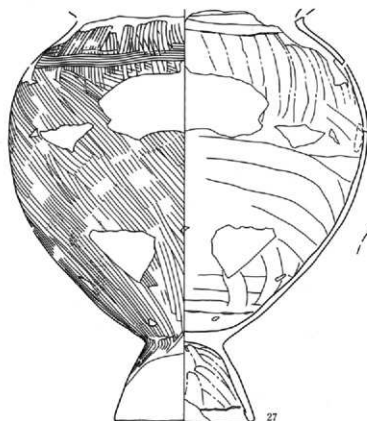


C区包含层出土遗物

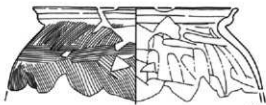


C区包含層出土遺物

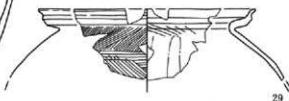
## 7. 包含層



27



28



29



30

0 1:3 10cm

## C区包含層出土遺物

## C区包含層遺物観察表

番号	種類 器種	出土 位置	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状態 備考
1	土師器 杯	71.76m	口径 (11.6) 底径 - 器高 6.4+	①粗砂、石英、白色 灰物 ②普通 ③赤 褐色5YR4/6	外面 体部旋削り後撫で後口縁部横撫で。 内面 体部斜方向撫で後口縁部横撫で後体部放射状撫 磨き。	体部下位に欠 いて1/4残。
2	土師器 小型丸底鉢	71.72m	口径 9.2 底径 1.8 器高 6.7	①粗砂、石英、白色 灰物 ②普通 ③赤 褐色5YR4/6	外面 口縁部下方方向旋削り後上半横撫で、胴部上半右左 方向旋削り一部撫で状、下半~底部横・斜方向旋削り。 内面 口縁部刷毛目後横撫で、体部横撫で後上半横撫 で。	口縁部1/2欠。 口縁部ほぼ 欠。
3	土師器 小型丸底鉢	71.68m	口径 (8.9) 底径 - 器高 7.7	①粗砂、粗砂、軽石 ②良好 ③鈍い黄橙10YR7/4	外面 口縁~体部上位斜方向刷毛目後横撫で、胴部斜 横方向旋削り後撫で。内面 口縁部横撫で、胴部撫 で、胴部上・下位に輪磨み痕。	口縁部1/4、胴 部最下位以下 1/2残。
4	土師器 小型丸底鉢	-	口径 (10.1) 底径 - 器高 8.3+	①粗砂、白色灰物、 軽石 ②普通 ③鈍い橙7.5YR7/4	外面 口縁~胴部斜方向刷毛目後横撫で、胴部上位縦方 向・中位以下横方向旋削り後撫で。 内面 口縁部旋撫で後横撫で、胴部上位指摺痕後横撫 で、胴部中位以下撫で、胴部上位に輪磨み痕。	口縁部1/4、胴 部最下位以下 1/2残。
5	土師器 器台	71.74m	口径 - 底径 (12.4) 器高 6.9+	①粗砂、白色灰物、 石英 ②良好 ③鈍い黄橙10YR7/4	内外面赤彩。 外面 縦方向密な磨磨き。 内面 磨削り後横方向密な磨磨き。	胴部、脚部 1/4残。赤彩。
6	土師器 高杯	71.75m	口径 8.0 底径 12.5 器高 8.2+	①粗砂、白色灰物、 石英、軽石 ②普通 ③浅黄橙10YR8/3	円孔3ヶ所。外面 器受部旋削り後口縁部横撫で後体 部縦方向磨磨き、脚部旋削り後横部横撫で後縦方向磨 磨き。内面 器受部口縁横撫で後下半斜方向・上半横方 向磨磨き、脚部旋撫で一部削り後密部横撫で。	脚部1/4欠。
7	土師器 高杯	-	口径 (23.3) 底径 - 器高 4.7+	①粗砂、軽石、石英 ②普通 ③明赤陶5YR5/6	口縁部大きく外反、下位に最下部を有す。 外面 口縁部・最下部横撫で、体部縦方向刷毛目後撫 で?。内面 口縁部横撫で後横方向磨磨き、体部横方向 刷毛目後縦方向磨磨き。	杯部1/4残。
8	土師砂 高杯	-	口径 - 底径 - 器高 2.9+	①粗砂、チャート、 石英 ②普通 ③鈍い黄褐10YR5/3	外面 左上方向旋削り後縦方向密な磨磨き、杯底部右方 方向旋削り後撫で、脚部最上位縦方向磨磨き。 内面 縦・斜方向密な磨磨き。	杯部下半~脚 部最上位1/2 残。

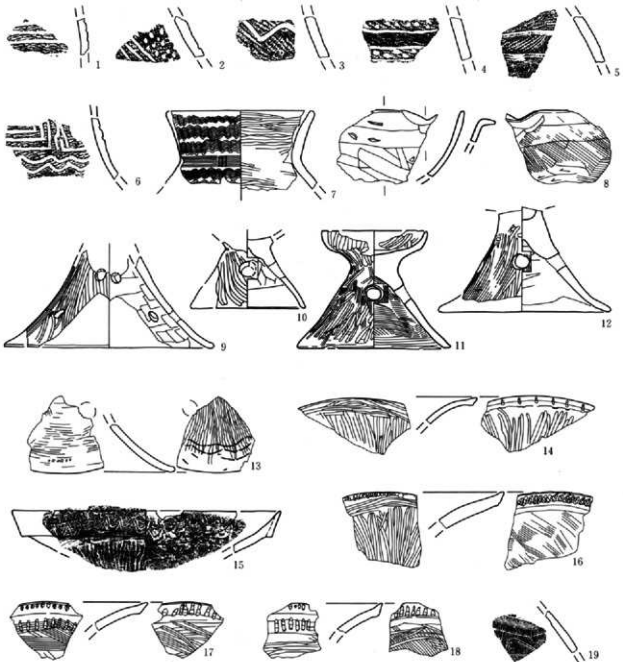
## 下増田常木遺跡

9	土師器 器台	-	口径 - 底径 9.0 器高 6.9+	①粗砂、細砂 ②普通 ③鈍い黄褐色7.5YR8/4	器内厚く肩部を平直に撫で、円孔3ヶ所。 外面 下方角削り後後縁部横撫で後縦方向密な磨き。 内面 横方向角削り。	脚部残。
10	土師器 高杯	71.60m	口径 - 底径 - 器高 7.5+	①粗砂、細砂、石英 ②普通 ③淡黄褐色2.5YR8/3	大きく開く低い脚、円孔4ヶ所、板状の唇部か。 外面 縦方向角削り。 内面 頸部上半部で、下半部横で後縁の粗い磨き。	端部を欠く脚部残。
11	土師器 壺	71.38m	口径 12.4 底径 - 器高 7.9+	①粗砂、軽石、黒色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR6/5	口縁部に一部凹縁のある面をもつ。外面 口縁部縦方向密な磨き後上半部横で、頸部横撫で、頸部縦方向密な磨き後横・斜方向撫で。内面 口縁部斜方向角削り後横撫で、頸部縦方向撫で、胴部一部に朝毛目後横方向撫で、指頭圧痕。	胴部1/4、口縁1/2残。
12	土師器 壺	-	口径 14.8 底径 - 器高 5.2+	①粗砂、石英 ②普通 ③鈍い橙7.5YR7/4	外面 口縁部左方向角削り後斜方向朝毛目後下位を残して横撫で。内面 口縁部斜方向角削り後下位左方向角削り後、下位を残して横撫で。	口縁部5/6残。
13	土師器? 甕	-	口径 - 底径 - 器高 4.8+	①細砂 ②普通 ③淡黄褐色7.5YR8/4	口唇部に匙状工具による刻み。 外面 磨削り後撫で。 内面 撫で。	破片。 南関東系か。
14	土師器 壺	71.77m	口径 - 底径 - 器高 4.6+	①粗砂、粗砂、白色鉱物 ②良好 ③橙7.5YR7/5	外面 口縁-胴部縦方向朝毛目後頸部突帯上・背面梯状工具による刻交縦方向磨き。 内面 口縁部斜方向朝毛目後斜方向角削り、胴部指頭圧痕後横方向角削り後撫で、一部横方向角削り。	口縁部下段-胴部最上位残。
15	土師器 甕	-	口径 (16.6) 底径 - 器高 5.1+	①細砂、白色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR4/3	外面 口縁部横撫で後斜方向角削り後横撫で。 内面 口縁部横撫で、胴部指頭圧痕後撫で。	口縁-胴部最上位1/4残。
16	土師器 甕	71.74m	口径 (14.0) 底径 5.6 器高 16.5	①粗砂、細砂 ②良好 ③明黄褐色10YR6/5	外面 口縁部横撫で後縦方向密な磨き、胴-底部磨削り後胴部最下位-底部横で後胴部縦方向密な磨き。 内面 口縁部縦方向角削り、胴部最上位指頭圧痕後胴-底部朝毛目後横方向密な磨き。胴-底部磨削り。	口縁部1/4、胴部1/2、底部残。
17	土師器 甕	71.49m	口径 (22.7) 底径 - 器高 5.7+	①細、粗砂、細砂、石英 ②普通 ③鈍い石褐色2.5YR5/4	外面 胴部朝毛目後口縁部斜方向朝毛目後横撫で。 内面 胴部斜方向撫で後口縁部横方向朝毛目後密い横撫で。	口縁-胴部最上位1/4残。
18	土師器 甕	825-410	口径 (22.0) 底径 7.0- 器高 7.0+	①細砂、軽石 ②普通 ③鈍い黄褐色5.0YR6/4	口縁部に面。外面 頸部以下左方向朝毛目後口縁部横撫で。内面 口縁部横撫で、胴部輪積み痕、胴部縦方向撫で-最上位横方向撫で。	口縁部1/6、胴部最上位1/4残。
19	土師器 台付甕	71.76m	口径 (18.0) 底径 - 器高 6.2+	①粗砂、軽石、白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR6/3	内外面口縁部赤彩、口縁部内面に弱い面。外面 口縁部横撫で、胴部左上方朝毛目後左下方朝毛目後左方向朝毛目。内面 口縁部横撫で-胴部縦方向撫で後頸-胴部最上位横方向朝毛目。	口縁-胴部最上位1/4残。
20	土師器 台付甕	-	口径 (15.0) 底径 - 器高 5.1+	①粗砂、石英、軽石 ②普通 ③暗赤褐色5YR3/6	口縁部下位に朝毛目時の工具痕。 外面 口縁部横撫で、胴部左下方朝毛目後横方向朝毛目。内面 頸部斜方向朝毛目後口縁部横撫で、胴部縦方向朝毛目後縦方向撫で後横方向撫で。	口縁-胴部最上位1/4残。
21	土師器 台付甕	71.41~71.75m	口径 26.7 底径 11.0 器高 37.2	①粗、粗砂、軽石、石英 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR5/4	口縁部内外面に輪積み痕。口縁部部を積み上げ内面に一部凹縁。外面 口縁部横撫で後胴部以下左方向朝毛目、胴部左上方朝毛目後左下方朝毛目後横方向朝毛目、台部右下方朝毛目。内面 口縁部横撫で後横撫で、頸部横撫で、胴部縦方向密な磨き、中位に指頭圧痕、胴部最下位-底部横撫で、台部縦・斜方向撫で、胴部折り返し。	口縁部1/8、胴部1/4欠。 山形系。
22	土師器 台付甕	71.38m	口径 - 底径 9.5 器高 7.4+	①粗、粗砂、白色鉱物 ②普通 ③鈍い橙5YR6/4	外面 胴部朝毛目、脚部朝毛目後撫で。 内面 胴部横で、脚部横で、胴部折り返し後横撫で、底部・台部上面に粘土貼付痕。	胴部最下位、台部3/4残。
23	土師器 甕	-	口径 - 底径 6.7 器高 1.7+	①粗、粗砂、石英 ②普通 ③灰褐色7.5YR4/2	外面 胴部磨削り後撫で、底部磨削り。 内面 磨削り。	胴部最下位-底部残。
24	土師器 甕	-	口径 - 底径 5.9 器高 3.7+	①粗砂、細砂、軽石、黒色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR4/4	外面 胴部左下方角削り後縦方向角削り、底部磨削り。 内面 磨削り。	胴部1/4、底部1/2残。
25	土師器 甕	-	口径 - 底径 7.8 器高 3.2+	①粗砂、細砂、白色鉱物 ②普通 ③橙7.5YR4/4	外面 胴-底部磨削り、器表の割れが顕著。 内面 斜方向角削り。	胴部最下位-底部3/4残。
26	土師器 甕	71.48m	口径 - 底径 (13.0) 器高 3.8+	①粗砂、細砂、軽石 ②普通 珪藻 ③赤褐色2.5YR4/6	外面 胴-底部磨削り後単位不明の密な磨き。 内面 胴-底部磨削り後横撫で。	胴部最下位-底部1/4残。
27	土師器 台付甕	71.41~71.59m	口径 - 底径 (11.0) 器高 31.8+	①粗砂、石英、軽石 ②普通 ③鈍い黄褐色10YR6/4	外面 頸部横撫で、胴部中位以下左上方朝毛目後上位下方朝毛目後胴部左方向朝毛目、胴部最下位-台部中位左下方朝毛目。内面 胴部中位以下横・斜方向角削り後横撫で、胴部最下位輪積み痕、胴部上位指頭圧痕・縦方向角削り後後頸部横撫で、台部横撫で、胴部折り返し。	口縁部、胴-台部1/4欠。

8. 遺構外出土遺物

28	土師器 台付罎	71.75~ 71.76m 840-420	口径 (16.0) 底径 - 器高 7.4+	①粗砂、石英、軽石 ②普通 ③明黄褐色10YR6/6	口縁端部・1段目内面に面。外面 口縁部横撫で、胴部左上方向刷毛目後左下方向刷毛目後左下方向刷毛目。 内面 口縁部横撫で頸部斜方向刷毛目後横撫で、胴部斜方向指撫で後横方向撫で。	口縁部1/4、胴部上位1/2残。
29	土師器 台付罎	-	口径 (17.0) 底径 - 器高 5.7+	①粗砂、黑色灰物、石英、軽石 ②普通 ③鈍い赤褐色5YR4/4	外面 口縁部横撫で、胴部下斜方向刷毛目後胴部以下左下方向刷毛目後胴部横方向向刷毛目。内面 胴部斜方向刷毛目後口縁部横撫で、胴部縦方向指撫で後撫で。	口縁~胴部上位1/4残。
30	弥生土器 罎	-	口径 - 底径 - 器高 5.2+	①粗砂 ②普通 ③浅黄褐色7.5YR8/4	外面 3条の比線間を縄文と押し引き刺突文で光臨。 内面 撫で。	頸部破片。中期中葉集林I併行分。

8. 遺構外出土遺物 (PL.106-107)

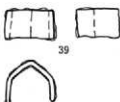
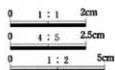
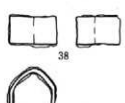
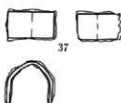
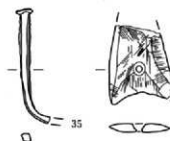
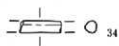
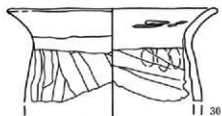


遺構外出土遺物

0 1 : 3 10cm



下増田常木遺跡



遺構外出土遺物



## 下増田常木道跡

22	土師器 壺	—	口径 — 底径 4.0+ 器高 4.0+	①粗砂、白色鉱物、石英 ②普通 ③鈍い赤褐5YR4/3	外面 頸部突帯付後縁状工具で刺突、胴部縦方向磨き状の撫で。 内面 横方向撫で、一部輪積み痕を残す。	胴～胴部最上位破片。
23	土師器 壺	840-385	口径 — 底径 4.2+ 器高 4.3+	①粗砂、石英、白色鉱物 ②普通 ③明赤褐5YR5/6	外面 撫で?後上段平行縦文後中段縦文後下段平行縦文後文線下を縦方向磨きか。 内面 撫で。	胴部上位破片。
24	土師器 壺	830-380	口径 — 底径 4.2+ 器高 4.7+	①白色・黒色鉱物、軽石 ②普通 ③灰褐7.5YR4/2	外面 口径～頸部横撫で後頸部錐状工具で刺突、胴部斜方向刷毛目後横方向刷毛目。 内面 胴部斜方向撫で後口径～頸部横撫で。	口径～胴部最上位破片。
25	土師器 壺	830-385	口径 (11.0) 底径 — 器高 4.7+	①粗砂、黒色鉱物、石英 ②普通 ③鈍い赤褐5YR4/3	口径端部に段のある面をもつ。外面 口径部横撫で、胴部左上方向刷毛目後左下方向刷毛目後横方向刷毛目。 内面 胴部斜方向撫で後口径～頸部横撫で。	口径～胴部上位1/4残。
26	土師器 壺	830-935	口径 — 底径 — 器高 4.0+	①粗砂、軽石、白・赤褐色鉱物 ②普通 ③鈍い黄褐10YR5/3	口径部3段以上。外面 口径部下段から上段へ各段毎に横撫で後胴部斜方向刷毛目。内面 胴部斜方向撫で後頸部横方向撫で後口径部横撫で。	口径部破片。
27	土師器 台付壺	830-385	口径 — 底径 — 器高 3.1+	①粗砂、石英、軽石 ②普通 ③鈍い赤褐10YR5/3	外面 口径部横撫で後胴部左下方向刷毛目。 内面 口径～頸部横撫で、胴部撫で後胴部斜・横方向刷毛目。	口径～胴部最上位破片。
28	土師器 台付壺	—	口径 — 底径 — 器高 2.8+	①白色鉱物 ②普通 ③鈍い黄褐10YR7/3	外面 口径部横撫で後胴部左下方向刷毛目。 内面 口径～頸部横撫で、胴部横・斜方向刷毛目。	口径～胴部最上位破片。 北陸東部系。
29	土師器 壺	835-380	口径 (16.0) 底径 — 器高 3.9+	①赤、白色鉱物、石英 ②普通 ③鈍い黄褐10YR5/4	口径端部に平坦面をもち、上方にやや積み上げる。 外面 口径～頸部横撫で、胴部横・斜方向刷毛目後撫でか。内面 口径部横撫で、一部縦方向撫で、胴部縦・横方向撫で。	口径～胴部最上位1/4残。 北陸東部系。
30	土師器 壺	825-400	口径 (16.4) 底径 — 器高 7.3+	①石英、黒・白色鉱物 ②普通 ③粗7.5YR5/6	外面 胴部縦・斜方向磨削り後口径部横撫で。 内面 胴部斜方向撫撫で後口径部横撫で。胴部最上位に指摺り痕。	口径～胴部上位1/4残。
31	土師器 杯	825-400 820-400	口径 (13.2) 底径 — 器高 4.8+	①軽石、石英、黒色鉱物 ②普通 ③粗7.5YR5/6	外面 体部磨削り後口径部横撫で。 内面 口径～体部外縁横撫で、体部中央撫で。	口径部1/4、体部外縁1/2残。
32	須恵器 碗	800-420	口径 11.1 底径 6.8 器高 5.1	①粗砂、白色鉱物 ②酸化鉄 ③鈍い黄褐10YR7/3	外面 体部縦横整形、底部回転糸切り・高台向端貼り付け時の回転撫で。 内面 縦横整形。	
33	土師器 杯	825-400	口径 (12.1) 底径 8.6 器高 3.5	①粗砂、石英 ②普通 ③明赤褐2.5YR5/6	外面体部・内面底部に磨き「文」。 外面 口径部横撫で、体部磨削り後撫で、底部磨削り。 内面 口径～体部横撫で、底部撫で。	口径～体部1/2、底部1/4欠。磨書。
34	石製品	810-420	長さ 2.2+ 径 0.6 重量 1.5		円柱状。研磨で主軸方向の弱い面をもち、断面不正円形。縦・横・斜方向に微少な擦痕あり。	端部欠。
35	鉄製品 釘	—	長さ 6.7+ 厚さ 0.4 頭部幅 0.9 重量 3.5		使用により端部が湾曲。全面に錆が付着。	端部欠。
36	石器 鏃	810-420	長さ 2.6+ 幅 2.0 厚さ 0.2 重量 1.6 材質 燧石		頸部・基部を中心に両面とも丁寧な研磨整形。両面穿孔。	先端・基部の一部欠。
37	鉄製品	840-380	長さ 2.4 幅 1.7 高さ 2.3 重量 8.2		1枚の板が3ヶ所で約45°屈曲し、端部の1辺はやや内傾する。全面に錆が付着。	端部一部欠。
38	鉄製品	840-380	長さ 2.7 幅 1.7 高さ 2.3 重量 8.3		1枚の板が3ヶ所で約45°屈曲し、端部の2辺はやや内傾する。全面に錆が付着。	完形。
39	鉄製品	840-380	長さ 2.7 幅 1.7 高さ 2.3 重量 9.1		1枚の板が3ヶ所で約45°屈曲する。全面に錆が付着。	完形。
40	銅鏡 天智元寶	—	鏡径 2.43～2.45 内径 2.01～2.06 孔径 0.70 厚さ 0.10 重量 2.16		北宋銭。初鑄 1023年。真書。	ほぼ完形。

# 自然科学分析

## 1. 下増田常木遺跡の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

群馬県域に分布する完新世に形成された地層には、浅間火山や榛名火山などのほか、南九州の鬼界カルデラから噴出したテフラ（いわゆる火山灰）が数多く分布している。これらのテフラの多くについては、すでに噴出年代が知られている。そして、これら示標テフラと遺物包含層や遺構との層位関係を求めることで、遺物や遺構の年代を知ることができるようになってきている。

そこで、土層中に火山灰層が認められた下増田常木遺跡においても、地質調査を行って土層の記載を行うとともに、テフラ検出分析を行って示標テフラとの同定を行い、土層や遺構の年代を調べることになった。調査分析の対象となった地点は、A区南壁東端、A区東壁北端、A区西壁北側、B区南壁深掘トレンチ、C区東壁、C区南壁第2地点、C区南壁第3地点、C区南壁第4地点、C区南壁第5地点、C区南壁第6地点、C区南壁第7地点の11地点（全体図参照）である。

### 2. 土層の層序

#### (1) A区南壁東端

この地点では、下位より褐灰色砂層（層厚19cm, 5c層）、灰褐色砂層（層厚29cm, 5b層）、白色細粒軽石混じり褐灰色土（層厚11cm, 5a層）、灰色砂質土（層厚14cm, 4層）、暗褐色土（層厚13cm, IV層）、灰色粗粒火山灰層（層厚10cm, III層）、暗灰褐色土（層厚10cm, II層）、灰褐色表土（層厚19cm, I層）が認められる（図1）。これらのうち、灰色粗粒火山灰層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ層（As-B, 新井 1979）に同定される。

#### (2) A区東壁北端

この地点では、下位より若干色調の暗い灰色土（層厚17cm, 4-2層）、黄色砂質シルト層（層厚19cm, 4-1層）、暗灰褐色土（層厚27cm）、黄褐色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚4cm, 以上IV層）、灰色粗粒火山灰層（層厚10cm, III層）が認められる（図2）。これらのうち、灰色粗粒火山灰層は、その層相からAs-Bに同定される。

#### (3) A区西壁北側

ここでは、下位より成層した灰色砂層（層厚51cm, 4-3層）、暗灰褐色土（層厚10cm, 4-2層）、黄灰色砂質シルト層（層厚21cm, 4-1層）、暗灰褐色土（層厚6cm）、灰色土（層厚9cm）、暗灰褐色土（層厚6cm, 以上IV層）、灰色粗粒火山灰層（層厚4cm, III層）が認められる（図3）。これらのうち、灰色粗粒火山灰層は、層相からAs-Bに同定される。

#### (4) B区南壁深掘トレンチ

B区南壁深掘トレンチでは、下位より成層した灰色砂層（層厚10cm以上）、暗灰色粘質土（層厚5cm）、黄灰色砂層（層厚2cm）、灰褐色砂層（層厚14cm）、灰色粘質土と灰色砂の互層（層厚9cm）、灰色砂層（層厚3cm）、黄灰色シルト層（層厚0.5cm）、灰色砂層（層厚0.8cm）、灰色粘質土（層厚3cm）、黄灰色シルト層（層厚8cm）、黄色シルト質砂層（層厚23cm）、灰色土（層厚21cm）、黄灰色砂層（層厚2cm）、暗灰色砂質土（層厚2cm）、暗灰褐色砂質土（層厚18cm）、暗灰色土（層厚47cm）の連続が認められた（図4）。

(5) C区東壁

C区東壁では、下位より亜円礫層（層厚5cm以上、礫の最大径88mm）、層理の発達した灰色砂層（層厚40cm）、成層したテフラ層（層厚3.2cm）、灰色砂層（層厚50cm）、暗灰色土（層厚8cm）、灰色砂層（層厚7cm）、黒色泥層（層厚0.4cm）、暗灰色土（層厚2cm）、桃色シルトの薄層を挟む灰色砂層（層厚6cm）、桃色シルト層（層厚8cm）、灰色砂層（層厚5cm）、暗灰色土（層厚11cm）、灰色砂層（層厚3cm）、黄褐色砂質土（層厚8cm）、暗灰色表土（層厚17cm）が認められる（図5）。これらのうち、成層したテフラ層は、下位より褐色細粒火山灰層（層厚0.4cm）、白色軽石混じり黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、成層した黄灰色細粒火山灰層（層厚2cm）からなる。

(6) C区南壁第2地点

C区南壁第2地点では、下位より暗褐色泥炭層（層厚3cm以上）、黒褐色泥炭層（層厚1cm）、成層したテフラ層（層厚11.3cm）、暗褐色泥炭層（層厚2cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚1.8cm）、暗褐色泥炭層（層厚1cm）、黒褐色泥炭層（層厚0.3cm）、暗褐色泥炭層（層厚2cm）、黒褐色泥炭層（層厚1cm）、暗褐色泥炭層（層厚4cm）、黒褐色泥炭層（層厚2cm）、暗褐色泥炭層（層厚6cm）、黒褐色泥炭層（層厚1cm）、青灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.6cm）、成層した暗灰色泥炭層（層厚7cm）、砂混じり暗灰色土（層厚29cm）、黄色砂層（層厚2cm）、灰色砂質土（層厚10cm）、黄褐色砂質土（層厚18cm）、灰色砂質土（層厚31cm）、黄褐色砂質土（層厚6cm）、灰色砂質土（層厚13cm）、暗灰色表土（層厚18cm）が認められる（図6）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より褐色粗粒火山灰層（層厚2cm）、桃色粗粒火山灰層（層厚3cm）、黄白色粗粒火山灰層（層厚2cm）、かすかに成層した暗灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）、桃色細粒火山灰層（層厚1cm）、黄白色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）の連続からなる。このテフラ層は、その層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井1979)に同定される。また、その上位の灰色粗粒火山灰層は、その層位や層相などから1128(大治3)年に浅間火山から噴出した浅間粕川テフラ(As-Kk, 早田1991, 1995)に同定される。

(7) C区南壁第3地点

C区南壁第3地点では、下位より黒褐色泥炭層（層厚2cm以上）、As-B（層厚13cm）、暗灰色泥炭層（層厚0.3cm）、灰色砂層（層厚4cm）、暗灰色泥炭層（層厚0.3cm）、青灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、成層した黒褐色泥炭層（層厚10cm）、砂混じり暗灰色土（層厚3cm以上）が認められる（図7）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より褐色粗粒火山灰層（層厚2cm）、桃色粗粒火山灰層（層厚3cm）、黄白色粗粒火山灰層（層厚2cm）、かすかに成層した暗灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）、桃色細粒火山灰層（層厚1cm）、黄白色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）の連続からなる。このテフラ層は、その層相からAs-Bに同定される。また、その上位の灰色粗粒火山灰層は、その層位や層相などから、As-Kkに同定される。

(8) C区南壁第4地点

C区南壁第4地点では、礫層の上位に、下位より灰色砂質土（層厚6cm）、黒褐色泥炭層（層厚3cm）、As-Bの連続が認められる（図8）。

(9) C区南壁第5地点

C区南壁第5地点では、下位より灰色砂質土（層厚3cm以上）、黒灰色土（層厚3cm）、As-Bの連続が認められる（図9）。

(10) C区南壁第6地点

谷脇の微高地の斜面上に位置するC区南壁第6地点では、下位より灰色砂質土（層厚4cm以上）、暗灰色土

(層厚 3 cm)、As-B の連続が認められる (図10)。

#### (11) C区南壁第7地点

谷脇の微高地背後の水田面に位置するC区南壁第7地点では、下位より灰色砂質土 (層厚 3 cm 以上)、黒褐色泥炭層 (層厚 3 cm)、As-B (層厚 8 cm)、暗灰色土 (層厚 2 cm 以上) が認められる (図11)。

### 3. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

テフラ層およびテフラ層を含む可能性の大きい土層から採取された6試料について、テフラ検出分析を行い、示標テフラの検出同定を行った。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

#### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。B区南壁深掘トレンチ試料番号3には、あまり発泡の良くない白色軽石 (最大径2.1mm) や、比較的良く発泡した灰色軽石 (最大径1.8mm) が比較的多く含まれている。前者の班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ (Hr-FA, 新井 1979, 坂口 1986, 早田 1989, 町田・新井 1992) およびその火山泥流、あるいは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井 1962, 坂口 1986, 早田 1989, 町田・新井 1992) およびその火山泥流に由来すると考えられる。一方、後者の班品には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 新井 1979) に由来すると考えられる。したがって、試料番号3の堆積年代は少なくともHr-FA降灰以後と考えられる。

B区南壁深掘トレンチ試料番号2からは、軽石は検出されなかった。試料番号1には、比較的良く発泡した淡褐色軽石 (最大径2.9mm) が多く含まれている。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相からAs-Bに由来すると考えられる。試料番号1にはAs-Bの一次堆積層に特有のユニットの組み合わせが認められないことから、何らかの作用による攪乱を受けていると考えられる。ただし、純度や上下の土層の層相を考慮すると、この試料付近にAs-Bの降灰層相があると考えて良いものと思われる。

C区東壁の試料番号2には、あまり発泡の良くない白色軽石 (最大径3.6mm) が比較的多く含まれている。班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。層相を合わせて考慮すると、このテフラはHr-FAに同定される。なお、試料番号1から軽石粒子は検出されなかったが、その特徴的な層相から、試料番号1のシルト層は、Hr-FPの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物の可能性が非常に大きい。

C区南壁第2地点の試料番号1には、比較的よく発泡した淡灰色軽石 (最大径1.1mm) がごく少量含まれている。この青灰色砂質細粒火山灰層については、層位や層相から、浅間火山の1281(弘安4)年の噴火に由来するテフラに同定される可能性が考えられる。

#### 4. 小結

下増田常木遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、下位より榛名二ツ岳洪川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年)、浅間船川テフラ (As-Kk, 1128年) のほか、1281(弘安4)年の浅間火山の噴火で噴出した可能性のあるテフラを検出できた。本遺跡で検出された水田の層位は、As-B直下およびAs-Bの上位にある。

【文献】

新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要, 自然科学編, 10, p.1-79.

新井房夫 (1979) 関東地方北西部の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.

板口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p.297-312.

早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち, 佐久考古通信, no.53, p.2-7.

早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史, 御代田町誌, 自然編, p.22-46.

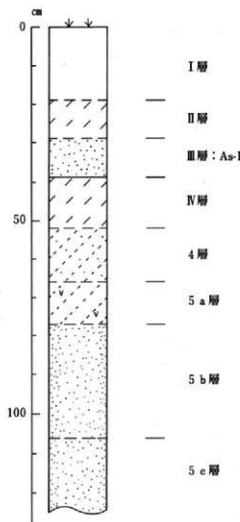


図1 A区南壁東端地点土層柱状図

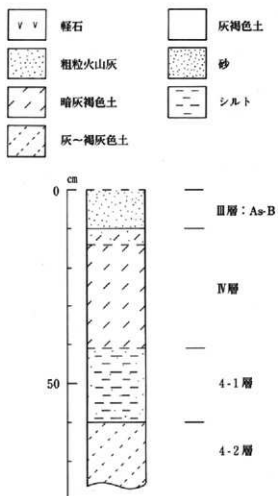


図2 A区東壁北端地点土層柱状図

1. 下増田常木遺跡の土層とテフラ

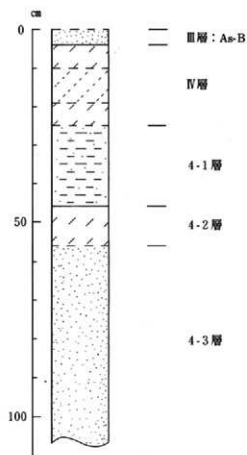


図3 A区西壁北側地点土層柱状図

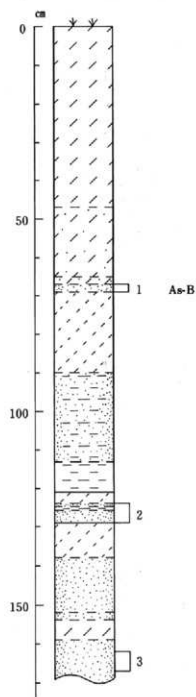
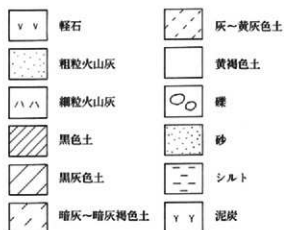


図4 B区南壁深堀トレンチ土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



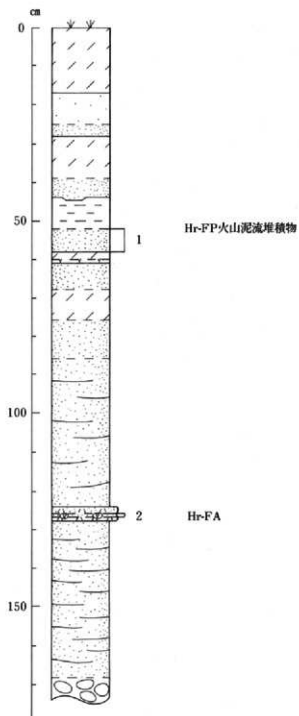


図5 C区東壁地点土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

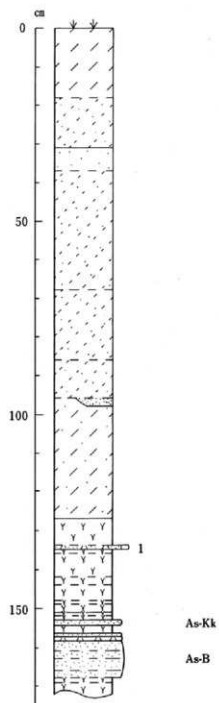


図6 C区南壁第2地点土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

1. 下増田常木遺跡の土層とテフラ

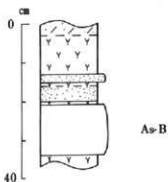


図7 C区南壁第3地点土層柱状図



図8 C区南壁第4地点土層柱状図



図9 C区南壁第5地点土層柱状図



図10 C区南壁第6地点土層柱状図

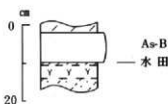


図11 C区南壁第7地点土層柱状図

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石		
		量	色調	最大径
B区南壁深掘トレンチ	1	+++	淡褐	2.9
	2	-	-	-
	3	++	白>灰白	2.1, 1.8
C区東壁	1	-	-	-
	2	++	白	3.6
C区南壁第2地点	1	+	淡灰	1.1

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度,  
+: 少ない, -: 認められない.

## 2. 下増田常木遺跡のプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (藤原・杉山 1984)。

### 2. 試料

試料は、A区南壁東端、A区東壁北端、A区西壁北側、C区東壁、C区南壁第2地点、C区南壁第3地点、C区南壁第4地点、C区南壁第5地点、C区南壁第6地点、C区南壁第7地点の10地点から採取された計28点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1g に対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g 添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキッパ) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10 $\times$ 5g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、タケ亜科は0.48である。

### 4. 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2および図1~10に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

### 5. 考察

#### (1) 水田跡の検討

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、関東周辺では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして

検討を行った。

#### A区

##### 1) 南壁東端

IV層 (As-B直下、試料1) と4層 (試料2) について分析を行った。その結果、IV層 (試料1) からイネが検出された。密度は800個/gと低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、IV層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

##### 2) 東壁北端

IV層 (As-B直下、試料1) と4-2層 (洪水層直下、試料2) について分析を行った。その結果、4-2層 (試料2) からイネが検出された。密度は800個/gと低い値であるが、同層は直上を洪水層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、4-2層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

##### 3) 西壁北側

IV層 (As-B直下、試料1) と4-2層 (洪水層直下、試料2) について分析を行った。その結果、4-2層 (試料2) からイネが検出された。密度は1,500個/gと低い値であるが、同層は直上を洪水層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、4-2層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

#### C区 (表1参照)

##### 1) Hr-FA直下

C区東壁の試料について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

##### 2) Hr-FP泥流直下

C区東壁の試料について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

##### 3) As-Bの下層

C区南壁の第2地点、第4地点、第7地点の試料について分析を行った。その結果、第7地点からイネが検出されたが、密度は1,000個/g前後と低い値である。

##### 4) As-B直下

C区南壁の第2地点～第7地点の試料について分析を行った。その結果、第2地点、第5地点、第6地点、第7地点からイネが検出された。密度はいずれも1,000個/g前後と低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

##### 5) As-B直上

C区南壁の第2地点と第3地点の試料について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

##### 6) As-Bの上層

C区南壁の第2地点と第3地点の試料について分析を行った。その結果、第2地点の砂層直下層からイネが検出された。密度は2,200個/gと比較的低い値であるが、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

## 自然科学分析

### (2) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、As-B 直下層ではイネの検出されないC区南壁の第3地点と第4地点をはじめ、第2地点でもヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

このことから、As-B 直下層の堆積当時は、調査区の比較的広い範囲にヨシ属が繁茂する湿地が分布していたものと推定される。このように、As-B 直下層でヨシ属が卓越する状況は前橋市周辺などでも一般に認められており、比較的広い地域に及ぶ現象として注目される。

### 6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、A区東壁北端と西壁北側の洪水直下層（4-2層）からは、少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。C区で水田遺構が検出された浅間Bテフラ（As-B, 1108年）直下層からは部分的に少量のイネが検出され、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、As-B の下層や上層でも、部分的に少量のイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

イネの密度が低い原因としては、①稲作が行われていた期間が短かったこと、②土層の堆積速度が速かったこと、③洪水などによって耕作土が流出したこと、④採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられるが、As-B 直下層ではヨシ属が卓越していることから、当時は何らかの原因でヨシ属などが繁茂する湿地の状況になっていたものと推定される。

### 【文献】

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の注離体標本と定量分析法 - ,

考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 - ,

考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 下増田常木遺跡C区におけるイネのプラント・オパールの検出状況

記号: ○5,000個/g以上, ○3,000個/g以上, △3,000個/g未満, ×未検出, -該当試料なし

層準 \ 地点	C区東壁	C区南壁					備考	
		第2	第3	第4	第5	第6		第7
As-B の上層	-	△	×	-	-	-	-	
As-B 直上	-	×	×	-	-	-	-	
As-B 直下	-	△	×	×	△	△	△	1108年
As-B の下層	-	×	-	×	-	-	△	
Hr-FP 泥流直下	×	-	-	-	-	-	-	
Hr-FA 直下	×	-	-	-	-	-	-	6世紀初頭



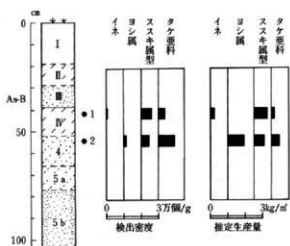


図1 A区南壁東端P.O.分析結果

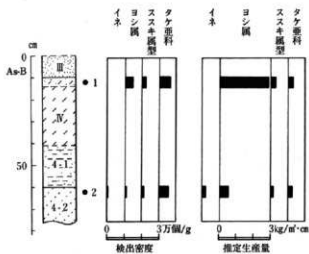


図2 A区東壁北端P.O.分析結果

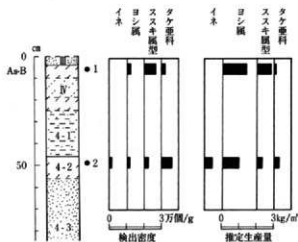


図3 A区西壁北側P.O.分析結果

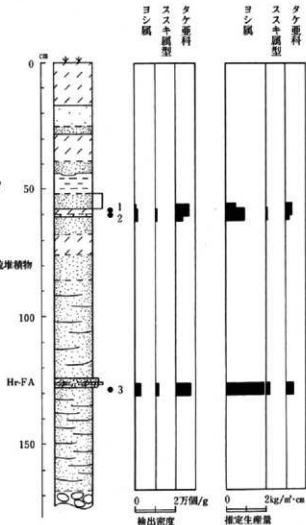


図4 C区東壁P.O.分析結果

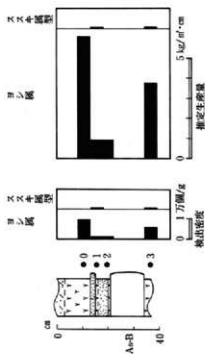


図6 C区南壁第3地点P.O.分析結果

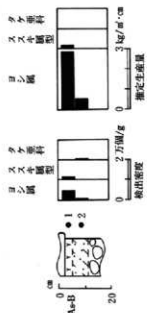


図7 C区南壁第4地点P.O.分析結果

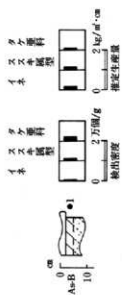


図8 C区南壁第5地点P.O.分析結果

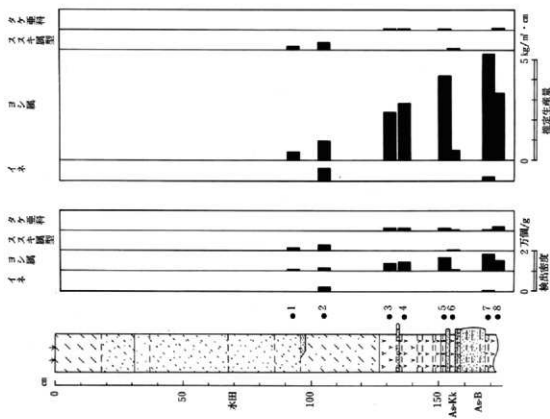


図5 C区南壁第2地点P.O.分析結果



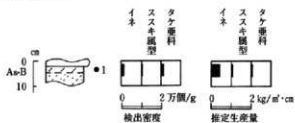


図9 C区南壁第6地点P.O.分析結果

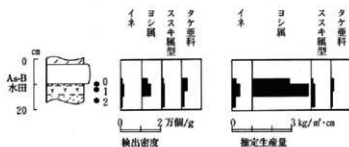
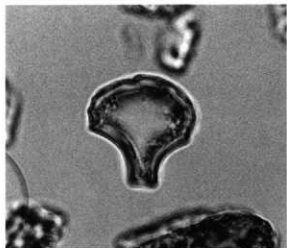
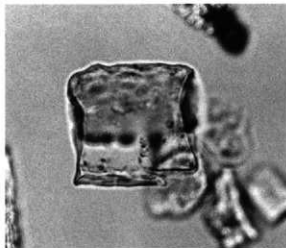


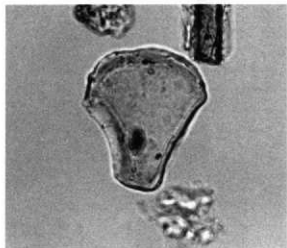
図10 C区南壁第7地点P.O.分析結果



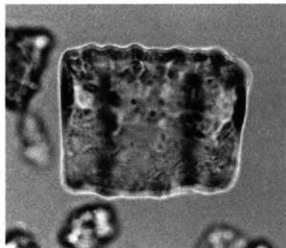
1. イネ A区西壁北側 試料No 2



2. イネ (側面) A区南壁東端 試料No 1

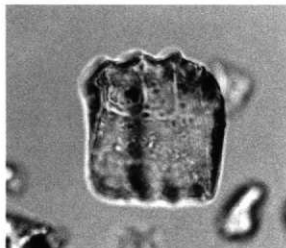


3. ススキ属型 A区南壁東端 試料No 1

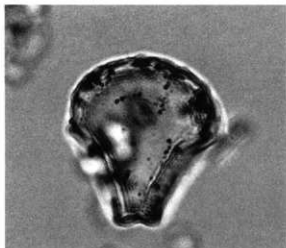


4. ネザサ節型 A区西壁北側 試料No 2

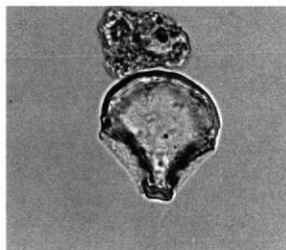
2. 下増田常木遺跡のプラント・オパール分析



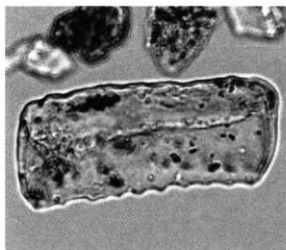
5. ネザサ節型 A区南壁東端 試料No 1



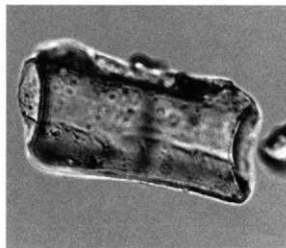
6. イネ C区南壁第7地点 試料No 1



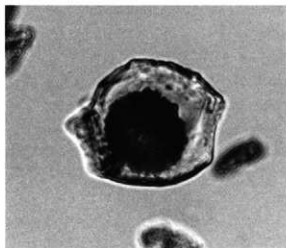
7. イネ C区南壁第2地点 試料No 2



8. キビ族型 C区南壁第7地点 試料No 1



9. キビ族型 C区南壁第7地点 試料No 0

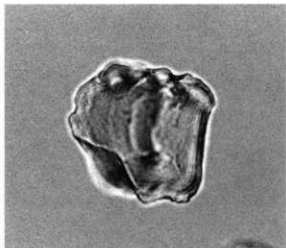


10. ジュズグマ族 C区南壁第3地点 試料No 3

0 50 $\mu$ m



11. ススキ族 C区南壁第7地点 試料No 2



12. ネザサ族 C区南壁第5地点 試料No 1

0 50 $\mu$ m

### 3. 上増田島・下増田常木遺跡出土木製品の樹種同定

株式会社 パレオ・ラボ

上増田島遺跡の井戸および溝から出土した木材9点と、下増田常木遺跡の溝から出土した木材1点の計10点について樹種同定を行い、用材選択の傾向やその背景について調査した。これら出土材の時代は中世～近代以降に取まるもので、比較的新しいものである。県内の近世の樹種同定例は他の時代と比較して少なく、資料の蓄積という面において意義が大きいと見える。

#### 試料と方法

試料はすでに群馬県埋蔵文化財調査事業団により採取され、プレパラートにされたものである。ただし、遺物 No.565・569については切片が小さいことや横断面の切片の未採取により誤同定の可能性があったため、木製品から直接剃刀を用いて切片の採取を行った。プレパラートは光学顕微鏡にて40～400倍で検鏡し、同定は現生標本との対照に拠った。これらプレパラートは(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

#### 結果および考察

樹種同定の結果、計10点の出土材の中には5分類群が認められた(表1参照)。内訳は、針葉樹材でマツ属複維管束亜属、スギの2分類群、広葉樹材でヤシャブシ亜属、コナラ節、ムクノキの3分類群である。なお、検出された広葉樹材はすべて落葉樹である。

次に、同定の根拠として検出された分類群①～⑤の解剖学的記載を行うと共に、代表的な切片の光学顕微鏡写真を写真図版1～2に付す。また、分布・生態・材質についても簡潔に記す。

#### ①マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* (マツ科) 写真図版1a～1c

仮道管と放射柔組織、放射仮道管、および水平・垂直両樹脂道を取り囲む薄壁のエピセリウム細胞からなる針葉樹材。放射仮道管の水平壁は内腔側に向かって鋸歯状の突起を有する。分野壁孔は大型の窓状。いわゆるニヨウマツ類の材で、材組織の保存が良い時にはアカマツ *P. densiflora* Sieb. et Zucc. カクロマツ *P. thunbergii* Parlatoe かの区別がつく。アカマツは主に尾根沿いなどの立地や二次林山中などの土壌の薄く明るい立地にみ

### 3. 上増田高・下増田常木遺跡出土木製品の樹種同定

られ、クロマツは海岸部や湖岸に広く分布する。いずれも高木になる常緑の針葉樹で、材質は針葉樹材の中では重硬で割裂困難、保存性は中庸であるが、樹脂分が多いため水湿には耐性がある。

#### ② スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don (スギ科) 写真図版2a~2c

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量多く明瞭。分野壁孔はスギ型で大きく、1分野にふつう2個。スギは高木になる常緑針葉樹で、天然分布は降水量の多い地域に限られて点在し、特に東日本の日本海側に多い。材質は軽軟で割裂性・加工性に優れ、強度も適度にあるため広い用途がある。

#### ③ ヤシャブシ亜属 *Alnus* subgen. *Alnaster* (カバノキ科) 写真図版3a~3c

小型の丸い導管が単独あるいは数個放射方向に複合してまばらに分布する散孔材。導管の分布は年輪の始めに偏る。導管の穿孔は階段状で20本程度。放射組織は同性で単列であるが、種によっては複合状のものを交える場合もある。ヤシャブシ亜属には、ヤシャブシ *A. firma* Sied. et Zucc. やその変種であるミヤマヤシャブシ var. *hirtella* Franch. et Savat. などが含まれる。いずれも小高木程度の落葉広葉樹で、崩壊地や急な斜面などの日当たりの良く土壌の薄い立地にみられる。材質は重さ・硬さが中庸～やや重硬で、加工は容易である。遺跡出土材として検出されるのは珍しい。

#### ④ コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* (ブナ科) 写真図版4a~4c

年輪の始めに大型の丸い導管が単独で1~2列に並び、晩材では小型でやや角張った導管が火炎状に配列する環孔材。導管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものに大型の複合放射組織が混在する。いわゆるナラ類の材で、温帯下部~暖温帯に分布するコナラ *Q. serrata* Thunb. ex Murray、温帯に分布するミズナラ *Q. crispula* Blume などが含まれる。いずれも重硬で弾性を持つ強い材である。

#### ⑤ ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. (ニレ科) 写真図版5a~5c

中型でやや丸く壁の厚い導管が、単独あるいは放射方向に2~3個複合して均一でまばらにならぶ散孔材。導管の穿孔は単一。放射組織は上下端に直列細胞をもつ異性でおおむね2~3列。ムクノキは高木になる落葉広葉樹で、主に河畔・溪畔などの過湿な立地に見られる暖温帯(関東以南)を代表する樹木のひとつである。材質は硬さ・重さが中庸であるが靱性に富む。

器種別の傾向をみてみると、杭の可能性のあるNo.560・561の木材にはマツ属複雑管束亜属・ヤシャブシ亜属の材が見出された。この様な類の杭に見出される樹種は雑多で、特に材質に着目した用材の選択がなされているとはいえない傾向が多い。点数が2点と少ないために深く議論できないが、今回検出された杭材も特に材質を選ばず身近な材を用いた結果である可能性が考えられる。

用途不明ながら井戸枠の可能性があるとされる木材には、すべてマツ属複雑管束亜属の材が用いられていた。いずれもA区2号井戸からの出土であり、樹種も同様であることから明確な選択性が働き、かつ同一の人物か集団による加工がなされた可能性が高いとみられる。マツ類の材が用いられたのは、樹脂分が多く水湿への耐性が高いことを考慮して選択した結果なのであろうか。地点は離れているが、中世以降の層準でマツ属複雑管束亜属とみられるマツ属の顕著な増加が花粉分析で確認されている(徳永 1982)。時代的にみても島遺跡周辺でこうしたニヨウマツ類が増加し、きわめて身近な材であった可能性が高く、利用しやすかったとみられる。さらに、大径の材が用いられていることは、ニヨウマツ類が増加して高木層を占めていたことを指し示すものであるといえる。その他、曲物底板とみられる製品にはスギが用いられている。群馬県内の近世の類例でも、板材から製作される製品にはこうしたスギ、ヒノキ属、モミ属といった軽軟な針葉樹材が多く(例えば藤根 1992、巖根・鈴木 1994)、一般的傾向であるといえる。

#### 自然科学分析

また、井戸最下層の井戸枠材として、コナラ節の材が用いられている。この材は重硬かつ丈夫で、県内では古くから建築材や農具などの強度を必要とするものに使用されている（例えば、能城・鈴木 1988、藤根 1992、藤根・鈴木 1994、高橋・田中 1996）。高遺跡例も、同じ意図を以て選択されたとみられる。この材は大物であったが、コナラ節の樹木が高木になり、大径を得られることも選択された背景に考えられる。

#### 【引用文献】

- 藤根 久 1992 「二之宮千足遺跡出土材の樹種」『二之宮千足遺跡（自然科学・分析編）』群馬県埋蔵文化財調査事業団、30-49  
 藤根 久・鈴木 茂 1994 「元総社寺田遺跡出土材の樹種同定と周辺植生」『元総社寺田遺跡Ⅱ《木器編》』群馬県埋蔵文化財調査事業団、135-185  
 鈴木三男・能城修一 1986 「新保遺跡出土加工材の樹種」『新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大講編<本文編>』群馬県埋蔵文化財調査事業団、71-94  
 高橋 敦・田中義史 1996 「北町遺跡から出土した炭化材・種実遺体の同定」『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教育委員会、347-355  
 徳水重元 1982 「日高遺跡の花粉分析」『日高遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団、349-360

表1. 樹種同定結果

No.	遺跡	遺物 No.	地区・遺構	器種	樹種	時代
1	島	560	D区6号溝	杭か	マツ属複雑管束亜属	中世～近世
2	島	561	D区6号溝	杭か	ヤシャブシ亜属	中世～近世
3	島	562	D区1号井戸	井戸枠	コナラ節	中世～近世
4	島	565	D区1号井戸	井戸枠	コナラ節	中世～近世
5	島	566-1	A区2号井戸	井戸枠か	マツ属複雑管束亜属	江戸後半
6	島	566-2	A区2号井戸	井戸枠か	マツ属複雑管束亜属	江戸後半
7	島	567	A区2号井戸	不明	ムクノキ	江戸後半
8	島	568	A区2号井戸	井戸枠か	マツ属複雑管束亜属	江戸後半
9	島	569	A区2号井戸	曲物底板か	スギ	江戸後半
10	常木	D区2溝-2	D区2号溝	栓か	スギ	近世以降

3. 上増田島・下増田常木遺跡出土木製品の樹種同定

上増田島・下増田常木遺跡出土木製品切片の光学顕微鏡写真(1) a: 横断面 b: 放射断面 c: 接線断面

※スケールに注意。( ) 内の番号は分析%を表す。



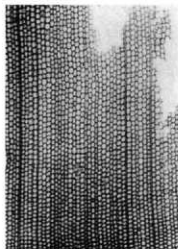
1a. マツ族薄壁管束部属(1)bar:1.0mm



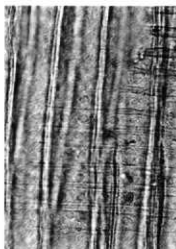
1b. 同 bar:0.1mm



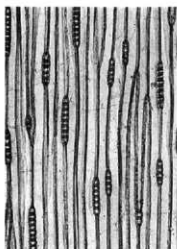
1c. 同 bar:0.4mm



2a. スギ(10)bar:1.0mm



2b. 同 bar:0.1mm



2c. 同 bar:0.4mm



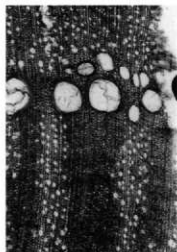
3a. ヤシブシ亜属(2)bar:1.0mm



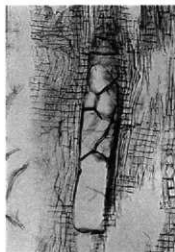
3b. 同 bar:0.2mm



3c. 同 bar:1.0mm



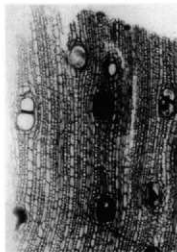
4a. コナラ節(3) bar:1.0mm



4b. 同 bar:0.4mm



4c. 同 bar:0.4mm



5a. ムクノキ(7) bar:1.0mm



5b. 同 bar:0.4mm



5c. 同 bar:0.4mm

# まとめ

## 1. 地割り

鳥遺跡の遺構分布は、D1・2区においてD区5・8・9号溝に挟まれた幅約6m程の部分が疎となり、この北及び南に集中する。水田などの生産遺構がない微高地上に立地し、南側に大型の掘立柱建物や井戸があることなどから、この溝は屋敷などを囲む区画のための溝と考えられる。溝で挟まれた帯状の部分は「道」として機能していたものであろう<sup>13)</sup>。この延長上にあるA区2号溝とB区1・5号溝で挟まれた現道部分(調査区と現道等の関係は図6参照)は未調査のため詳細は不明だが、過去にも「道」として機能していたことは十分考えられよう。中世から近世の全較または一時期において東西方向にのびる道が、少なくともC・D区分の約60mはのびていたと予想する。

調査に入る段階ではD区のこの位置に道はなかったが、昭和9年に作成された遺跡の位置する旧城南村の耕地図「群馬県勢多郡城南村木瀬地区全図」(図1)には、周囲の道の形状や地番からD区の「道」に相当する部分に道が記載され、西でD2・D3区を分ける現道に、東でA・B区とC区を分ける現道にそれぞれクランクして接続する様子が読める(①⇒部分)。また、A・B区の境である現道は東側が道、西側が地境となっている(②⇒部分)。明治42年に大日本帝國陸地測量部が発行した「二万分一地形圖前橋及高崎傍橋二號」(図2)ではA・B区の境は読みとれないもののD区の「道」に相当する位置に、東西方向にのびて両端でクランクする道のあることがわかる(①⇒部分)。明治20年製の「二万分一迅速測圖」(図3)ではC・D区の「道」から続いてA・B区の境へ「道」が延びている様子が読める(①⇒部分)。明治6年製作の「壬申地券発行にかかる地引村絵圖 下増田村」(図4)ではC・D区の「道」のみが記されている(①⇒部分)。調査区内の土地は図4及び「壬申地券発行にかかる地引村絵圖

上増田村」(図5)により、B区北半とD2区西半が畑、他は屋敷であったことがわかる。発掘調査により、近世以前において少なくともA区とD2区は屋敷であった可能性が高いことが判明したが、この景観を明治初期も受け継いでいたと思われる。

鳥遺跡で想定した「道」は、入り組む屋敷敷地を幾度かクランクしながらむら内を南から北に抜け、北に隣接する微高地上に立地する近戸神社の南北にのびる参道へとつながる。特にC・D区の「道」は継続性があり、むら内レベルで基軸となるものの一つとみなせる。ただし幅6mというのは街道並であり、実際に「道」であったのは2間程と考えるのが常識的である<sup>14)</sup>。

同様の手法により、常木遺跡B区1面1号道は図1~4の③⇒部分に相当し、遅くとも近世から昭和までの旧道であったことがわかる。

## 2. 井戸遺構

上増田鳥遺跡において中世以降と思われる4基の井戸が検出された。B区1号井戸は断面漏斗状を呈す。上半のすり鉢状の部分は素掘り<sup>15)</sup>で螺旋状をなし、礫を据え置いて筒状の井戸側上端まで降りられる構造である。井戸枠の有無は不明である。A区2号井戸は断面漏斗状を呈す。筒状の井戸側から出土した削り抜いた木の幹を、井戸枠として使用していた可能性がある。すり鉢状の部分は埋没土がレンズ状に堆積し、素掘りのまま使用していたのか筒井戸の掘り方なのか断定できない。A区3号井戸は断面漏斗状を呈す。2段に掘り下げた掘り方に裏込めをし、底面から上端まで礫を積み上げる。平面三角形の長辺中央をやや低くし、揚水の作業スペースを設ける。D区1号井戸は断面漏斗状の掘り方に裏込めをし、筒井戸としている。井戸側下半は石組で、上半は残存していないが裏込め材の違いから木組の可能性が高い。深さはいずれも2mに達しない浅いも



## まとめ

のである。

以上の4基のうちB区1号井戸とA区3号井戸は明らかに使用状態の形状が断面漏斗状を呈し、特にB区1号井戸は螺旋状の構造を持つことや、揚水のために筒状の井戸側上端まで降りることなど、所謂まいまいず井戸と共通の特徴を持つ。「まいまいず井戸は武蔵野台地とその周辺に多く見られ、現存するものとして青梅市新町の大井戸<sup>16</sup>、羽村市五ノ神のまいまいず井戸<sup>17</sup>、あきる野市淵上の石積井戸<sup>18</sup>、狭山市堀兼の井<sup>19</sup>、同市七曲井<sup>20</sup>などが、発掘例として府中市ことぶきマンション地区の井戸<sup>21</sup>、同市京王府中マンション地区の井戸<sup>22</sup>、鶴ヶ島市若葉台遺跡群<sup>23</sup>、埼玉県入間郡大井町大井戸遺跡<sup>24</sup>、調布市下石原遺跡<sup>25</sup>などが挙げられる。このほか伊豆諸島にも新高<sup>26</sup>などに見られる。武蔵野台地は関東ローマ層の下層に透水性の良い厚い砂礫層が堆積しており、水捌げがよい。よって地下水を得るのが困難であるため、深く掘削する必要がある。まいまいず井戸の構造は、厚く堆積した脆い砂礫層を容易に深く掘削するための工夫であったと考えられる<sup>27</sup>。

詳細な使用時期は不明なものが多い。府中市例は出土遺物の時期がまとまっていることから、京王府中マンション地区が「7世紀末葉から8世紀の初頭」の掘削、「9世紀後葉の頃」の廃絶・埋め戻し、ことぶきマンション地区が平安時代の掘削・埋め戻しと報告されている。堀兼の井は古くから文献にその名が登場し、初出は9世紀の『伊勢集』である。武蔵野の堀兼とはっきり地域が特定されるのは12世紀の『千載集』であり、遅くともこのころまでは「ほりかねのい」と呼ばれる井戸が存在したと思われる。ただし狭山市近辺にはまいまいず井戸の構造をもつ井戸が複数あったようで、「ほりかねのい」も特定の井戸を指すのではなく、この構造をもつ井戸全般を指したようである<sup>28</sup>。他の井戸も出土遺物などから主に9世紀頃から江戸時代前半の使用を考察している。江戸時代も後半になると上総掘りなど深く筒井戸を掘る技術が普及し、まいまいず井戸のような、深さに比して上段を大規模に掘り広げる技

術は廃れたのであろう。

上増田鳥遺跡は広瀬川低地帯の旧中州上に立地し<sup>29</sup>、地山は砂質で非常に脆い。武蔵野台地のまいまいず井戸例から、鳥遺跡の4基とも掘り方が断面漏斗状を呈するのはこの地質によるものであろう。特にB区1号井戸はまいまいず井戸の技術を直接的に用いたものであろう。武蔵野台地例は最大の七曲井で上端径が18~26m、すり鉢部の深さ7m、筒状の井戸側の深さ3.5m以上を掘り、他の井戸も鳥遺跡例より大規模である。これは地下水位の深さによると考えられる。鳥遺跡では全て総深2m以内であり、遺跡周辺の井戸使用時の地下水水位がこの付近であったと推測できる。

すり鉢部を素掘りのまま使用するB区1号井戸は、もともと容易な掘削技術を用いているといえる。これに対し、礫を積み上げるA区3号・D区1号井戸はより高い技術や費用・労力が必要である。ために石組み井戸の遺構は素掘り井戸に比べて数が少なく、特にA区3号井戸のように円礫を断面漏斗状に積み重ねた例を知らない。熊谷市北鳥遺跡例<sup>30</sup>は断面すり鉢状に石積し、最下部を筒状に浅く掘って曲げ物を据え、水溜としている。最下部が曲げ物か礫かの違いがあるが、構造的に近い。但し、一段低い作業場は無いようである。

このような特殊な井戸は、屋敷などある程度の上層階級の敷地に位置するか、むら全体で共有する大切な井戸であると予想する。鳥遺跡の遺構分布を見た時、A区3号井戸・D区1号井戸ともそれぞれ区画溝と考えられるA区2・6号溝、D区10・13溝に囲まれた位置にある。2・6号溝は出土遺物から同時に機能していた可能性があるが、10・13溝の新旧関係は掘めておらず、井戸を含めて遺構の詳細な時期も大雑把にしか判断できない。しかしながら、遺構が集中して分布しており、D区では大型の掘立柱建物が存在することなどから、溝で区画された屋敷に付随する井戸であると考えられる。

B区1号井戸は、武蔵野台地例より古代から江戸時代前半までの技術で掘削されたものである。ただ

し伊豆諸島には江戸時代後半の天明年間に掘削したすり鉢状の例があり、これは専門技術者がいない中で容易な掘削技術を採用したものと理解できる。よってB区1号井戸は、江戸後半以降の掘削であれば専門技術者を用いず個人または村内であまり手間をかけずに掘削し、1軒または数軒程度で使用したもので、A区2号・D区1号井戸とは違う性格を有する。江戸前半以前であれば、先の2例と同時期なら屋敷外でむら人が使用するもの、単独の時期であれば崩落しやすい素掘り井戸をむら内共同で使用していたと評価できよう。

### 3. 中世の瓦

上増田島遺跡出土の中世瓦は、整理担当により予め10点が抽出されていた。観察を依頼された筆者は、瓦というシステム量産された遺物としては数量が少なすぎるので再度近世以降とされた瓦を集積してもらい実見したが数量は変わらず、整理担当の選択眼は正しかった。観察と実測については事前に打ち合わせの上行われた。観察の内容は観察表の通りである。内訳は17頁006男瓦、30頁214男瓦、86頁328字瓦、86頁327・329女瓦、165頁056燈瓦、173頁071・080・083男瓦、173頁413女瓦である。

観察の結果、胎土は056燈瓦と他の9点に2大別できる。056は県内製の須恵器の一部、中世軟質陶器、古代瓦の一部と中世以降の瓦に見る胎土と共通の軽質で、鉱物を含む素地はやや荒く、荒目の粒状の所々に気泡空間を有する特徴を持っている。残りの9点は、軽質ながら素地の目はつみシルトから粘土の間の質であり、気泡空間も少なく、夾雑の鉱物粒も少ない特徴がある。前例は、地区は特定できないながらも、県内製としてよい製品である。後例の一群は、胎土の重みから地質でいう第三紀層以前の陶土に根ざす緻密さはなく、第四紀以降の形成層に起因する素地に見え、しかも胎土の粒状から山土やローム層が河川によって押し出され、中流域以下に自然堤防・台地形成とその発達に伴う滞水域に生じたであろう天然水簾的な粘土分離された粘土堆積層を作

瓦に用いたと推測された。このような平野部に流出した粘土を用いたであろう製品は、県内であれば、大泉町・邑楽町にまたがる軟質陶器窯場の小泉焼、藤岡市の藤岡瓦、埼玉県深谷市の深谷瓦などが知られるところで、各々水田中の田土を粘土として使用しているが、後例の一群より粒度は荒い。粒度の細かさは、粘土の堆積が大規模に起こり得る場所であり、滞水域を思う時、それは自然堤防なり台地形成の際の末端的な位置と想定される。こうした台地形成は相当大規模であったと考えられるので、群馬県内であれば玉村町や伊勢崎市以東の地域、埼玉県では古利根川・荒川などが平野部に向かいさらに比企丘陵中の河川が土壌を流出させて生じた本庄台地・櫛引台地以南の台地を想定しておきたい。後群は既出資料の中では尾島町長楽寺遺跡、高崎市浜川北遺跡、三夜沢赤城神社境内瓦の一部に共通性がある。追川佳子は「宮城村三夜沢赤城神社採集の中世遺物について」『研究紀要14』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団1997の中で埼玉県美里町水殿瓦窯での製作の可能性を述べている。筆者も同資料を実見しているが当団歴史部会でも同窯跡の見学を行い表採資料を得ていて、比較上追川氏の推定は妥当性があり、賛意を表したい。そのため後群の9点は埼玉県水殿瓦窯とその周辺地域の可能性を考えておきたい。

瓦の意匠はか製作年代については以下の通りである。056の燈瓦は外区に連珠文を配する瓦当面で背面に男瓦接合の為のカキヤブリが施される。県内製品に通ずる胎土ではあるが、カキヤブリは県内中世瓦では後半以降のため、場合によっては火中変質した近世瓦の可能性もある。328の字瓦は9点同様の胎土の個体中の1点である。文様は唐草文でおそらく中心飾りをもつ意匠と考えられる。范型には割れの一部と唐草文の葉手端を彫り直した円形の古傷が認められ、描き起し図に示しておいた。この意匠は平面的には15世紀以降に上野国で広く流布した細線の唐草文に似ているが、当資料は他の8点と共通時期の製品と考えられるので、13世紀後半に上野国で盛行していた太線唐草文・剣頭文の様式展開を考えると

## まとめ

き異風である(大江正行「人々のくらし」『新編高崎市史 通史編2 中世』2000などを参照されたい)。この点は上野国で13・14世紀の頃に展開した剣頭文、太線の均正唐草文と15・16世紀に展開した細線の唐草文、流水文と異なる系譜ということになる。そのため描き起し図を以て高字瓦Ⅰ型と瓦当面型式名をあたえておく。

男瓦・女瓦は、5点・3点がある。前出の宇瓦を加え、胎土・焼成は共通性があり、相互は近接した時期で一連の造瓦組織により製作されたと考えられる。この中で女瓦413の背面には製作台文様圧痕が、329の背面には背面文様付女瓦を重ねたらしい大格子らしい文様の圧痕が見られる。女瓦413は大斜格子内に米字状の施文が入り、相互は二条線で区画されている。この二条線と大斜格子は意匠上13世紀後半と考えられ、おおむね他の個体もその頃の製品であろう。なお女瓦413について高女瓦Ⅰ型の名称をあたえておきたい。

以上の結果が得られたのであるが、問題は、胎土は埼玉県製と考えられること、水殿瓦窯であれば神奈川県鎌倉市永福寺にも瓦が供給されているので、中世都市鎌倉にも同范例の存在が予測される。そのため製作地の可能性のある埼玉県を(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団赤熊浩一氏に、同范瓦の存在の可能性がある中世都市鎌倉を鎌倉市教育委員会小林康幸氏に石膏型を通じて資料照会をお願いした。その結果、水殿瓦窯跡を含む埼玉県内既出の中世瓦と比較してくださった赤熊氏は、宇瓦に同范はなく、中世前半での細線唐草文の展開は皆無ではないが薄弱であり、女瓦Ⅰ型の施文も同范例は無いとのことであった。胎土については水殿瓦窯のほか、妻沼町地域付近までの広域を考えた方が上野国との流通を考える上で適切ではないかとご教示を頂いた。一方、鎌倉市の小林氏は中世都市鎌倉に宇・女瓦文様ともに同范例はなく、群馬県側から見て埼玉県北部に製作地が予測されるのであれば、県北の中世瓦研究者と交流をもつべきではないかと教えて頂いた。

残念ながら県外研究者による資料照会で同范確認

は果たせず、今後に期することとなったが、地域史上から当瓦の存在を考えたとき、県下の窯跡を除く古代瓦の出土地が100ヶ所を上回るのに対し、鎌倉時代瓦の出土地は12・13ヶ所と極めて少なくその背後に有力特権階層の存在が考えられるようになった。同時期の小地域の中心地域は特権階層宅を囲む集落・寺院などが室町時代ほど村落単位で分化発達せず、近接して存在していた頃でもあり、この地の周囲がそうした場所であった可能性が示唆される。

## 4. 島遺跡出土の遺物傾向

須恵器(174頁380)や埴輪片(162頁407・408、165頁410・406、171頁412、175頁411、185頁409)など中世以前の遺物はきわめて少なく、この時期の遺構も確認されていないことから全て流れ込みによるものであろう。埴輪は小片ながら、径や突帯形状、基底部最下位のナデ<sup>28</sup>などから5世紀後半と考えられる。

中世遺物は先述の瓦のほか、龍泉窯系青磁碗(56頁301、96頁346、172頁379・417、182頁393)、陶器壺・甕・鉢(20頁013、40頁233、42頁397、47頁282・283、58頁330、97頁342・343・345、100頁386・398・402、171頁077、173頁015~017・061)、軟質陶器鍋(20頁010、171頁076、184頁067)、軟質陶器すり鉢(17頁012、100頁387、172頁085)、土器皿(171頁075、174頁014、184頁143・144・394)、板碑(116頁497、117頁502、166頁510、177頁526)、銭(40頁574、42頁586)、石塔などがある<sup>29</sup>。いずれも数点ではあるが、330など常滑系で渾美窯と思われる12世紀の甕から弱く続いており、「2. 遺跡の地理的歴史的環境」で述べた石造物の存在を合わせて考えると、遅くとも14世紀までにはこの地での中世における人々の生活が根付いたといえよう。これら遺物はA・B区よりもD1・2区からより多く出土する傾向がある<sup>30</sup>。また、D区1号井戸から15世紀頃の五輪塔・宝篋印塔などの部材が多数出土し、108頁525、121頁536、165頁509や166頁512など未製品あるいは半製品とも考えられる石製遺物がD区から出土していること

から、遺跡周辺に石工の存在を想定することもできよう。

江戸時代になると、17世紀の遺物は薄く、29頁154・155、35頁170・171、99頁396、162頁375、171頁073・074、182頁110・136、184頁066など10数点である。17世紀末以降、特に18世紀後半のものから急増する。京・信楽系あるいは京焼風陶器（28頁187、29頁191、45頁252、182頁105・140など）、陶器香炉（89頁272、117頁002、165頁043、185頁138など）、天目碗（117頁370、174頁378）、耳壺（173頁060）などの遺物を含んでおり、18世紀頃、遺跡やその周辺において文雅な生活を送る人々の存在を思わせる。

19世紀から幕末・明治の遺物はC・D区に少なく、A・B区を中心に出土する傾向がある。先に見た村絵図にはどちらも屋敷の記載があり、この理由ははっきりしない。

ところで島遺跡の南南西500mには蓮花院という寺院がある。「由緒沿革書」<sup>27)</sup>によれば開山は天文二（1533）年玉泉坊による。中興は下野国出身の十一世尊上人、現本堂は十二世舜賢上人により元禄三（1690）年に建立された。本尊は天文二年「民部師」作聖観音菩薩で、ほかに明応年間（1492～1501）の聖観音菩薩がある。墓地には天和三（1683）年、貞亨三（1687）年、貞亨四年、元禄十一（1698）年、元文四年（1739）年の墓石があり、江戸時代に付近の檀家の墓地であった。住職の話<sup>28)</sup>によると、現在の寺の場所はかつて檀家の土地であり、現蓮華院は近在の複数の寺を集めて中興とし、本尊及び明応仏もその内のどこかの寺の所持仏だったのではとの事であった。

島遺跡の瓦などの中世遺物や地割りは、蓮花院中興以前にD区周辺に寺が存在した可能性を示すであろう。屋敷を区画すると思われる溝や石組の井戸、文雅な雰囲気のある遺物も蓮花院やその前身との関係を念頭に考える必要がある。

## 【註】

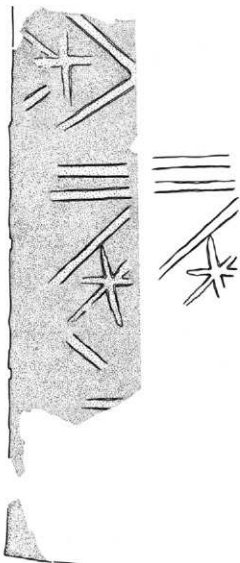
- (1) 硬化面を検出したわけではなく、遺構の分布に基づく推測である。
- (2) 近代以降は拡散されたであろう。また溝と道の間がどのような景観であったかは不明である。
- (3) 井戸に関する用語は基本的に宇野隆夫氏に従う。宇野隆夫 1982「井戸考」『史林』65-5 また井戸の分類及び事例は鈴木孝之 1990「古代～中近世の井戸跡について（1）」『研究紀要』7（財）埼玉県歴史文化財調査事業団 同 1991「石組みの井戸跡について～古代～中近世の井戸跡について（2）～」『埼玉考古論集』を参考にした。
- (4) 青梅市遺跡調査会 1994「青梅市新町の大井戸発掘調査概報」
- (5) 羽村町教育委員会 1990「はむらの歴史」
- (6) 角田清美 1993「湖上の石組井戸についての自然地理学的研究」『専修人文論集』52
- (7) 角田清美 1996「武蔵野台地における鎌倉街道に沿う古井戸の自然地理学的研究」『専修人文論集』58
- (8) 狭山市教育委員会 1973「七曲井」
- (9) 府中市教育委員会 1980「武蔵国府岡連遺跡調査報告書Ⅱ」
- (10) 府中市教育委員会 1991「武蔵国府 府中市遺跡調査会年報昭和56（1981）年度」
- (11) 鶴ヶ島町教育委員会 1983「若葉台遺跡群C～I地点発掘調査報告書」
- (12) 大井町教育委員会 1976「大井戸遺跡発掘調査報告書」
- (13) 生田周治 1988「調布市下石原遺跡で発見された古代の井戸について」『東京考古』6
- (14) 角田清美 1994「伊豆諸島の古井戸についての自然地理学的研究」『専修人文論集』54
- (15) まいまい井戸に関する自然地理学的な知見は角田清美の一連の仕事に依った。文献（6）（7）（13）のほか、角田清美 2002「武蔵野台地西端付近の下り井戸」『専修人文論集』70
- (16) 遺跡周辺の地形と地質については「2. 遺跡の地理的歴史的環境」を参照されたい。
- (17) 財）埼玉県歴史文化財調査事業団 1989「北島遺跡」
- (18) 南雲芳昭 1993「IV-5-(2) 出土埴輪の様相」『寛政宮川遺跡 寛政宮原遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (19) 中世から17世紀と考えられる遺物は石塔などの破片を除いて全て掲載した。18世紀以降は選択して掲載した。

まとめ

- (20) 地割りでみたとき、A・B区の「道」と比べてC・D区の「道」の方が継続性が強い。中世においてはA・B区よりC・D区が人々の活動の中心に近く、この時代の地割りが近世以降も残っている可能性がある。
- (21) 木瀬村誌編纂委員会 1995『木瀬村誌』に依る。
- (22) 現住職の富岡照民氏から'03年9月にお話を伺った。



島宇瓦I型描き起し図 (No.328)



島女瓦I型描き起し図 (No.413)



図1 群馬県勢多郡城南村木瀬地区全区 (1/6000)



図2 二万分一地形圖



図3 二万分一迅速測圖

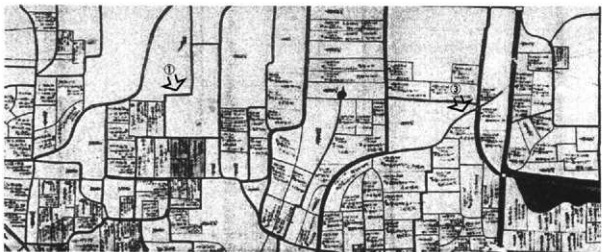


図4 地引村繪圖 下増田村 (群馬県立文書館所蔵)



図5 地利村絵図 上増田村 (群馬県立文書館所蔵)

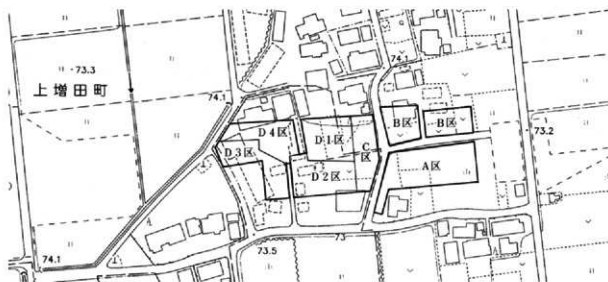


図6 前橋市現形図 (1/2500) 一部加筆

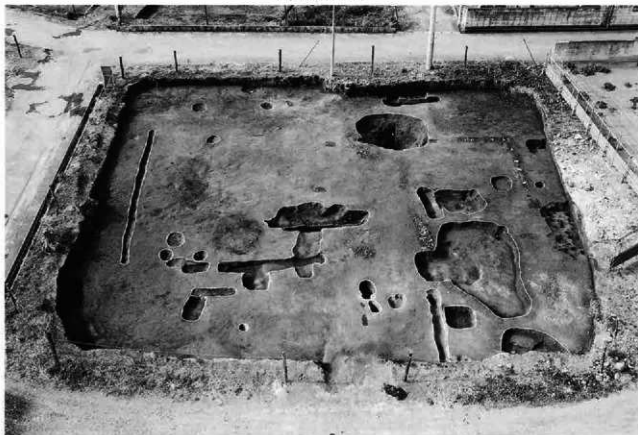
写 真 図 版  
上 増 田 島 遺 跡



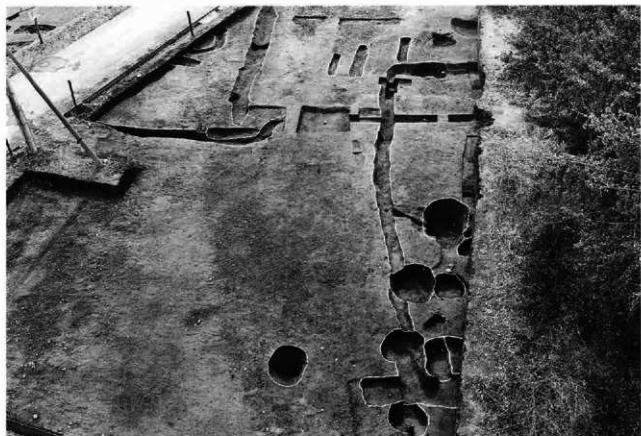




A区全景(西から)



B区西側全景(東から)



C区全景(北から)



D1区第2面全景(北から)



D2区第2面全景(北から)



D区第2面全景(南から)



D区1面1号掘立柱建物全景(東から)



C区1面1号柱列1号ビット礫出土状況(南西から)



C区1面1号柱列2号ビット礫(№556)出土状況(西から)



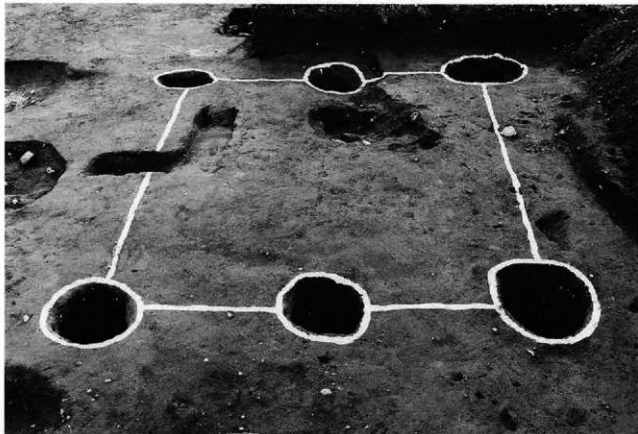
C区1面1号柱列3号ビット礫出土状況(東から)



C区1面1号柱列3号ビットセクション(東から)



B区1号掘立柱建物露出土状況(東から)



B区1号掘立柱建物掘り方(北から)



B区1号掘立柱建物1号ピット掘出土状況(南から)



B区1号掘立柱建物2号ピット掘出土状況(西から)



B区1号掘立柱建物3号ピット掘出土状況(西から)



B区1号掘立柱建物4号ピット掘出土状況(西から)



B区1号掘立柱建物4号ピット掘出土状況(北から)



B区1号掘立柱建物5号ピット掘出土状況(南から)



B区1号掘立柱建物6号ピット掘出土状況(南から)



A区1号柱列3号ピットセクション(西から)



A区1号柱列2号ピット全景(南から)



A区3号柱列1号ピット掘出土状況(西から)



A区1・2号溝全景(北から)



A区1号溝西隔遺物出土状況(東から)



A区2号溝遺物出土状況(東から)





A区2号溝Bラインセクション(南から)



A区1号溝遺物(No215)出土状況(北西から)



A区1号溝遺物出土状況(北から)



A区5号溝遺物出土状況(北から)



A区5号溝礫出土状況(北から)



A区6号溝遺物(No230・466)出土状況(東から)



A区6号溝全景(東から)



A区7号溝全景(南から)



B区1号溝全景(東から)



B区5号溝全景(東から)



B区1号井戸全景(西から)



B区1号井戸礫出土状況(北西から)



B区1号井戸礫出土状況(東から)



B区1号井戸セクション(西から)



A区2号井戸遺物出土状況(北から)



A区2号井戸遺物出土状況(北から)



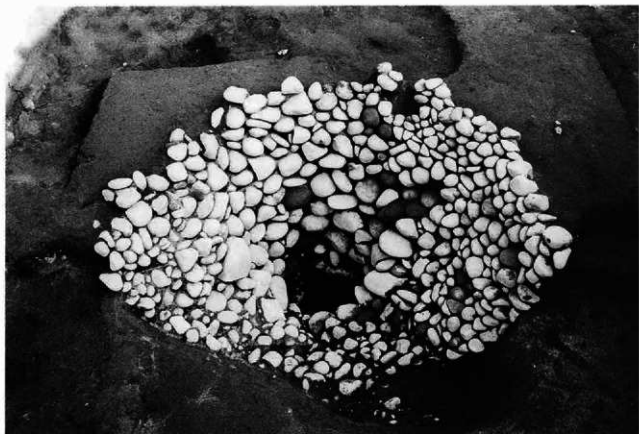
A区2号井戸遺物(No485)出土状況(東から)



A区2号井戸遺物(No556-2・568)出土状況(北から)



A区2号井戸筒部全景(北から)



A区3号井戸全景(西から)



A区3号井戸礫出土状況(西から)



A区3号井戸掘り方(西から)



A区3号井戸掘り方Bラインセクション北半(西から)



A区3号井戸掘り方Bラインセクション南半(西から)



A区1号畠全景(北から)



A区1号道跡出土状況(北から)



A区1号集石土坑跡出土状況(北から)



A区2号集石土坑Bラインセクション(東から)



A区1・2号集石土坑全景(東から)



A区1・2号集石土坑掘り方(東から)



A区1号集石土坑掘り方(南から)



A区3号集石土坑出土状況(東から)



A区3号集石土坑掘り方(西から)



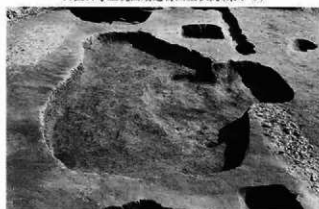
A区A号土坑遺物出土状況(南西から)



A区A号土坑西端遺物出土状況(東から)



A区A号土坑Bラインセクション(西から)



B区1号集石土坑全景(西から)



B区1号集石土坑セクション(東から)





A区1号土坑全景(南から)



A区2・3号土坑全景(南西から)



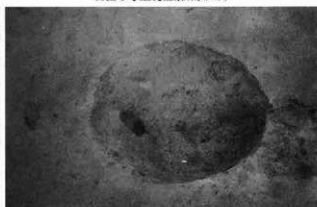
A区4号土坑全景(西から)



A区5号土坑全景(南から)



A区6号土坑全景(西から)



A区7号土坑全景(西から)



A区8号土坑セクション(西から)



A区9号土坑全景(南から)



A区10・12号土坑全景(南から)



A区12号土坑全景(北から)



A区13・44号土坑全景(南から)



A区14号土坑全景(西から)



A区15号土坑全景(東から)



A区16号土坑全景(東から)



A区17号土坑全景(南西から)



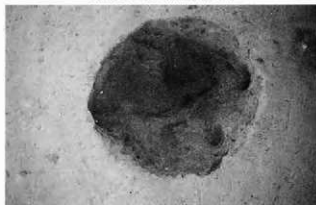
A区18号土坑全景(西から)



A区19号土坑全景(北西から)



A区20号土坑全景(南から)



A区28号土坑全景(西から)



A区29号土坑全景(南から)



A区31号土坑全景(西から)



A区32号土坑全景(西から)



A区33号土坑全景(東から)



A区35号土坑セクション(南から)



A区36号土坑全景(西から)



A区37号土坑全景(西から)



A区39号土坑全景(南から)



A区41号土坑全景(南から)



A区42・43号土坑全景(南から)



A区44号土坑全景(西から)



A区46号土坑全景(南から)



A区47・48号土坑全景(東から)



A区49号土坑セクション(南西から)



A区22・51~53号土坑全景(南から)



A区54号土坑セクション(西から)



A区55号土坑全景(南から)



A区56号土坑セクション(西から)



A区57号土坑セクション(西から)



A区57号土坑全景(南から)



A区58号土坑全景(東から)



A区65号土坑全景(北から)



A区66・67号土坑全景(東から)



A区69・70・78・83号土坑全景(東から)



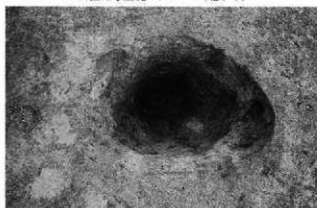
A区71号土坑セクション(南から)



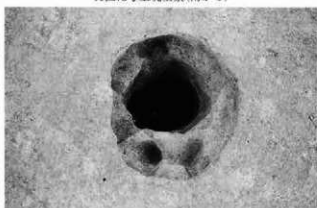
A区72号土坑セクション(北から)



A区73号土坑全景(南から)



A区76号土坑全景(東から)



A区77号土坑全景(東から)



A区78号土坑全景(南から)



A区63・64・82号土坑全景(西から)



A区82号土坑セクション(北から)



A区83号土坑全景(南から)



A区84号土坑セクション(西から)



A区85号土坑全景(西から)



A区86～88号土坑全景(北から)



A区89号土坑全景(西から)



A区91号土坑セクション(西から)



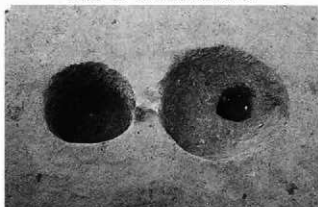
A区92・93号土坑全景(東から)



A区94・95・117号土坑全景(南から)



A区97号土坑全景(東から)



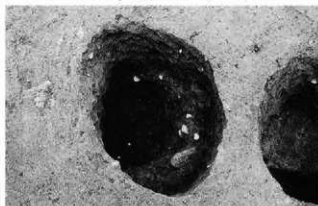
A区101・102号土坑全景(南から)



A区104号土坑セクション(南から)



A区105号土坑全景(南から)

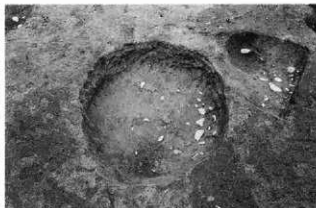


A区111号土坑全景(西から)





A区113号土坑全景(北から)



A区114号土坑全景(南から)



A区115号土坑全景(南から)



A区116号土坑全景(東から)



A区118号土坑全景(南から)



A区122号土坑全景(西から)



A区124号土坑全景(南から)



A区128・132・143号土坑全景(西から)



A区129号土坑セクション(西から)



A区130号土坑全景(北から)



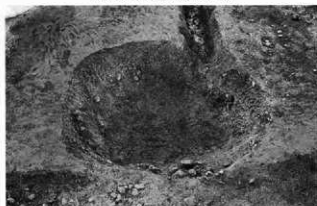
A区123・131・136号土坑全景(西から)



A区134号土坑全景(南から)



A区135号土坑遺物出土状況(西から)



A区135号土坑全景(東から)



A区141号土坑全景(南から)



A区142号土坑全景(西から)



A区146号土坑全景(西から)



A区147号土坑全景(西から)



A区148号土坑全景(南から)



A区149・150号土坑全景(東から)



A区153号土坑全景(北から)



B区4号土坑全景(西から)



B区6号土坑全景(西から)



B区7号土坑全景(西から)



B区8号土坑全景(南から)



B区9号土坑全景(東から)



B区10号土坑全景(西から)



B区11号土坑セクション(西から)



B区12号土坑出土状況(北から)



B区14号土坑全景(北から)



B区15号土坑全景(南から)



B区18号土坑全景(南から)



B区19号土坑全景(東から)



B区20号土坑全景(南から)



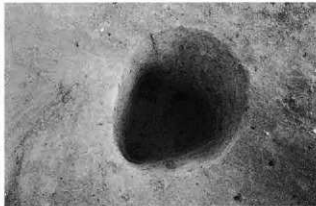
B区22号土坑全景(北から)



B区23号土坑遺物(№340・341・583)出土状況(東から)



B区25号土坑全景(北から)



B区26号土坑全景(西から)



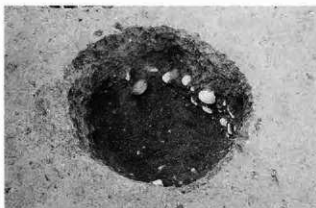
B区28号土坑全景(西から)



B区24・29号土坑全景(西から)



B区32号土坑全景(南から)



B区33号土坑全景(東から)



B区34号土坑全景(南から)



B区35号土坑全景(西から)



B区37号土坑全景(南から)



B区38号土坑全景(南から)



B区39号土坑全景(西から)



B区41号土坑全景(東から)



B区42号土坑全景(南から)



B区43・44号土坑全景(南西から)



B区45・46号土坑全景(南から)



B区52号土坑全景(東から)



B区53・54号土坑全景(南東から)



B区57号土坑全景(東から)



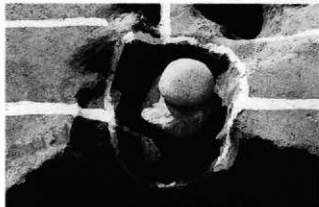
B区58号土坑全景(南から)



B区59号土坑全景(西から)



D区2面1・2号掘立柱建物、1号柱列全景(東から)



D区2面1号掘立柱建物1号ビット礎石(№517)出土状況(北から)



同8号ビット礎石出土状況(南から)



同13号ビット礎石(№524)出土状況(北から)



同14号ビット礎石出土状況(西から)





同20号ピット礎石出土状況(南西から)



D区1号柱列13号ピット根固め石出土状況(東から)



C区1号溝全景(南から)



D区5・6号溝、78号土坑全景(東から)



D区8・9号溝全景(東から)



D区10号溝全景(東から)



D区10号溝東平全景(東から)



D区10号溝・C区14号土坑重複部分(東から)



D区18号溝全景(南から)



D区20号溝全景(東から)



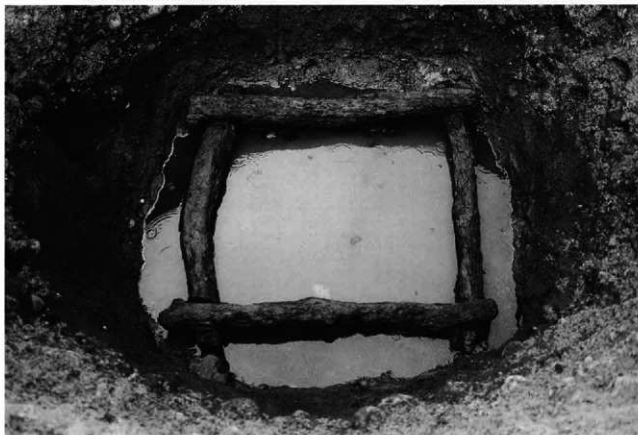
D区1号井戸全景(北から)



D区1号井戸作業風景(北から)



D区1号井戸石積南東隅部(北西から)



D区1号井戸井戸枠出土状況(北から)



D区1号井戸井戸枠南東隅仕口部(北西から)



D区1号井戸出土井戸枠(上から№564・562・563・565)



D区57-59号ピット、81号土坑全景(東から)



C区1・2号土坑全景(北から)



C区3号土坑全景(北から)



C区4号土坑全景(西から)



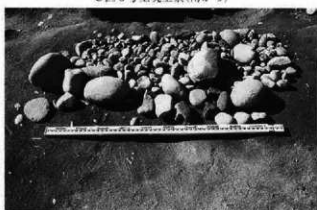
C区5号土坑全景(北から)



C区6号土坑全景(南から)



C区7号土坑セクション(西から)



C区7号土坑出土理



C区8号土坑埋出土状況(西から)



C区7・8号土坑全景(東から)



C区9号土坑全景(東から)



C区10・11号土坑全景(東から)



C区12号土坑全景(西から)



C区14号土坑セクション(西から)



C区14号土坑全景(北から)



C区15・16号土坑全景(北から)



D区244号土坑東半全景(東から)



D区60~63号土坑全景(東から)



D区65号土坑全景(東から)



D区66号土坑全景(西から)



D区67号土坑セクション(西から)



D区67号土坑全景(南から)



D区69号土坑全景(南から)



D区70号土坑全景(西から)



D区71号土坑全景(東から)



D区78号土坑全景(南から)



D区79号土坑全景(南から)



D区80・84号土坑全景(東から)



D区82号土坑全景(東から)



D区85号土坑全景(東から)



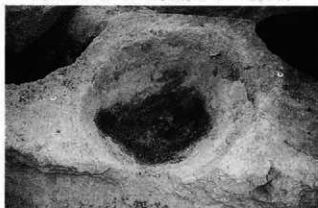
D区85・86号土坑全景(南から)



D区66・88・90・94～96号土坑セクション(南から)



D区101～103号土坑全景(西から)



D区114号土坑全景(南から)



D区122号土坑礫出土状況(南から)



D区135号土坑全景(西から)



D区135号土坑遺物(No090・091)出土状況(西から)



D区169・170号土坑全景(北から)



D区173号土坑全景(北から)





D区177号土坑遺物(No543)出土状況(南から)



D区182号土坑全景(西から)



D区183号土坑全景(東から)



D区209号土坑セクション(南から)



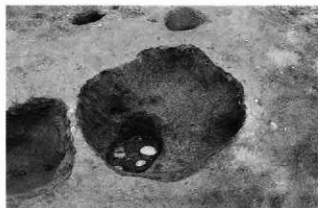
D区185～188・192～195号土坑全景(南から)



D区227・238・239号土坑全景(南から)



D区231号土坑全景(南から)



D区233・234号土坑全景(南から)



D区236・237号土坑全景(西から)



D区89・246号土坑全景(南から)



D区247号土坑全景(西から)



D区250号土坑全景(南から)



D区260号土坑全景(北から)



D区261号土坑全景(北から)



D区262号土坑全景(北から)



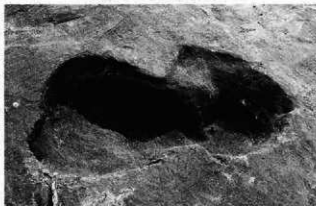
D区263号土坑全景(東から)



D区264・265号土坑全景(東から)



D区266・267号土坑全景(北から)



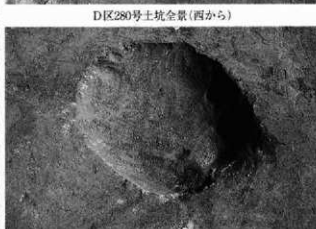
D区200・201号土坑全景(北から)



D区202号土坑全景(南から)



D区280号土坑全景(西から)



D区281号土坑全景(西から)



D区287号土坑全景(東から)



D区289号土坑全景(南西から)



D区290・299号土坑全景(西から)



D区291号土坑全景(東から)



D区292号土坑全景(西から)



D区302号土坑全景(南西から)



D区308・313号土坑遺物(No096)出土状況(南から)



D区398号土坑全景(東から)



D区325号土坑全景(西から)



D区326・335号土坑全景(西から)



D区328号土坑全景(東から)



D区331・332号土坑全景(東から)



D区336号土坑全景(西から)



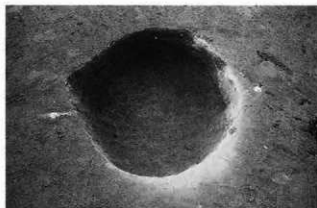
D区346号土坑全景(西から)



D区347号土坑全景(西から)



D区348号土坑全景(西から)



D区349号土坑全景(東から)



D区350号土坑全景(東から)



D区351号土坑全景(東から)



D区356号土坑全景(南から)



D区358号土坑全景(南から)



D区359号土坑全景(南から)



D区362~364号土坑全景(西から)



D区367号土坑全景(南から)



D区369号土坑全景(西から)



D区357・374-377号土坑全景(南から)



D区378号土坑全景(西から)



D区384号土坑全景(東から)

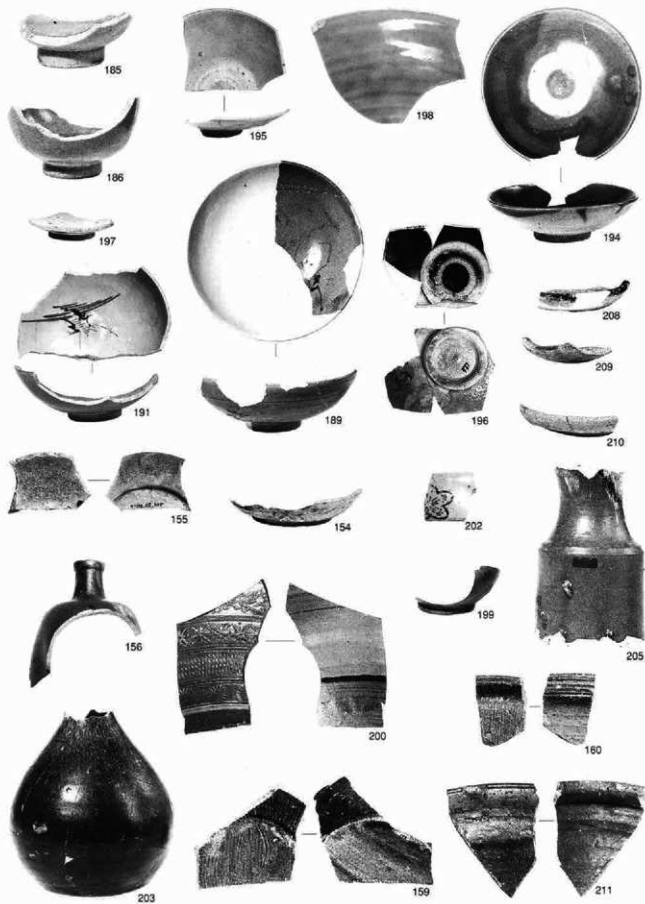


D区368・385-396-2号土坑全景(北から)



D区1号沟·土坑、C区1号柱列、B区1号掘立柱建物、A区1号沟出土遗物





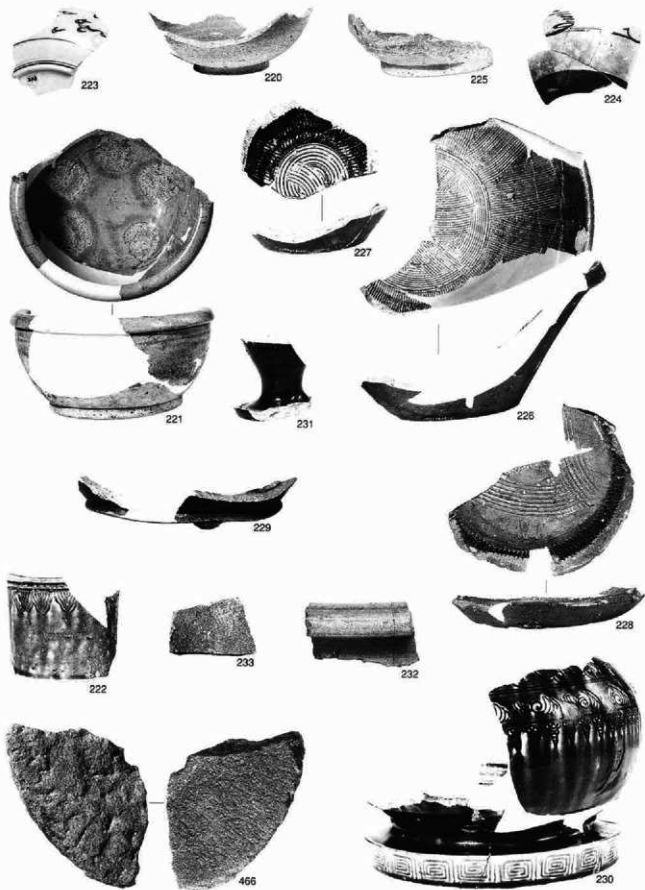
A区1号溝出土遺物



A区1·2号溝出土遺物



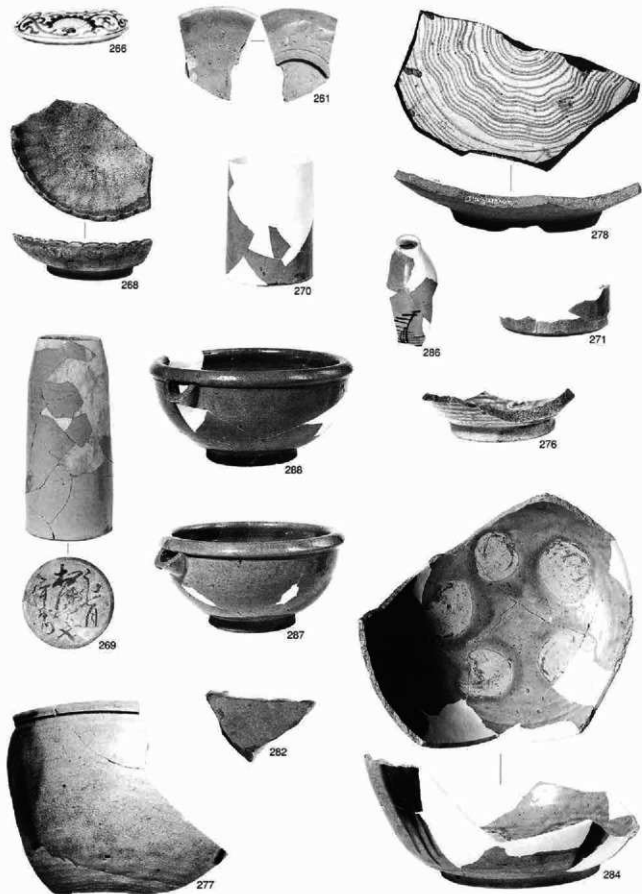
A区2·5号溝出土遺物



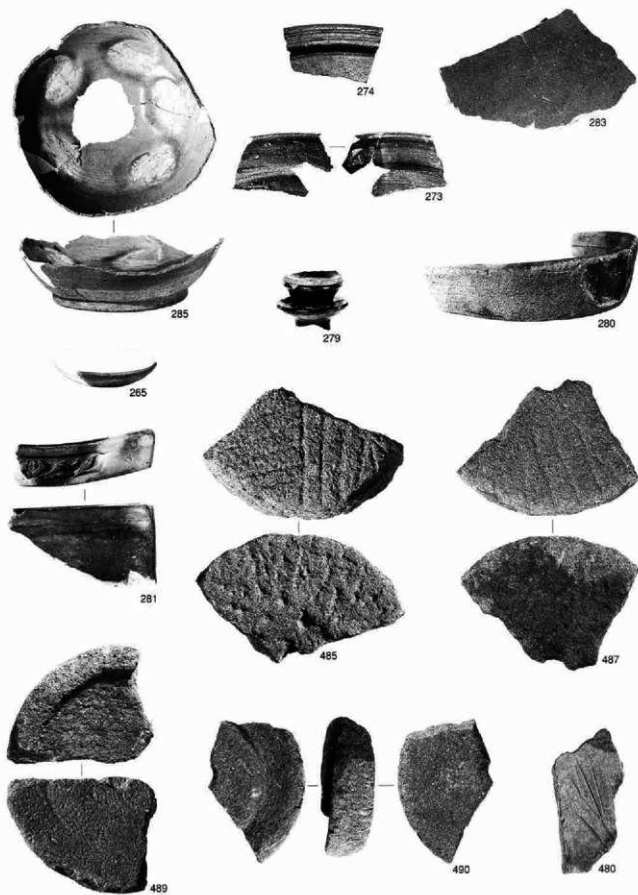
A区6号溝出土遺物



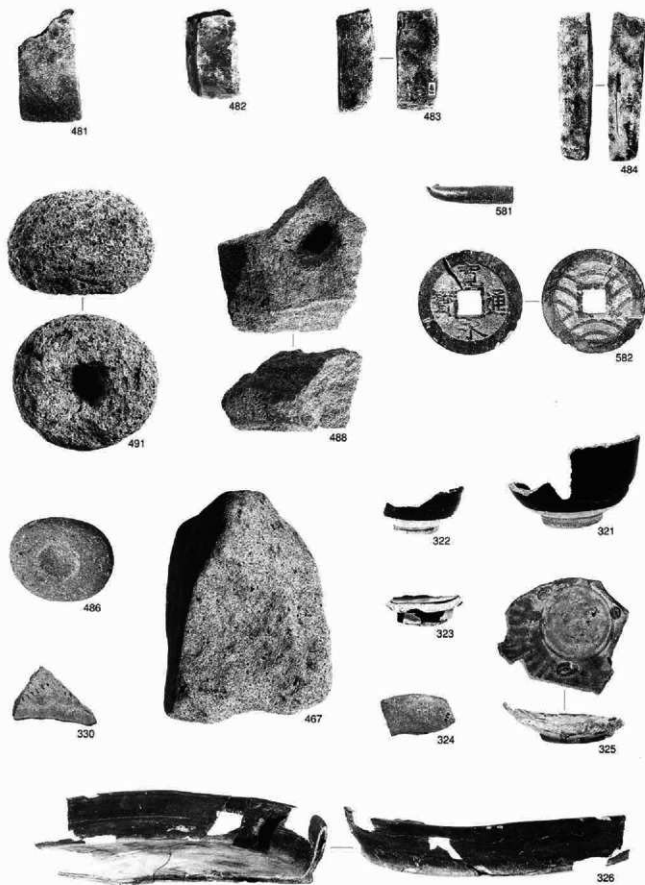
A区6号·B区5号溝、B区1号·A区2号井戸出土遺物



A区2号井戸出土遺物

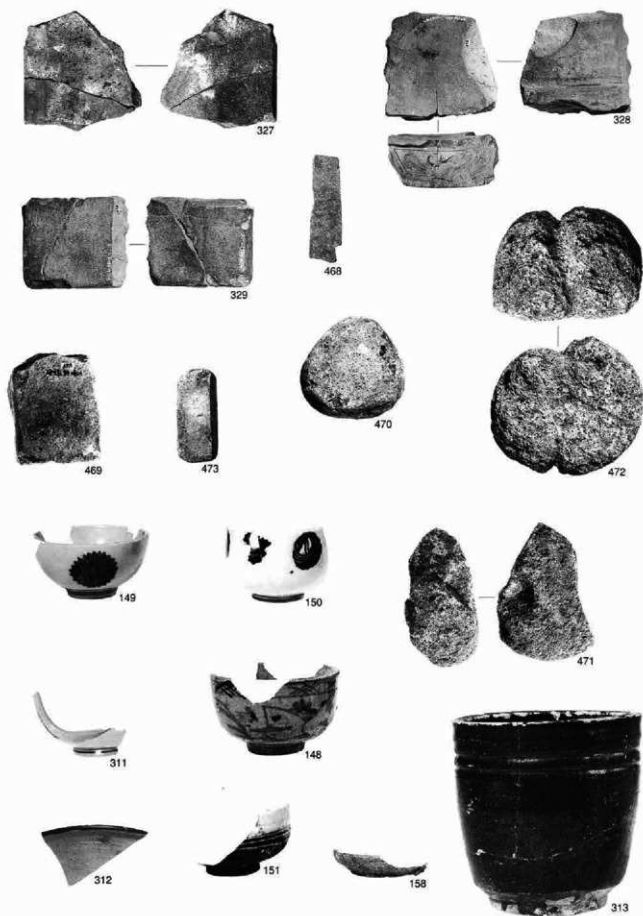


A区2号井戸出土遺物



A区2号井戸・1号道・1号集石土坑出土遺物





A区1~3号集石土坑·A号土坑出土遗物



314



316



315



310



317



318



479



477



478

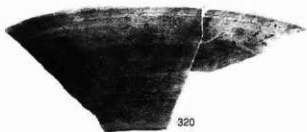


272



161

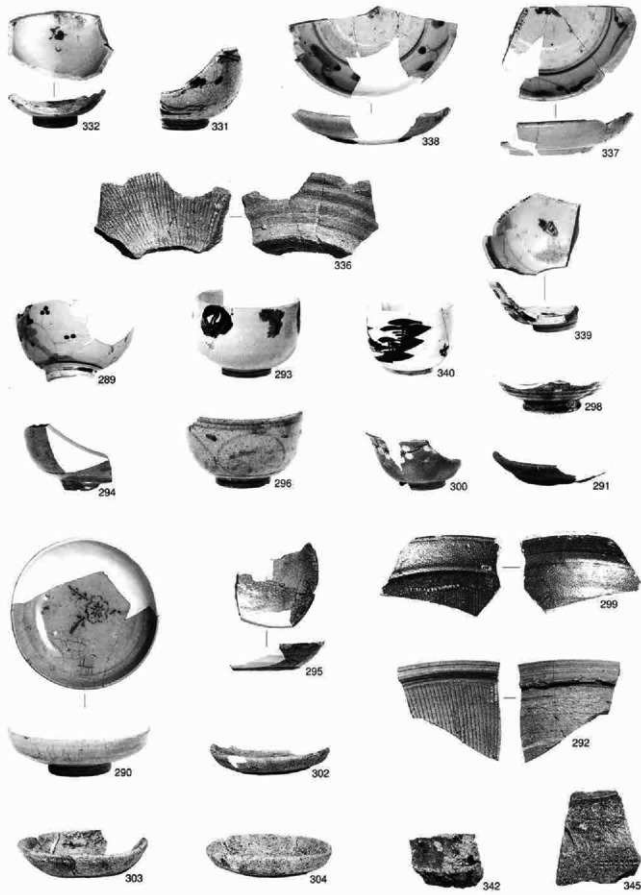
A区A号土坑出土遺物



A区A号土坑、B区1号集石土坑出土遗物



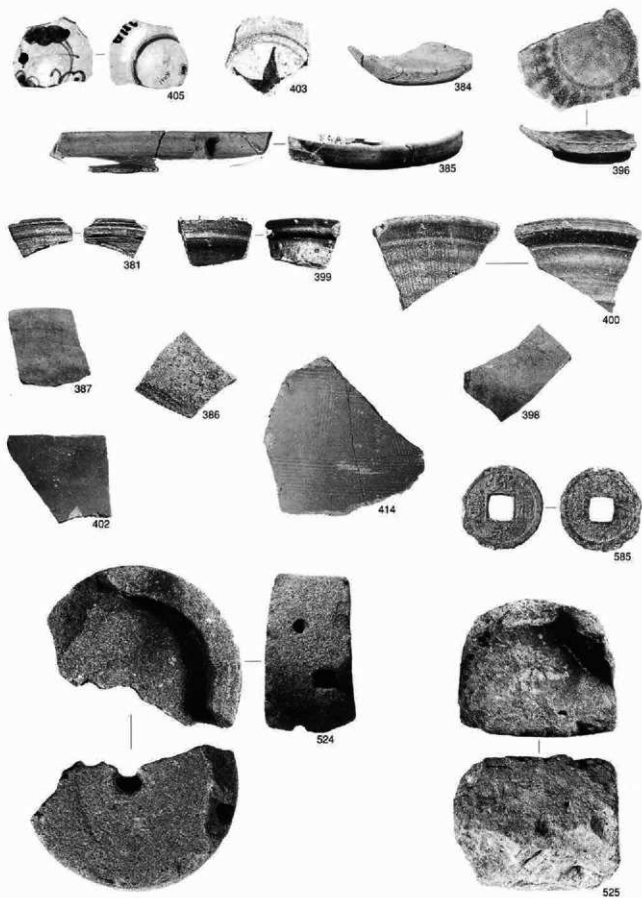
B区1号集石土坑、A区135号土坑、B区11号土坑出土遗物



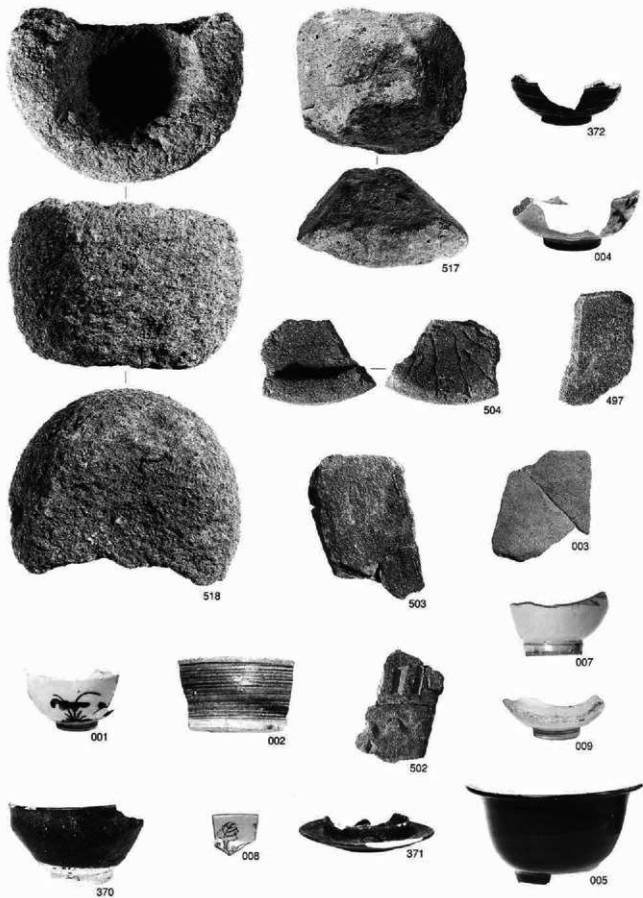
B区11号土坑、A·B区土坑出土遗物



A·B区土坑、道槽外出土遗物

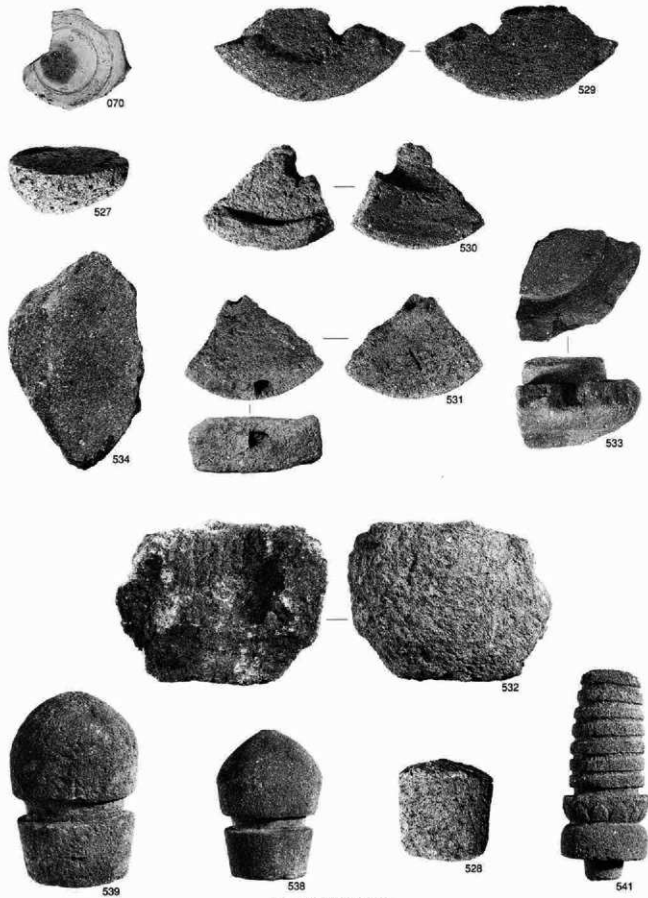


A·B区道構外、D区2面掘立柱建物出土遺物

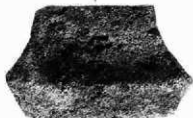


D区2面掘立柱建物、C・D区2面溝出土遺物

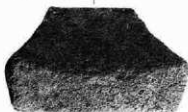




D区1号井尸出土遺物



540



542



535



536



537



377



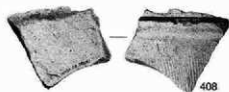
376



499



375



408



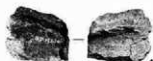
500



031



033



407



030



032

D区1号井戸、C区14号土坑、D区78号土坑出土遺物



021



022



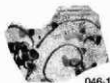
023



024



026



046-1



029



027



025



034



028



037



035



036



038



049



040

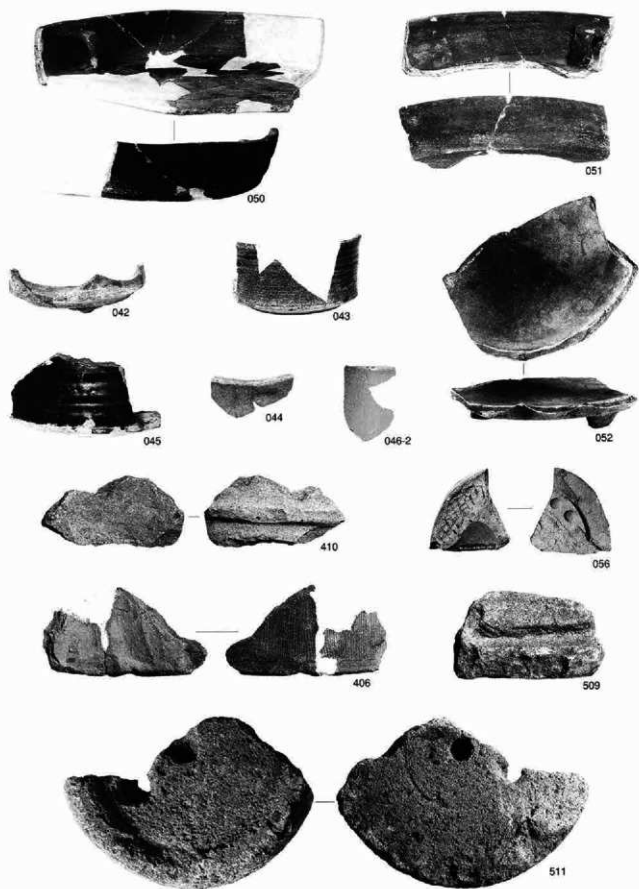


039

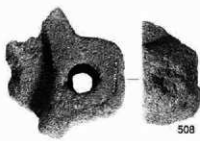
D区78号土坑出土遗物



D区78号土坑出土遗物



D区78号土坑出土遗物



508



512



510



063



064



520



519



065



095



090



091

D区78·112·135号土坑出土遗物



093



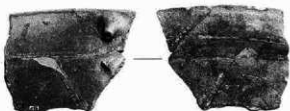
092



094



073



076



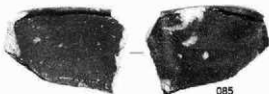
074



412



077

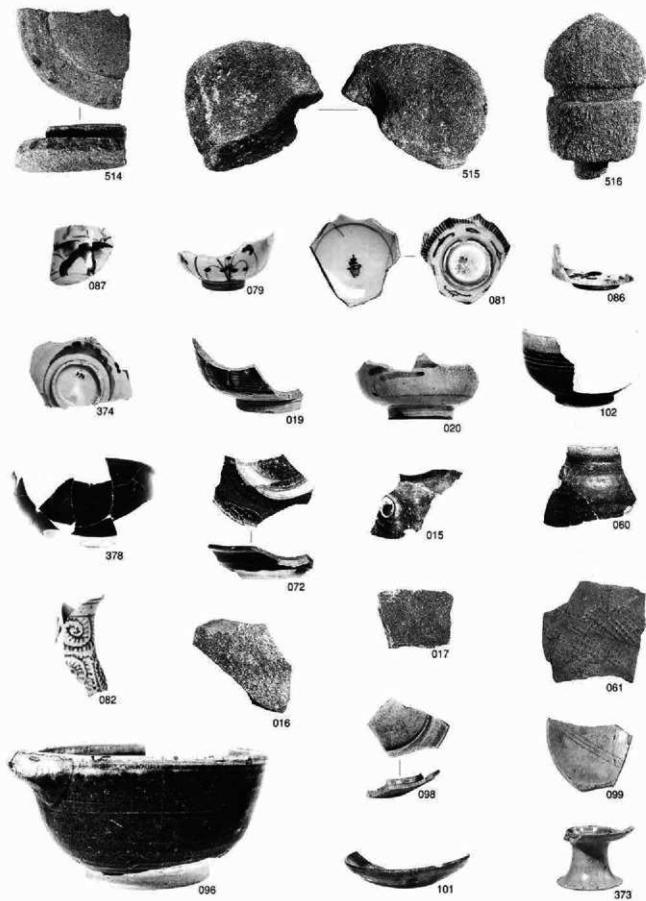


085



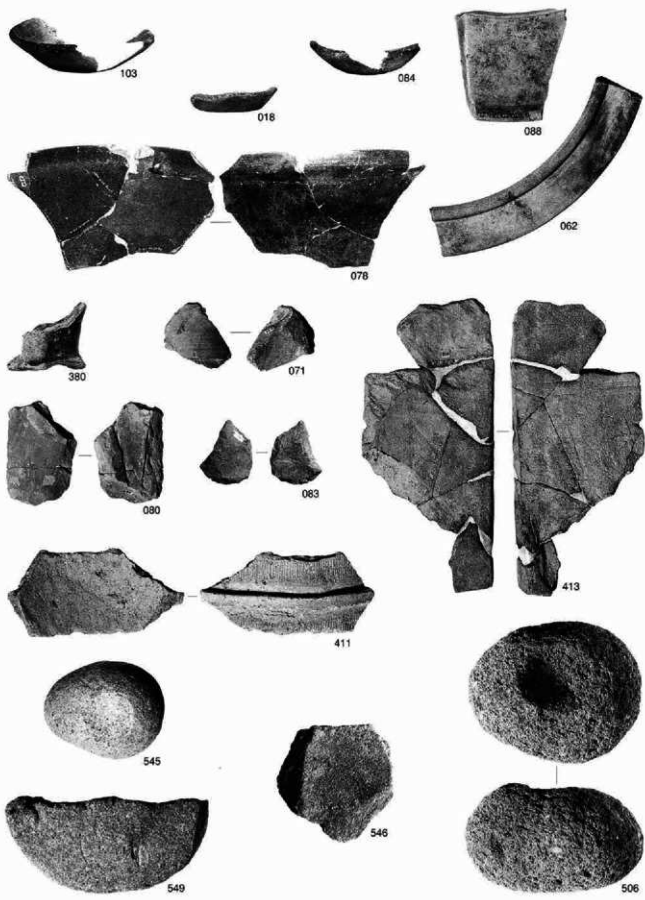
513

D区135·183·241号土坑出土遗物



D区241号土坑、C·D区2面土坑出土遗物

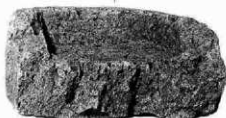




C·D区2面土坑出土遺物



521



543



505



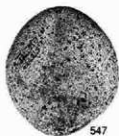
507



551



522



547



526



590



598



601



595

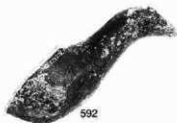


588

C·D区2面土坑出土遗物



596



592



597



113



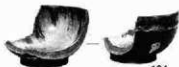
097



118



139



104



108



135



105



106



146



137



120



112



110



136



129



117

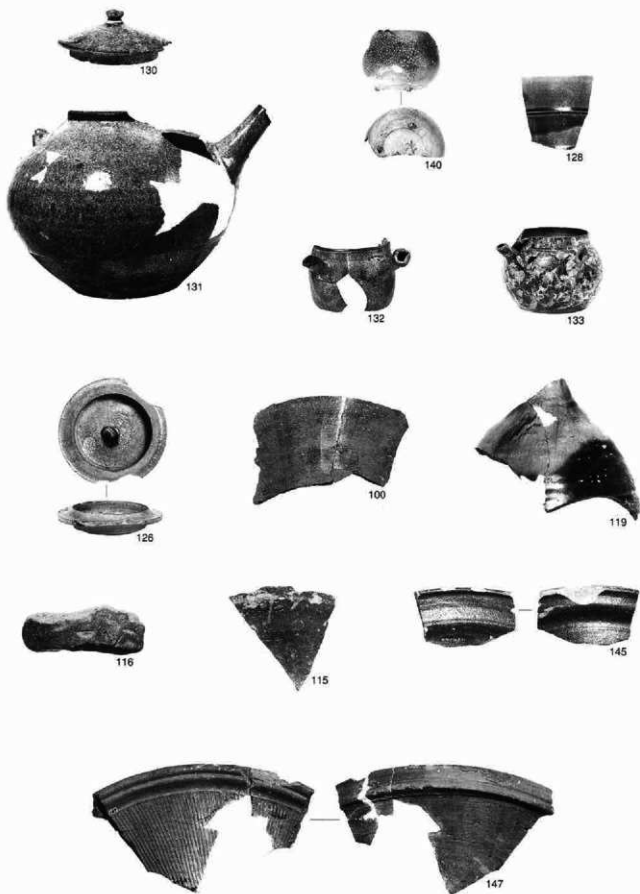


111

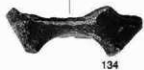
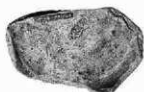
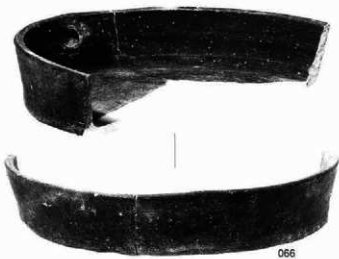
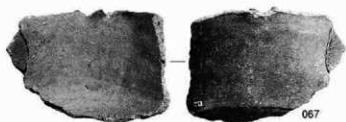


141

C·D区2面土坑、2面遺構外出土遺物



C·D区2面遺構外出土遺物



C·D区2面遺構外出土遺物



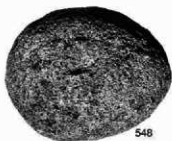
409



416



107



548



550



552

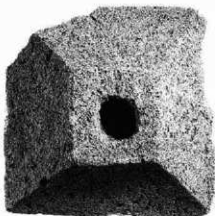


523

C·D区2面遺構外出土遺物



553



554



555



600



599



593

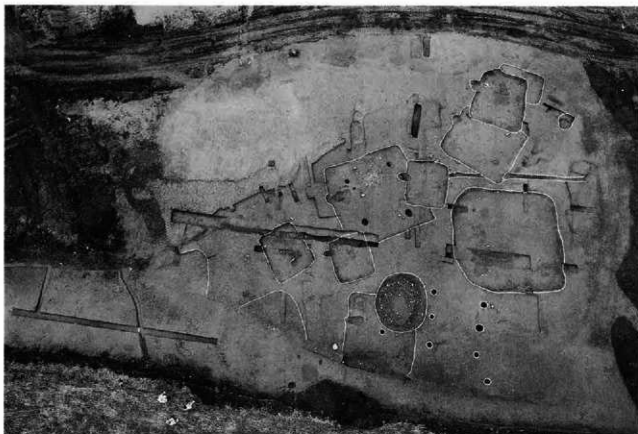
C·D区2面遺構外出土遺物

写 真 図 版

下 增 田 常 木 遺 跡







B区住居全景(北から)



B区住居全景(西から)



1号住居生活面全景(西から)



1号住居遺物出土状況(西から)



1号住居竈掘り方全景(南西から)



2号住居遺物出土状況(北から)



2号住居遺物(No.9)出土状況(南から)



2号住居遺物(No3)出土状況(北東から)



2号住居竈使用面全景(西から)



2号住居竈掘り方全景(西から)



3号住居竈Cラインセクション(南から)



3号住居生活面全景(西から)



3号住居竈Bラインセクション(西から)



3号住居竈北袖内遺物(No1)出土状況(北西から)



3号住居竈掘り方全景(西から)



4号住居遺物出土状況(西から)



4号住居生活面全景(西から)



4号住居使用面全景(南西から)



4号住居竈Cラインセクション(西から)



4号住居竈掘り方Dラインセクション(南から)



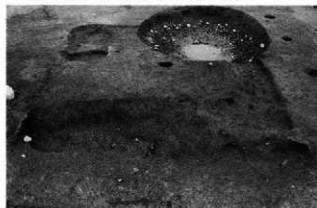
5号住居遺物出土状況(西から)



5号住居竈使用面全景(西から)



5号住居遺物(No.5)出土状況(南西から)



5号住居掘り方全景(北から)



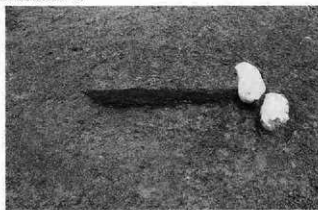
5号住居竈掘り方全景(西から)



6号住居遺物出土状況(南西から)



6号住居生活面全景(南東から)



6号住居炉セクション(西から)



7号住居遺物出土状況(西から)



7号住居遺物(No.20)出土状況(南から)



7号住居遺物(No30・40付近)出土状況(北西から)



7号住居遺物(No30・40付近)出土状況(北から)



7号住居遺物(No17・37・39)出土状況(東から)



7号住居炉セクション(西から)



7号住居掘り方(北から)





8号住居遺物出土状況(西から)



8号住居遺物出土状況(西から)



8号住居竈遺物(No.11)出土状況(南西から)



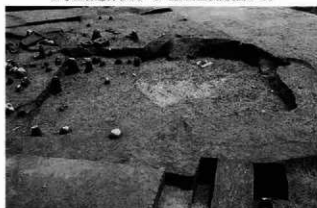
8号住居竈使用面全景(西から)



8号住居遺物(No.5・6・13)出土状況(西から)



8号住居出土雑



9号住居遺物出土状況(西から)



9号住居竈遺物(No.4)出土状況(西から)



9号住居竈遺物(No.4)出土状況(南から)



9号住居竈使用面全景(西から)



9号住居竈掘り方全景(西から)



10号住居遺物出土状況(東から)



11号住居遺物出土状況(北東から)



11号住居遺物(No.3)出土状況(北から)



1号掘立柱建物全景(西から)



B区水田全景(東から)



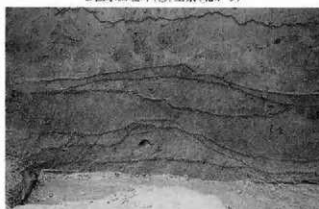
B区水田全景(北西から)



B区水田畦畔(④)全景(北から)



B区水田畦畔Aラインセクション



B区水田畦畔Bラインセクション



C区2面水田(C1区分)全景(北から)



C区2面(C2区分)・D区水田全景(北から)



D区水田畦畔(⑥)全景(北東から)



1号畠全景(西から)



2号畠全景(西から)



B区1面1号道全景(西から)



A区1～3号溝・2面A号溝全景(南から)



2面A号溝・B区2面B号溝全景(北東から)



B区2面1～3号溝全景(東から)



B区2面1号溝東端部(西から)



B区2面1号溝Cラインセクション(東から)



B区2面4号溝全景(西から)



D区1号溝杭列検出状況



D区1号溝1号ピットセクション(南東から)



D区1号溝2号ピットセクション(南から)



B区2面5号土坑全景(北東から)





B区2面5号土坑セクション(東から)



B区1面6・7号土坑全景(南から)



B区2面10号土坑南半全景(南西から)



B区2面10号土坑北半全景(西から)



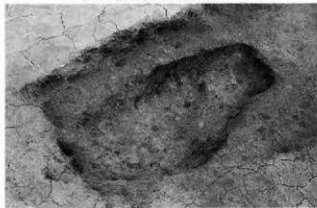
B区2面11号土坑セクション(南から)



B区2面11号土坑全景(南から)



B区2面13・14号土坑全景(東から)



B区2面13号土坑全景(南から)



B区2面14号土坑Bラインセクション(北東から)



B区5号住居P1セクション(西から)



B区1号土器集積遺物(No8)出土状況(南から)



C区包含層遺物出土状況



C区包含層遺物出土状況大圓付近(南西から)



C区包含層遺物出土状況拡大図付近(西から)



B区FP泥流検出状況(北東から)



B区FP泥流土層(北西から)



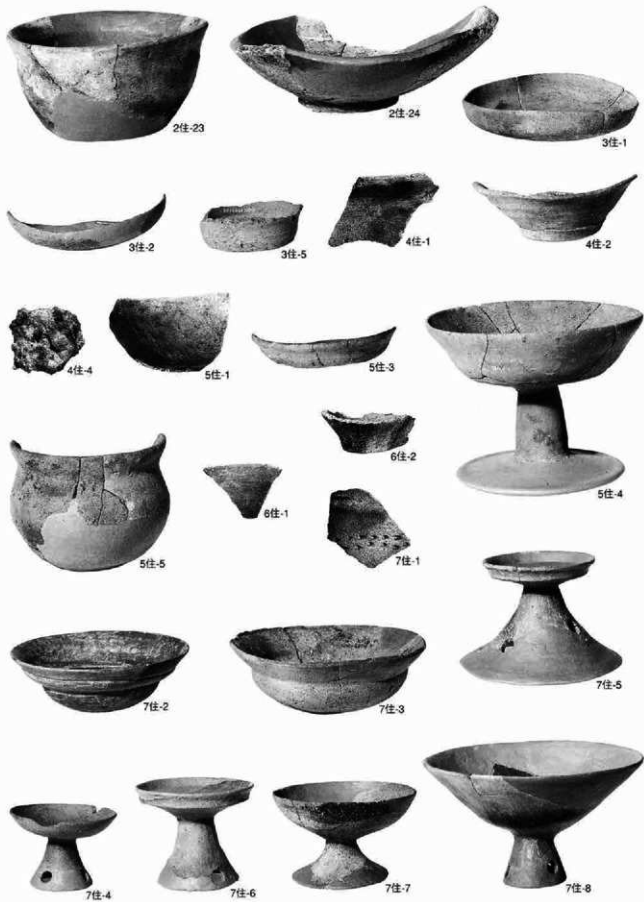
B区試掘風景



B区住居作業風景(西から)



1・2号住居出土遺物



2～7号住居出土遺物



7住-9



7住-11



7住-12



7住-10



7住-15



7住-13



7住-14



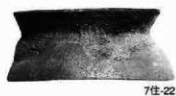
7住-16



7住-17



7住-18



7号住居出土遺物



7住-30



7住-36



7住-37



7住-32



7住-38



7住-34



7住-41

7号住居出土遺物





7住-39(1)



7住-42



7住-39(2)



7住-40



8住-1



8住-3



8住-4



8住-6

7・8住居出土遺物



8住-5



8住-10



8住-9



8住-11



8住-12

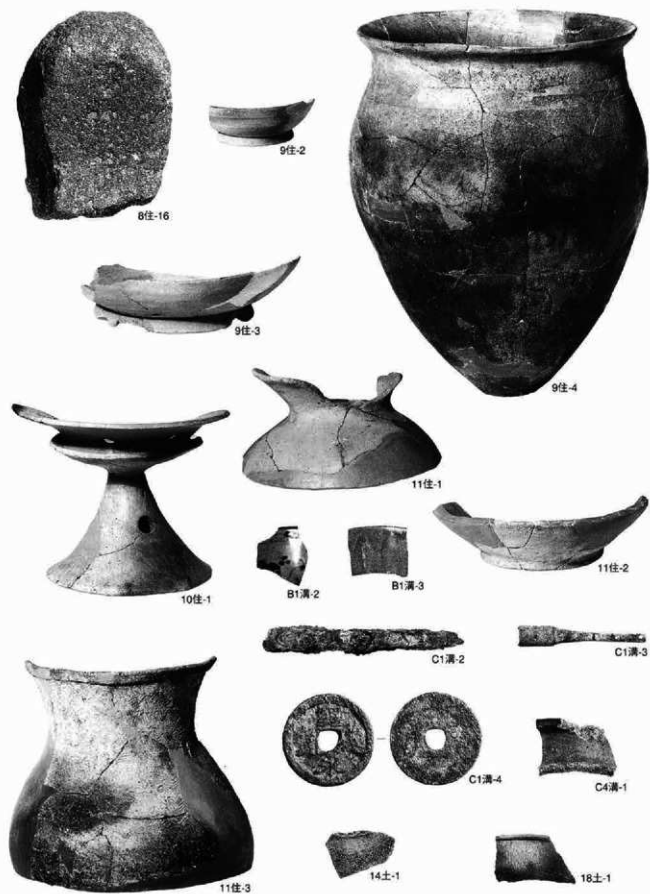


8住-13

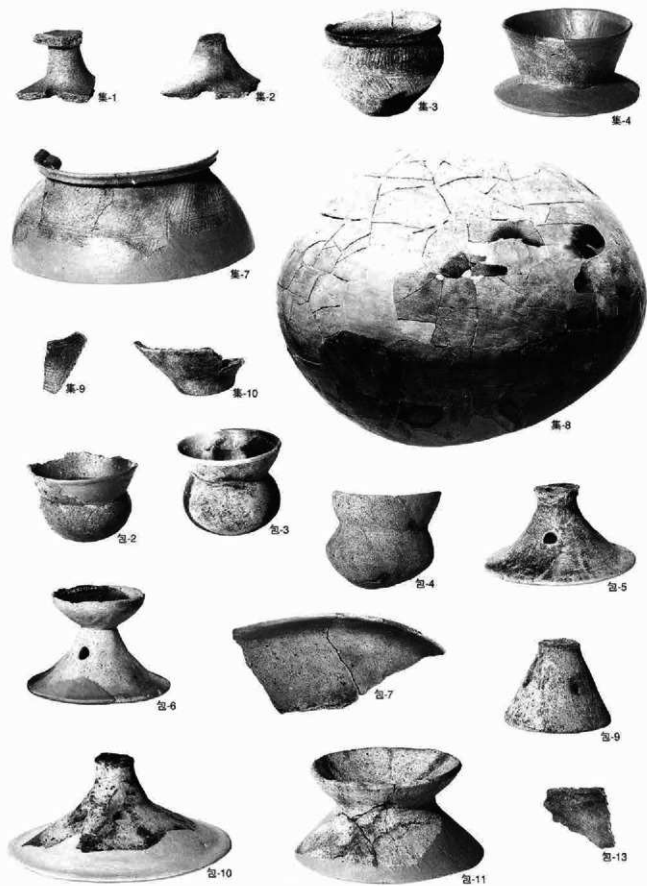


8住-15

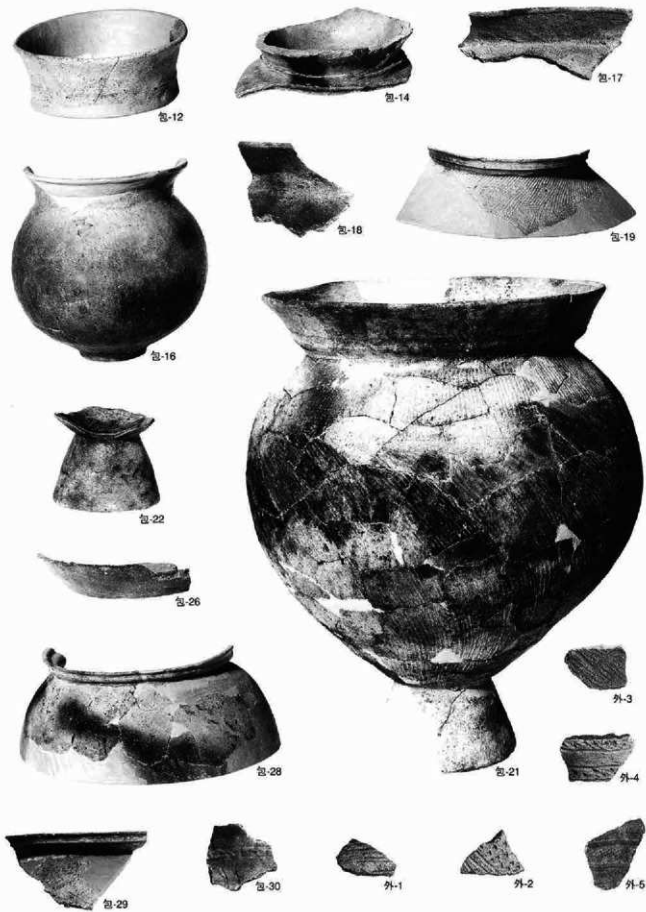
8号住居出土遺物



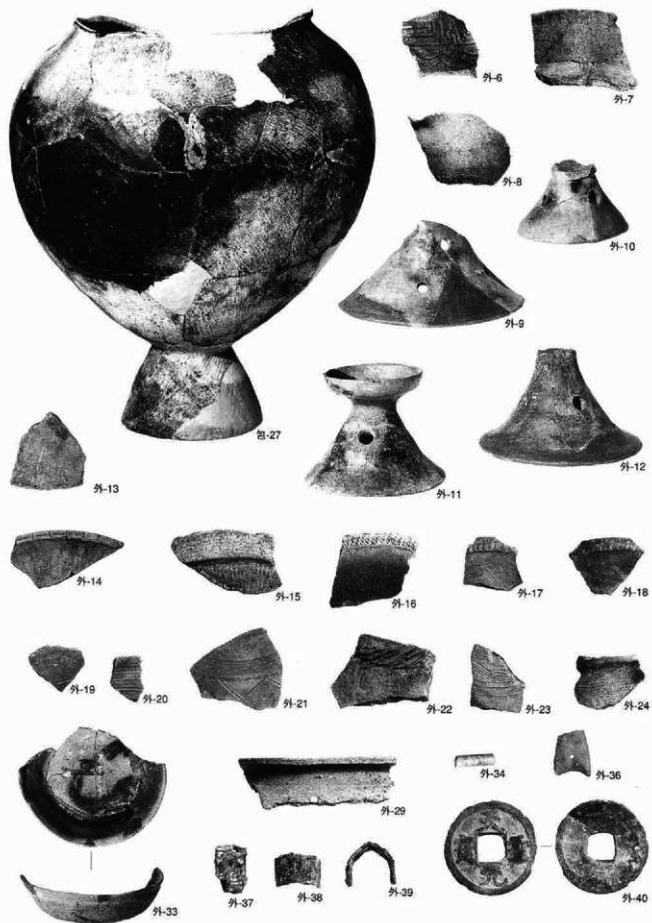
8~11号住居、B区2面1号溝、C区1・4号溝、B区14・18号土坑出土遺物



B区1号土器集積、C区包合層出土遺物



C区包含層、道構外出土遺物



C区包含层、道槽外出土遗物

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	かみすだしまいせき しもすだつねいせき
書名	上増田島遺跡 下増田常木遺跡
副書名	北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第22集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第326集
編著者名	齊藤幸男 大江正行 中東耕志
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511
発行年月日	2004年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上増田島遺跡	前橋市上増田町 下増田町	102041		36度 20分 54秒	139度 9分 5秒	19981001 ～ 20000331	8,250	北関東自動車 道建設に伴う 事前調査
下増田常木遺跡	前橋市下増田町	同上		36度 20分 54秒	139度 9分 13秒	19970212 ～ 19981106	7,774	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
上増田島遺跡	集落 生産	中世 近世	掘立柱建物 井戸 溝 土坑 土坑 畠	5棟 4基 29条 459基 1面	近世陶磁器、龍泉窯系 青磁、中世土器、軟質 陶器、在地系土器、石 塔、砥石、金属製品、 木製品、銭	屋敷を囲むと考えられる 溝、漏斗状の構造をもつ 井戸。文字で記された焼 跡をもちつる磁器。
下増田常木遺跡	集落 生産	弥生時代 ～ 平安時代 近世	住居 掘立柱建物 水田 畠 溝 土坑	11軒 1棟 3面 1面 25条 12基	弥生時代中・後期土器、 土師器、須恵器、石器、 金属製品、木製品、銭	弥生時代後期～平安時代 の住居、弘仁九年及び近 世の洪水層に埋没する水 田。弥生時代中期土器、 同中～後期の石甕。古墳 時代須恵器甕。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第326集

上 増田 島 遺 跡  
下 増田 常 木 遺 跡

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

平成16年3月9日 印刷

平成16年3月15日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

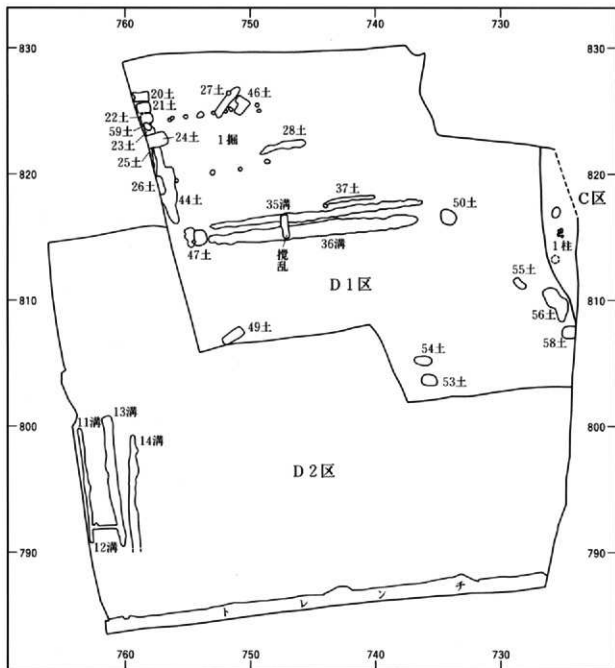
電話 (0279) 52-2511(代表)

<http://www.gunmaibun.org/>

印刷／杉浦印刷株式会社

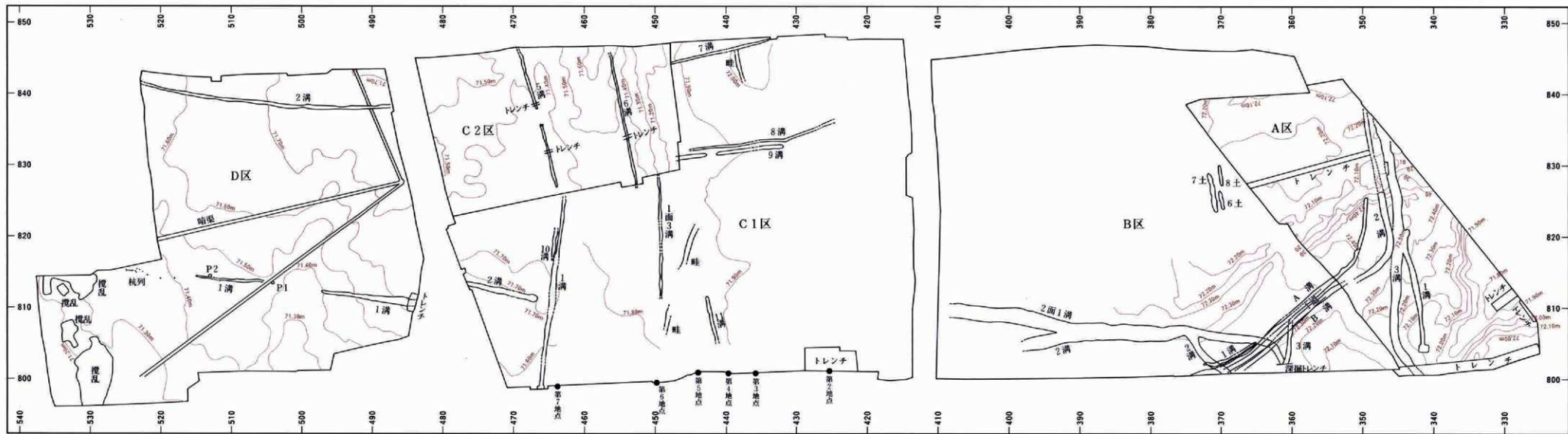


# 上増田島遺跡C・D区第1面全体図 1/300





下増田常木遺跡中世以降全体図 1/400



下増田常木遺跡古代以前全体図 1/400

